

GLAFS

博士課程教育リーディングプログラム
「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」

Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

2018 活動報告書

目次

CONTENTS

第1章	プログラムについて……003
1	プログラムの概要……004
2	カリキュラムと修了要件……005
3	プログラム担当教員……008
4	履修生に対する経済的支援……011
5	応募状況と合格者……012
第2章	2018年度教育活動……013
1	講義群……014
2	演習……022
3	夏季セミナー……045
4	国際・産学活動……048
5	シンポジウム……053
第3章	若手研究者による研究成果……057
1	論文等……058
2	受賞歴……074
3	コース生による研究成果……075
4	コース生受賞歴……092
第4章	広報活動……095
[添付資料]	2018年度学生募集要項……100

1. プログラムについて

1. プログラムの概要

本プログラムの目的

日本は、2030年には人口の1/3が高齢者、1/5が後期高齢者という超高齢社会になることが予想されている。また、韓国やシンガポールも2040年には高齢者人口が1/3を超え、中国も2060年には高齢者人口が1/3に達することが予測される。こうした超高齢社会は世界の歴史に先例のない未知の領域である。高齢化最先進国としての日本には、世界に先駆け、活力ある超高齢社会の姿を構想し実現する責務がある。本プログラムは、高齢者が活力を持って地域社会の中で生活できる期間をより長く、要介護期間や施設収容期間を最小化することを通じて、高齢者自身の生活の質を高め、家族と社会の負担を軽減し、社会全体の活力を維持向上するため、東京大学の高齢社会総合研究機構（IOG）を中核に9研究科30専攻の総力を結集し、修士博士一貫の大学院教育により、活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダーを養成しようとするものである。

活力ある超高齢化社会を実現するためには、都市や地域での市民生活を支える生活環境基盤の3領域、すなわち、

1. 【い（医）】ケア・サポート・システム：医療・看護・介護・みまもり・保育・子育て・福祉等の統合的システム
2. 【しょく（食・職）】社会的サポート・システム：社会的包摂・社会参加・ムコミュニティ活動等の促進体制
3. 【じゅう（住）】物的空間的生活環境システム：居住環境・歩行環境・交通環境・街並環境・商業環境・コミュニティ交流施設・オープンスペースや生活支援システム

をリデザインし組み替えていく必要がある。こうした新しい超高齢社会のための社会システムを構想し実現する取り組みを世界各地の現場で主導する、高度な人材を養成することが本プログラムの目的である。



本プログラムの組織
※ IOG：高齢社会総合研究機構

本プログラムの特色

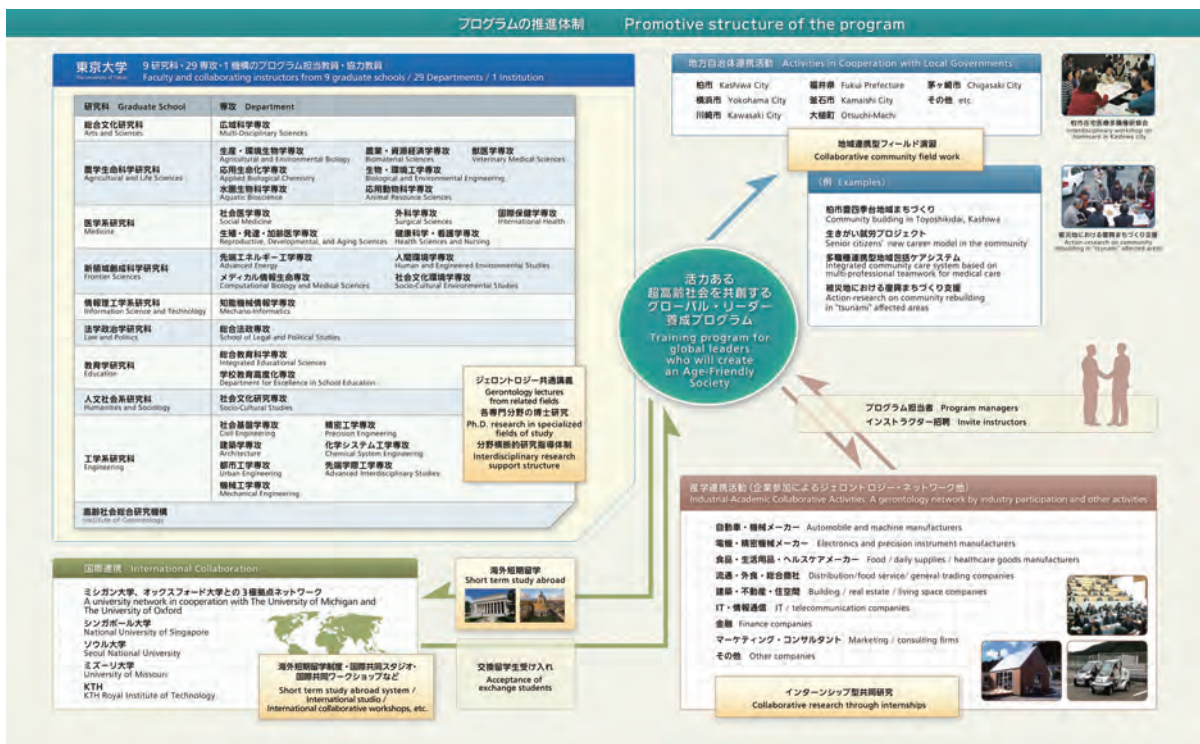
本プログラムでは、本学の1機構9研究科30専攻の教員や連携企業・自治体および海外の大学等のサポートの下で、選り抜かれた大学院生が、

1. 高齢社会問題に関する講義を通じ、高齢社会問題に関する俯瞰的総合的な知識を獲得し
2. 多様な分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組むフィールド・アクション・スタディ演習や、国際的チームワーク力を育成するグローバル演習によって、現実社会における課題解決能力を養い
3. 高齢社会の実態や真のニーズを反映した独創的で質の高い博士研究を成し遂げることを通じ、活力ある超高齢社会を共創するための能力

すなわち、

1. 自身の専門分野に関する専門的学術研究能力
2. 高齢社会問題に関する幅広い俯瞰力
3. 多分野の専門家チームを主導して問題解決に取り組む実践的課題解決能力

の3つの能力を兼ね備えた、グローバルなリーダーシップを発揮できる人材を養成する。



プログラムの特色

2. カリキュラムと修了要件

カリキュラム

本プログラムでは次のような「講義」と「演習」による独自のカリキュラムを組んで、超高齢社

会を共創していくリーダーを育成する。

【俯瞰力を養う高齢社会総合研究学・講義群】

9 研究科・30 専攻・1 機構の教員が連携し、様々な角度から超高齢社会の課題を講義。

■ 高齢社会総合研究学概論 I および II

■ 高齢社会総合研究学特論

高齢社会の社会制度

高齢社会の住まい・まちづくり

高齢社会のケア・サポート・システム

高齢者法

高齢社会の人文学・社会科学

高齢者の食と健康

ジェロンテクノロジー

【分野横断的にアプローチする演習】

■ 実践的課題解決能力を養うフィールド演習

演習指導には企業・行政等の現場の実務家をインストラクターとして招請。

F 演習 1：分野横断的チームを組んで地域社会の現実の課題に取り組むコミュニティ・アクション型（地域連携）

F 演習 2：多様な高齢者や市民に寄り添い心を通わせるケア・システム実習型（対人ケア実習）

F 演習 3：企業・行政等の現場で先端的課題に取り組むインターンシップ型（産学連携）

■ グローバルなリーダーシップを養うグローバル演習

高齢社会総合研究に関する世界トップの教育拠点であるミシガン大学とオックスフォード大学、そして東京大学が連携。

G 演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

G 演習 2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

G 演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー（希望者のみ）

■ 分野横断的研究指導を行うコアセミナー

他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を通じて学際的な研究指導の体制を確保。

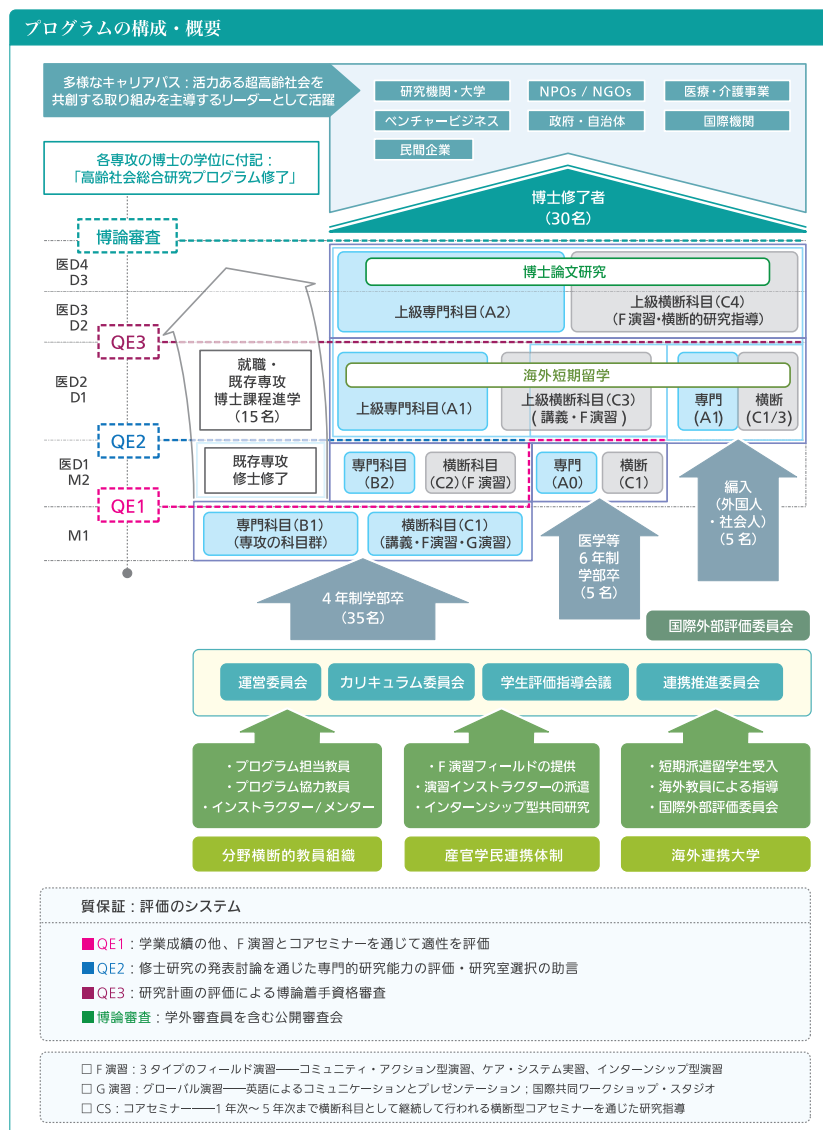
CS1：専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導

CS2：様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話を伺い、ディスカッションするケーススタディ

履修要件

本プログラムのコース生は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する科目について20単位（講義10単位・演習10単位）以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位（講義10単位・演習8単位）以上を、博士後期課程入学時から本プログラムに編入したコース生は16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が付記される。

なお、博士前期課程（修士課程）において（4年制博士課程においては2年次年度末までに）12単位（講義8単位・演習4単位）以上を取得すること。ただし、博士後期課程入学時から本プログラムに参加したコース生は博士後期課程修了時までまでに16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得するものとする。（2018年度シラバスより）



プログラムの枠組み

3. プログラム担当教員

プログラム担当教員

職名は2018年度3月31日現在

氏名	所属部局・職名	専門	役割分担
(プログラム責任者)			
大久保 達也	大学院工学系研究科・研究科長／総括プロジェクト機構プラチナ社会総括寄付講座・教授(兼務)	プラチナ社会、化学工学、ナノ材料	事業統括、生活サポートシステム分野担当
(プログラム・コーディネーター)			
大方 潤一郎	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・機構長	都市工学、まちづくり	プログラムの企画推進調整、運営委員会委員長、居住環境分野担当
(プログラム担当教員)			
秋山 弘子	高齢社会総合研究機構・特任教授	老年学	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当、国際連携推進担当
辻 哲夫	高齢社会総合研究機構・特任教授	在宅医療、ケア政策、社会保障政策	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当、産官学民連携推進担当
田中 敏明	高齢社会総合研究機構・特任教授	福祉工学、理学療法、人間工学、病態運動学	生活サポートシステム分野担当
飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構・教授・副機構長	老年医学、在宅医療、虚弱予防、医学教育	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
武川 正吾	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・教授	福祉社会学	社会システム分野担当
白波瀬 佐和子	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・教授	社会学	社会システム分野担当
牧野 篤	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	社会教育学、生涯学習論	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
東郷 史治	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・准教授	教育生理学	ケアシステム分野担当、プログラム評価担当
北村 友人	大学院教育学研究科学校教育高度化専攻・准教授	教育政策、国際教育開発論	社会システム分野担当、国際連携推進担当
加藤 淳子	大学院法学政治学研究科総合法政専攻・教授	政治学	社会システム分野担当、国際連携推進担当
岩村 正彦	大学院法学政治学研究科法曹養成専攻・研究科長・教授	社会保障法	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
荒井 良雄	大学院総合文化研究科広域科学専攻・教授	人文地理学	社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
原田 昇	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授	都市交通計画、交通まちづくり	居住環境分野担当
光石 衛	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授、大学執行役・副学長	機械工学、ロボティック医療システム	生活サポートシステム分野担当
羽藤 英二	大学院工学系研究科社会基盤学専攻・教授	都市計画、交通計画	居住環境分野担当
大月 敏雄	大学院工学系研究科建築学専攻・教授	建築計画、住宅計画	居住環境分野担当、カリキュラム編成担当
中尾 政之	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授	生産技術、ナノ転写、失敗学、創造設計	生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
浅間 一	大学院工学系研究科精密工学専攻・教授	サービスロボティクス、身体性システム科学、自律分散システム	生活サポートシステム分野担当
檜山 敦	先端科学技術研究センター・講師	複合現実感、ヒューマンインターフェイス、ジェロンテクノロジー	生活サポートシステム担当

安永 円理子	大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構・准教授（同研究科生物・環境工学専攻兼担／生産・環境生物学専攻兼担）	ポストハーベスト工学	食分野担当
阿部 啓子	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・特任教授	食品科学、味覚科学、遺伝子科学	食分野担当、産官学民連携推進担当
佐藤 隆一郎	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・教授	食品生化学	食分野担当、プログラム自己評価・外部評価担当
潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻・教授	水産化学・食品科学	食分野担当
中嶋 康博	大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻・教授	農業経済学、フードシステム論	食分野担当
八木 洋憲	大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻・准教授	農業経営学、農村計画学	食分野担当
関崎 勉	大学院農学生命科学研究科食の安全研究センター長・教授（同研究科応用動物科学専攻兼担／獣医学専攻兼担）	獣医細菌学、食品病原微生物学	食分野担当
橋本 英樹	大学院医学系研究科公共健康医学専攻・教授	医療経済学、社会学	ケアシステム分野担当、社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
秋下 雅弘	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	老年医学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
小川 純人	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・准教授	老年医学	ケアシステム分野担当
久米 春喜	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	泌尿器外科学	ケアシステム分野担当
芳賀 信彦	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	リハビリテーション医学	ケアシステム分野担当
神馬 征峰	大学院医学系研究科国際保健学専攻・教授	国際保健学、ヘルスプロモーション	ケアシステム分野担当
山本 則子	大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻・教授	高齢者在宅長期ケア看護学	ケアシステム分野担当
森 武俊	大学院医学系研究科ライフサポート技術開発学（モルテン）寄附講座・特任教授	センサ医療情報工学、人間機械系、看護工学、ロボティクス	ケアシステム分野担当、生活サポートシステム分野担当
堀 洋一	大学院新領域創成科学研究科先端エネルギー工学専攻・教授	電気工学、制御工学	生活サポートシステム分野担当
内丸 薫	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	血液内科学	ケアシステム分野担当
四柳 宏	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	感染症学	ケアシステム分野担当、フィールド演習企画運営担当
鎌田 実	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	生活支援工学	プログラムコーディネーター補佐、生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
飛原 英治	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	熱工学、冷凍空調工学	生活サポートシステム分野担当
岡部 明子	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	建築デザイン、都市政策	居住環境分野担当
堀田 昌英	大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻・教授	社会的意思決定論、コンフリクトマネジメント、開発と環境社会配慮、社会基盤マネジメント	社会システム分野担当
鳴海 拓志	大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻・講師	バーチャルリアリティ、人間拡張工学	生活サポートシステム担当
菅原 育子	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会心理学、社会老年学	社会システム分野担当
村山 洋史	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会疫学、公衆衛生学、老年学	ケアシステム分野担当
後藤 純	高齢社会総合研究機構・特任講師	都市計画、まちづくり、地域包括ケアシステム、総合老年学	居住環境分野担当

学外プログラム担当者

氏名	所属部局・職名	専門	役割分担
Toni Claudette Antonucci	ミシガン大学・副学長 (Associate Vice President for Research, Social Sciences and the Humanities)	ジェロントロジー	国際連携アドバイザー
David English	ミズーリ大学法科大学院・教授	高齢者法	国際連携アドバイザー
Sarah Harper	Director, Oxford Institute of Population Ageing / Professor of Gerontology and Senior Research Fellow, Nuffield College, Oxford University	ソーシャルジェロントロジー	国際連携推進担当
Gyounghae Han	Professor, Division of Consumer Studies and Child and Family Studies, College of Human Ecology, Seoul National University	Family Study	国際連携推進担当
Angelique Chan	Associate Professor, Department of Sociology, National University of Singapore and Duke-NUS Graduate Medical School	社会学	国際連携推進担当
John Creighton Campbell	ミシガン大学・名誉教授／高齢社会総合研究機構・客員研究員	Gerontology	国際連携推進アドバイザー
大内 尉義	国家公務員共済組合連合会虎の門病院長・院長／東京大学・名誉教授	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
永田 久美子	社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修センター・研究部部長	認知症ケア、当事者ネットワーク、地域生活支援、地域支援ネットワーク	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
太田 秀樹	医療法人アスミス理事長	高齢者・障がい者医療	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
秋山 正子	(株) ケアーズ 代表取締役、白十字訪問看護ステーション 統括所長、NPO マギーズ 東京 共同代表理事	地域看護、在宅医療連携、エンド・オブ・ライフケア	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
木村 昌平	一般社団法人日本家庭教育協会・会長／益子昌平塾・塾長／セコム株式会社・相談役（元会長）／セコムグループ代表補佐	社会の安全安心の確保	産官学民連携アドバイザー
野呂 順一	(株) ニッセイ基礎研究所 代表取締役社長	保険数理、年金数理、経済統計	産官学民連携アドバイザー
有吉 善則	大和ハウス工業株式会社取締役常務執行役員、総合技術研究所長、住宅系商品開発担当、環境副担当	住宅計画、スマートハウス・スマートシティ	産官学民連携アドバイザー
滝山 真也	株式会社ベネッセホールディングス取締役兼 上席執行役員／株式会社ベネッセスタイルケア代表取締役社長	介護事業等のグループ経営	産官学民連携アドバイザー
関根 千佳	株式会社ユーディット・会長兼シニアフェロー／放送大学・客員教授／同志社大学・客員教授	ユニバーサルデザイン、老年学、ITとUDによる地域活性化	産官学民連携アドバイザー
大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院・教授	医療福祉ジャーナリズム	産官学民連携アドバイザー
南 砂	読売新聞東京本社・常務取締役調査研究本部長	医療・医学、科学技術政策、社会保障政策および社会一般、メディア論	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
河出 卓郎	(株) 毎日新聞東京本社企画編集室	社会保障論	産官学民連携アドバイザー
宮島 俊彦	三井住友海上火災・顧問／岡山大学・客員教授／日本介護経営学会・理事／東京女子医科大学・監事／高齢社会総合研究機構・客員研究員	高齢者ケアシステム	産官学民連携アドバイザー
樋口 範雄	武蔵野大学法学部・特任教授／東京大学・名誉教授	英米法、医事法、信託法、高齢者法	社会システム分野担当、国際連携推進担当

特任助教・特任研究員

氏名	所属	専門
木全 真理	高齢社会総合研究機構・特任助教	在宅看護
萩野 亮吾	高齢社会総合研究機構・特任助教	社会教育、生涯学習
孫 輔卿	高齢社会総合研究機構・特任助教	老年医学
朴 孝淑	高齢社会総合研究機構・特任助教	労働法
西野 亜希子	高齢社会総合研究機構・特任助教	建築計画、住宅改修
藤崎 万裕	高齢社会総合研究機構・特任助教	地域看護学
税所 真也	高齢社会総合研究機構・特任助教	福祉社会学、家族社会学
伊藤 研一郎	高齢社会総合研究機構・特任研究員	ヒューマンインタフェース、バーチャルリアリティ
高瀬 麻以	高齢社会総合研究機構・特任研究員	海洋科学、分子生物学、臨床栄養学

4. 履修生に対する経済的支援

奨学金制度

優秀な学生が経済的な理由から博士課程への進学を断念することのないよう、学生の希望と能力に応じ奨励金を支給する制度が用意されている。2018年度は、博士前期課程（修士課程）2年次のコース生には、概ね授業料に相当する額、博士後期課程のコース生には、学業成績等に応じ月額20万円を上限とした額と定めた。

留学制度

原則として全学生を第3年次（医学系等4年生博士課程にあっては第2年次）の夏休み（8月）から冬学期の間、6ヶ月以内の海外短期留学で派遣し、その旅費を支給することとした。以下がその概略である。

- ミシガン大学：修士課程レベル以上のISR（Institute for Social Research）、SPH（School of Public Health）などのサマースクールや短期コースの受講。
- ミズーリ大学：主に高齢社会問題について法学分野の研究を遂行する学生を想定。
- オックスフォード大学：修士課程レベル以上のサマースクールや短期コースの受講。
- アジア地域における高齢社会問題を研究したい学生のためにはシンガポール大学、ソウル大学等と連携。
- その他：上記に限らず学生は、博士研究のテーマに適した留学先への留学が可能。

*海外短期留学には、大学への留学だけではなく、海外の企業等におけるインターンシップ型留学を含む。

5. 応募状況と合格者

2018年 応募状況と合格者

プログラム募集定員数（実数）		35人
① 応募学生数		22人
	うち留学生数	11人
	うち自大学出身者数	3人（1人）
	うち他大学出身者数	19人（10人）
	うち社会人学生数	9人（7人）
	うち女性数	9人（3人）
② 合格者数		20人
	うち留学生数	9人
	うち自大学出身者数	3人（1人）
	うち他大学出身者数	17人（8人）
	うち社会人学生数	9人（7人）
	うち女性数	9人（3人）
③ ②のうち受講学生数		19人
	うち留学生数	9人
	うち自大学出身者数	3人（1人）
	うち他大学出身者数	16人（8人）
	うち社会人学生数	8人（7人）
	うち女性数	8人（3人）
プログラム合格倍率（①応募学生数／②合格者数） （小数点第三位を四捨五入）		1.10倍
充足率（合格者数／募集定員）		57.00%
【備考】 ※編入学生： 平成30年度：修士課程2年次に編入学 3名、博士後期課程1年次に編入学 5名、同後期課程2年次に編入学 2名 ※（ ）は留学生の人数 ※2019年3月31日現在		

2. 2018 年度教育活動

1. 講義群

2018年度には以下のように必修・選択必修を開講し、このほかにも21の選択講義を設けた。

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅰ（高齢者の体と心：老いとつきあう）

本授業では高齢社会におけるさまざまな課題に対して、主として高齢者の体と心について、国内のトップ講師からの講義を受け、老いとつき合うとはどういうことであるのか、その基礎を分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて、高齢者の健康寿命を延ばし、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者が快活に暮らし、社会の支え手となって活躍する活力ある超高齢社会について考えていく。

【授業日程】

- 4/18 第1回 ジェロントロジー：長寿社会を支える学際科学（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 4/25 第2回 なぜ老いる？ならば上手に老いるには？（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 5/2 第3回 老化と生物学（孫輔卿：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 5/9 第4回 疾病・障害とヘルスプロモーション（秋下雅弘：医学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 5/16 第5回 知的機能の変化と適応（高山緑：慶応義塾大学教授）
- 5/23 第6回 栄養とエイジング（阿部啓子：東京大学名誉教授・農学生命科学研究科特任教授）
- 5/30 第7回 ケアの当事者学（上野千鶴子：東京大学名誉教授・認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク〈WAN〉理事長）
- 6/6 第8回 身体機能を補う福祉工学機器（伊福部達：北海道大学名誉教授・東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 6/13 第9回 シニアの学ぶ、働く、遊ぶ（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 6/20 第10回 身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス（戸枝陽基：社会福祉法人むそう代表）
- 6/27 第11回 高齢者のライフスタイルの変化（前田信彦：立命館大学教授）
- 7/4 第12回 人生の最終段階のケア（会田薫子：人文社会系研究科特任教授）
- 7/11 第13回 高齢者と看護学（山本則子：医学系研究科教授）

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅱ（高齢社会のリ・デザイン）

本授業では主として社会システムおよび、それを支える居住環境システムについて、国内のトップ講師からの講義を受け、高齢社会のリ・デザインについて分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて活動レベルが低下して介助が必要になった後も、施設収容により対応するのではなく、住み慣れた地域社会の中で、できるだけ自立的に活力を維持しながら暮らせる社会システム及び居住環境システムについて考える。

【授業日程】

- 9/26 第1回 活力ある超高齢社会の構想と共創（大方潤一郎：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）
- 10/3 第2回 21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える（辻哲夫：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 10/10 第3回 高齢期の住まい方（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 10/17 第4回 年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用（濱口桂一郎：労働政策研究・研修機構統括研究員）
- 10/24 第5回 人口減少社会における年金と社会保障財政（岩本康志：国立国会図書館専門調査員）
- 10/31 第6回 高齢者の移動を支える（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 11/7 第7回 高齢期の健康づくり：公衆衛生学の視点から（村山洋史：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 11/21 第8回 シニア×ICT（廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授）
- 11/28 第9回 自己決定と本人保護（関ふ佐子：横浜国立大学教授）
- 12/5 第10回 小規模多機能型居宅介護（柴田範子：NPO 法人 楽 理事長）
- 12/12 第11回 地域包括ケアシステムの地域実装 (1)（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 12/19 第12回 高齢化の人口学（白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授）
- 1/9 第13回 地域包括ケアシステムの地域実装 (2)（関野幸吉：SOMPO ケアメッセージ(株) 役員理事 地域包括ケア推進部 特命部長）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅰ（福祉社会を支える制度体系）

国内の福祉社会を支える諸制度について、〈医療〉、〈介護〉、〈労働と生活〉、〈子育て〉、〈老後の生活と死後の準備〉、〈住まい〉、〈コミュニティとまちづくり〉の7つの枠組みから体系的に捉え、各制度の実態およびその課題について学ぶ。とくに、理論と実務の両面から検討することを通して、実践的・実務的な「制度活用論」「制度設計論」を身につけることを目的とする。

【授業日程】

- 11/7 第1回 医療① 医療制度の実態と課題（猪飼周平：一橋大学教授）

- 11/8 第2回 医療② 地域医療圏と地域医療構想 (佐藤大介：国立保健医療科学院主任研究官)
- 11/14 第3回 介護 介護保険制度の実態と課題 (森川美絵：津田塾大学教授)
- 12/5 第4回 労働と生活① 社会政策 (大沢真理：東京大学社会科学研究所教授)
- 12/13 第5回 労働と生活② 年金・生活保護制度の実態と課題 (冨江直子：茨城大学准教授)
- 12/13 第6回 子育て① 子育てに関する諸制度の実態と課題 (島田桂吾：静岡大学講師)
- 12/19 第7回 子育て② 地方自治体における包括的な子ども・子育て支援 (木村妙子：練馬区福祉部生活福祉課ひとり親家庭支援係長、田村大介：同担当係員)
- 1/16 第8回 住まい① 公営住宅制度の歴史 (大月敏雄：工学系研究科教授)
- 1/17 第9回 住まい② 高齢者の居住に関わる制度 (大島敦仁：国土交通省住宅局安心居住推進課企画専門官、上野翔平：厚生労働省老健局高齢者支援課課長補佐)
- 1/23 第10回 老後の生活と死後の準備——成年後見制度・相続・葬儀／埋葬 (奥山恭子：横浜国立大学名誉教授)
- 1/24 第11回 コミュニティとまちづくり① コミュニティ活動に関する諸制度の実態と課題 (後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師)
- コミュニティとまちづくり② 地方自治体における独自の「まちづくり」政策 (大方潤一郎：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長)

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅱ (超高齢社会の住まい・まちづくり)

超高齢社会の諸課題に対応した地域社会の物的・社会的な生活環境について、多面的に講義を行う。

【授業日程】

- 4/10 総論 都市と計画
- 第1・2回 高齢社会対応の住まいとまちづくり (大方潤一郎：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長)
- 4/17 交通とまちづくり
- 第3回 高齢社会と交通 (原田昇：工学系研究科教授)
- 第4回 高齢者の移動とまちづくり (大森宣暁：宇都宮大学教授)
- 4/24 ユニバーサルデザイン・バリアフリーのまちづくり
- 第5回 ユニバーサルデザインと交通 (秋山哲男：中央大学研究開発機構教授)
- 第6回 バリアフリーのまちづくり (高橋儀平：東洋大学教授)
- 5/1 バリアフリーのまちづくりと地域居住
- 第7回 視覚障害者の歩行環境 (松田雄二：工学系研究科准教授)
- 第8回 高齢期の住まい1 (西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教)
- 5/8 高齢期の生活と住まい
- 第9回 住まいの日常災害と高齢者 (直井英雄：東京理科大学名誉教授)
- 第10回 高齢期の住まい2 (田中紀之：高齢社会総合研究機構特任研究員)

- 5/15 高齢期の住まいと地域
第 11・12 回 高齢期の住まいと地域 (大月敏雄：工学系研究科教授)
- 5/22 高齢期の住まいと地域
第 13 回 高齢期の住まい 3 (西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教)
第 14 回 地域に住む (土師真裕子：高齢社会総合研究機構特任研究員)
- 5/29 地域とまちづくり
第 15・16 回 地域配置論 (後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師)

■高齢社会総合研究学特論Ⅲ (人生 100 年時代のライフコース論)

人生 100 年時代の到来にあたって「生きる」「老いる」「死ぬ」をめぐる現実が変化しつつある。長期化する人生の実態とその課題について、心理学、哲学、教育学、社会学の幅広い観点から議論する。

【授業日程】

- 4/10 第 1 回 人生 100 年、何がめでたい!? (袖井孝子：お茶の水女子大学名誉教授)
- 4/17 第 2 回 老いと病の現象学 (榊原哲也：人文社会系研究科教授)
- 4/24 第 3 回 長寿時代のエンドオブライフ・ケア：臨床倫理学の視点から (会田薫子：人文社会系研究科特任教授)
- 5/8 第 4 回 高齢期の家族、友人、地域とのつながりとその変化 (小林江里香：東京都健康長寿医療センター研究所 研究副部長)
- 5/15 第 5 回 二極化する老後：格差社会を生きる (岩田三代：ジャーナリスト・元日本経済新聞論説委員)
- 5/22 第 6 回 高齢者のこころの発達とケア (高橋美保：教育学研究科教授)
- 5/29 第 7 回 認知症経験の変容と相互行為：ポスト診断時代の社会学 (井口高志：奈良女子大学准教授)
- 6/5 第 8 回 高齢期の well-being：社会的・物理的環境の観点から (高山緑：慶應義塾大学教授)
- 6/12 第 9 回 超高齢社会におけるサクセスフルエイジング (権藤恭之：大阪大学准教授)
- 6/19 第 10 回 人生 100 年時代の学びと地域社会 (牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長)
- 6/26 第 11 回 生涯現役社会の実態と展望：理想のキャリアを育むには (前田展弘：ニッセイ基礎研究所ジェロントロジー推進室主任研究員)
- 7/3 第 12 回 超高齢社会における課題解決ビジネス (齊藤徹：(株)電通 ソリューション開発室ソリューションディレクター)
- 7/10 第 13 回 100 年の人生を設計する (秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授)

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅳ（高齢社会のケア・サポート・システム）

本科目では、超高齢社会で要介護状態になっても住み慣れた地域で住み続けられるシステムを構築していくため、高齢者の特性や生活を理解し、体系的に高齢社会における高齢者へのケア・サポート・システムを学ぶ。

本講義は高齢者の医学的な特徴、その特徴を踏まえたケア・サポート、そして高齢者を支える医療・介護を中心とした社会システムについて、最新の知識や技術を理解し、実社会に役立つ手法を考える。

【授業日程】

- 5/31 第1回 超高齢社会に求められるケア・サポート・システム（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 第2回 地域包括ケアシステムの構築（吉井靖子：社会福祉法人長岡福祉協会 高齢者総合ケアセンター こぶし園総合施設長）
- 6/7 第3回 高齢者医療の課題と目指すべき方向性（小島太郎：医学系研究科助教）
- 第4回 認知症の理解（亀山祐美：医学系研究科助教）
- 6/14 第5回 認知症ケアの最前線（永田久美子：認知症介護研究・研修東京センター研究部部长）
- 第6回 医療制度改革と地域包括ケアシステム（神田裕二：兵庫県立大学客員教授）
- 7/5 第7回 専門職が地域住民とつながる仕組みづくり（澤登久雄：社会医療法人財団仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長）
- 第8回 事例を基盤とした多職種連携の構築（中澤伸：社会福祉法人 川崎聖風福祉会 事業推進部長、木全真理：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 7/12 第9回 地域アセスメントに基づく地域づくり（成瀬昂：医学系研究科講師）
- 第10回 訪問看護と地域包括ケア（秋山正子：白十字訪問看護ステーション統括所長）
- 7/19 第11回 在宅医療を推進する新たな地域包括ケアシステム（太田秀樹：医療法人アスムス理事長）
- 第12回 市区町村に期待される在宅医療・介護連携推進の体制整備（川名理恵子：横須賀市健康部地域医療推進課課長、久保真人：川崎市健康福祉局地域福祉部地域福祉課振興係長）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅵ（高齢者法）

高齢者に関わる法制度や政策課題について基礎を学ぶとともに、高齢者法の観点について、講義およびディスカッションを行う。

【授業日程】

- 9/28 第1回 高齢者法の概要と倫理的配慮

- 10/5 第2回 医療上の決定
- 10/12 第3回 在宅での医療
- 10/19 第4回 高齢者への医療給付制度・介護保険制度など
- 10/26 第5回 高齢者の住まい、特養・療養施設など
- 11/2 第6回 高齢者の住宅問題
- 11/9 第7回 年齢による差別
- 11/16 第8回 成年後見・財産管理と信託・相続
- 11/30 第9回 年金など経済的基盤
- 12/7 第10回 高齢者と職業・社会参加
- 12/14 第11回 情報化の進展と高齢者
- 12/21 第12回 高齢者と移動 交通
- 1/11 第13回 高齢者虐待・高齢者と犯罪

* 講義はすべて樋口範雄：東京大学名誉教授・武蔵野大学教授

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅷ（高齢社会の人文学・社会科学）

高齢社会・超高齢社会における人口構造、社会構造、社会政策などについて、おもに社会学的なアプローチから学習し、国際的な見地から活力ある超高齢社会を研究するうえでの基本的な知識を得ることを目標とする。

【授業日程】

- 4/18 第1回 国際比較のなかでみた日本の高齢社会（武川正吾：人文社会系研究科教授）
欧米諸国の高齢社会①——フランス（尾玉剛士：獨協大学専任講師）
- 4/25 第2回 欧米諸国の高齢社会②——スウェーデン（齊藤弥生：大阪大学教授）
- 5/9 第3回 欧米諸国の高齢社会③——オランダ（廣瀬真理子：東海大学教授）
- 5/16 第4回 高齢者ケアの国際比較——ソーシャル・サポートを中心に（中田知生：北星学園大学准教授）
- 5/23 第5回 高齢者就労の OECD 国際比較（福井康貴：名古屋大学准教授）
- 5/30 第6回 欧米諸国の高齢社会④——イギリス（平岡公一：お茶の水女子大学教授）
- 6/6 第7回 欧米諸国の高齢社会⑤——アメリカ（安立清史：九州大学教授）
- 6/13 第8回 東アジアの高齢社会①——台湾（小島克久：国立社会保障・人口問題研究所情報調査分析部長）
- 6/20 第9回 東アジアの高齢社会②——韓国（金成垣：人文社会系研究科准教授）
- 6/27 第10回 東南アジアの高齢社会①——タイ（大泉啓一郎：(株)日本総合研究所 調査部環太平洋戦略研究センター主任研究員）
- 7/4 第11回 東南アジアの高齢社会②——総論（安里和晃：京都大学准教授）

7/11 第12回 介護者の国際比較（小川全夫：公益財団法人福岡アジア都市研究所特別研究員）

7/18(補)第13回 東アジアの高齢社会③——中国（張継元：華東師範大学専任講師）

■ 高齢社会総合研究学特論IX（高齢者の食と健康〈維持〉）

超高齢化を目前にして、いつまでも自立して自分らしく生きる為に、より早期からの健康維持～虚弱予防が重要な鍵となる。そこには本人自身の意識変容・行動変容と良好な社会環境の実現の両面が必要であり、高齢者の様々なプロダクティビティの増進が期待される。そこで、本講義では虚弱（フレイル：Frailty）の最たる要因である加齢性筋肉減少症（サルコペニア）を予防する為に、『食』を中心に据えた高齢期における早期からの健康維持を包括的な視点から、その予防対策に関する最新知識を学ぶ。

【授業日程】

- 11/6 第1回 フレイル（虚弱）予防—健康寿命延伸を実現するための新概念—（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 第2回 フレイル予防はまさに「総合知によるまちづくり」—住民の食べる力を向上するため—（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 11/20 第3回 「口から食べる幸せ」をサポートするための包括的スキル（小山珠美：NPO法人 口から食べる幸せを守る会理事長）
- 第4回 高齢期における歯科口腔機能の重要性（平野浩彦：東京都健康長寿医療センター研究所専門副部長）
- 11/27 第5回 「食の楽しみ」という原点から介入する高齢者の食育（川口美喜子：大妻女子大学教授）
- 第6回 終末期を飾る「人生のエンディング食」（下平庄吾：飯塚病院緩和ケア病棟シェフ、柏木秀行：飯塚病院緩和ケア科医師）
- 12/4 第7回 高齢者を楽しませながら食べさせる GOBOU アプローチ（梁瀬寛：(株)GOBOU 代表取締役）
- 第8回 お口から考える健康長寿（小原由紀：東京医科歯科大学講師）
- 12/11 第9回 食べることの意義と今後の食育のあり方（田中弥生：関東学院大学教授）
- 第10回 民間企業が高齢者の「食」をどう守るのか（日清オイリオグループ(株)、ニュートリー(株)、(株)明治、(株)クリニコ、(株)ヤヨイサンフーズ、イーエヌ大塚製菓(株)）
- 12/18 第11回 超高齢になるまでの食習慣（潮秀樹：農学生命科学研究科教授）
- 第12回 「食」の現状、「食」の将来（潮秀樹：農学生命科学研究科教授）

■ 高齢社会総合研究学特論X（ジェロンテクノロジー）

ジェロンテクノロジー（Gerontechnology）とは、高齢者を支援するためのシステムを扱う研究

分野である。本科目では、高齢者の生活や社会活動などを支援するための情報・機械システムについて、オムニバス形式で講義を行う。本講義の内容は次の通りである。

- ・衰えた運動器・感覚器の機能補助を行うための運動支援・認知機能支援システム
- ・日進月歩での発展が著しい情報機器を用いた支援手法と、それら機器の使用の支援手法
- ・高齢者就労など社会的課題に対応するための仕組みとシステム

【授業日程】

- 10/05 第1回 認知症高齢者の情報支援（二瓶美里：新領域創成科学研究科講師）
高齢社会のモビリティ構築に向けて（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 10/12 第2回 高齢社会とユニバーサルデザイン（アルベレスハイメ：拓殖大学准教授）
アクティブシニアの ICT 活用とユニバーサルデザイン（関根千佳：同志社大学客員教授、(株)ユーディット会長兼シニアフェロー）
- 10/19 第3回 高齢者のための福祉・リハビリテーション工学（田中敏明：高齢社会総合研究機構特任教授）
臨床現場におけるリハビリ工学の実際（吉田直樹：リハビリテーション科学総合研究所主任研究員、関西リハビリテーション病院リハビリテーション・エンジニア）
- 11/02 第4回 高齢者支援機器と事業モデル—技術とニーズ、政策、社会をつなぐ—（後藤芳一：日本福祉大学客員教授）
人型セラピーロボット最前線（西尾修一：国際電気通信基礎技術研究所石黒浩特別研究所主幹研究員）
- 11/09 第5回 感覚・コミュニケーションを支援する福祉工学（伊福部達：北海道大学名誉教授・東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
高齢者就労における ICT の役割（廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授）
- 11/16 第6回 元気高齢者のための新しい社会参画技術（小林正朋：日本 IBM (株)東京基礎研究所 高齢社会工学担当）
高齢者の遠隔就労・社会参加とテレプレゼンス技術（檜山敦：先端科学技術研究センター講師）
- 11/30 第7回 福祉機器実用化における課題～福祉ロボットなどの実例からわかること（手嶋教之：立命館大学教授）
高齢者の農作業のための軽労化支援スーツ（田中孝之：北海道大学准教授）
- 12/07 第8回 高齢者の行動計測・見守りモニタリング（森武俊：医学系研究科特任教授）
医療・介護・健康分野で期待されるサービスロボティクス（浅間一：工学系研究科教授）

2. 演習

フィールド演習

■ フィールド演習 1 (コミュニティ・アクション型)

グループ共同研究

2018年度は、以下の6グループが活動した。

【共同研究 1】「高齢者に対する就労支援の在り方について」グループ

近年、人口減少社会を迎え、働く意欲と能力のある高齢者が、その能力を発揮して、希望すればいくつになっても働くことができるような環境整備（制度・政策、企業環境等）が求められている。日本では、定年後から年金受給開始年齢までの空白（無収入）を埋めるために、再雇用（継続雇用）制度を実施する等、法律の制・改正を通じて高齢になっても働ける機会の提供に取り組んできた。その結果、主要国における高齢者の就業率は最も高い水準にある。しかし、実際に働くことになった高齢者が、どうすれば働きやすいと感じられるか、職場環境（ハード面とソフト面）をどう整備すれば長く、快適に働くことができるかといった、特に職場環境に特化した点はあまり議論されていない。過去には、障害者雇用促進法の制定をきっかけに、障害者でも働きやすい職場環境についての研究や議論は盛んに行われてきた経緯がある。高齢者についても、高齢者でも働きやすい職場環境（これを我々は「Age-Friendly Workplace」(AFW)と呼んでいる）について議論すべき時期に来ている。

そこで、本研究では、高齢者雇用に関して先駆的な企業への調査を通じて、AFWの実現に向けて必要な要素を多角的に明らかにすることを研究目的とし、研究を進めてきた。主な活動内容として、7月まではジェロネット SIG008 会合への参加や文献調査、モデル企業を選定する作業を行った。8月には、福岡県70歳現役応援センターを訪問し、センター長、企業側担当者、高齢者側の担当者、センターを利用したことのあつた高齢者へのインタビュー調査を行った。また、高齢者雇用積極的に取り組んでいる企業（2社）を訪問し、人事担当者と高齢被雇用者に対するインタビュー調査を行った。9月からは、これらのインタビュー調査の分析結果をハード面とソフト面に分けて整理し、その分析結果を、International Joint seminar「Everyday activities and the health of the urban elderly」（2018年10月31日、タイトル「Working towards an age-friendly workplace: from interviews with the elderly and their supervisors」）とGLAFSの国内シンポジウム（2019年3月）等で発表した。今後は、より多くの企業を訪問し、インタビュー調査を行うとともに、「全国高齢者パネル調査」データの2次分析をも進めていく予定である。（特任助教・朴孝淑）

【共同研究 2】「在宅介護で暮らし続けられる条件の検討」グループ

要介護期における独居高齢者の在宅療養生活の継続要因

我が国では、高齢者やその家族の「本人・家族の選択と心構え」（厚生労働省；2013）をサポートする地域包括ケアシステムを推進している。また、そのサポートは、「医療・介護・住まい・予防・生活支援」の一体的整備を目指している。しかし、要介護期の生活支援に関する要因は、十分に明らかにされていない。そこで、今年度は、今後、都市部で急増することが予測されている独居世帯も考慮することと、独居の高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けることができるよう、要介護期にある高齢者の生活支援ニーズの把握と、

生活支援が調整されるプロセスの可視化を試みることにした。そのため、都市部で定期巡回型の介護サービスを利用する高齢者10名の介護居宅サービス計画書・経過記録・生活支援アセスメントなどの介護と生活支援に関する記録を収集した。それらの記録から、支援経過に基づいた生活支援ニーズを抽出した。抽出したニーズについて、介護サービス事業者の従事者や管理者6名にフォーカスグループインタビューを実施し、意見を聴取した。その結果、高齢者自身が心身の衰えを実感するタイミングや、家族や友人の死などのライフイベントなどが、高齢者の心身の虚弱に至るインパクトを捉えた。引き続き2019年度も、記録の収集や専門家へのインタビュー等の実施を通じて、要介護期にある高齢者の生活支援に関する要因を整理していく。

(特任助教・木全真理)

【共同研究3-1】「弱らない・弱っても暮らし続けられる住環境のデザイン」グループ

転倒・骨折高齢者を対象とした調査

本研究は転倒により大腿骨を骨折・緊急入院した高齢者を対象として入院中にインタビュー調査を実施し、どこで、何をしようとして、どのように転倒したかを明らかにすることを目的としている。2018年度は11例の病院調査事例が得られた。2016年度からの事例を合わせると43例の調査が行われた。転倒場所は自宅内が18例で最も多く、次いで自宅敷地外の15例、施設内の9例、自宅敷地内の1例となっていた。34例が女性で、12例がトイレ往復時の転倒であった。特に自宅での転倒の場合、18件中9件がトイレとの移動動作で起きていた。その結果、調査した中で自宅の住戸内の転倒が最も多いこと、自宅内ではトイレへの往復時に半数が転倒していることが判明した。転倒の仕方では「ふらつき」が43件中17件を占めた。また、全ての転倒の仕方にトイレ関連の転倒が含まれていた。

さらに、自宅訪問調査の同意が得られた患者を対象に、2018年度は15例の調査を行い、転倒場所の確認やその後の住環境の変化に関して追跡した。15例の内、11例が自宅訪問調査、4例が病院におけるインタビューであった。その結果、転倒後に自宅改修を行っていた事例が7例得られたとともに、全事例で転倒・大腿骨骨折後の生活変化等を把握することができた。これらの研究結果をまとめて10月に日本転倒予防学会@浜松（口述発表：1件、ポスター発表：1件）で発表した。また、国際会議（査読あり）での発表を2回、学術論文（査読あり）を2編発表した。

(特任助教・孫輔卿)



日本転倒予防学会（浜松）で発表したメンバー

【共同研究3-2】「要介護になっても暮らし続けられるバリアフリー改修マニュアル作り」グループ

2017年度に新規に設けられた本グループは2年目を迎え、4名の学生、4名の教員で活動を実施した。今年度はフィールドワークを中心に、まず、企業の住宅改修の取り組みの状況を把握するため、10月に国際福祉機器展に出展している事業者（25社）に、インタビューを行った。次に、建築技術職やケアマネジャーへのインタビューを行い、企業者や専門職が実際に住宅改修をする際に感じている課題を把握した。さらに、

住宅改修をしたユーザーの自宅を訪問し、実際の生活状況から、高齢期の生活における住まいの課題を把握すると共に、その解決策として住宅改修の実態を捉えた。

2019年度は、これらの研究成果を基に、高齢期の生活をサポートできる住まいのあり方に関する研究を行う予定である。(特任助教・西野亜希子)



住宅改修に携わっている建築士の方へのインタビューの様子

【共同研究 4/5/6】「高齢者の QOL 向上のためのコミュニティ活動のファシリテーション」グループ

この共同研究グループでは、超高齢社会を支えるコミュニティ活動について考えるために、参加者の QoL の向上に資するような効果的なプログラムや、住民が主体となって取り組むための適切なファシリテーション方法に関する研究を続けてきた。2018年度は、主たる活動として、千葉県柏市豊四季台地区において、住民主体の「通いの場」である「地域活動館（仮称）」の活動の検証を行った。

2018年2月に、東京大学と柏市社会福祉協議会により設置された「地域活動館」では、現在、約20の住民が主体となった運営団体によって、健康づくり、趣味・娯楽、音楽鑑賞などの自主的な企画が、定期的で開催されている。これらの企画に、高齢者がどのような動機で参加しているのかについて、2018年7月に利用者約30名を対象とするインタビュー調査を行った。環境心理学の概念である Place Attachment の理論に基づいて分析した結果、活動館は、自宅から出るという目的達成のために気軽に利用され、友人と会う場として積極的に活用されていることが明らかになった（2019年10月のIAGGで発表予定）。

次に、この活動館という場で、利用者の中にどのような相互作用が生じ、このことが人間関係の構築や、QoLの向上にどのようにつながっているのかを明らかにすることを目的に、9月より映像分析、2019年2月より、プログラムの参与観察を実施している。映像を用いた、習字の取り組みに関する会話分析からは、共通の課題に取り組むことを通じて、利用者の中に自然と会話が生まれている様子が明らかになった（2019年6月の日本老年社会学会で発表予定）。また、参与観察では、プログラムにより QoL の向上につながる道筋が



教員・院生が企画した多世代交流のゲーム企画の様子

異なる可能性が示唆されている。

これらの調査に加えて、住民主体の運営へと移行していくためには、初期に策定したガイドラインの改定や、マニュアルの作成も必要になる。そこで、2019年2月からは、運営団体の役員に対して、利用の満足度や課題認識について尋ねるインタビュー調査に着手した。運営団体のタイプによって、直面する課題や必要な支援内容も異なる、というのが現時点の調査仮説である。

2019年度は、以上の調査結果に基づき、院生が組み立てた企画についても、随時実施をしていく予定である。また、これまでの研究成果を体系化し、コミュニティ・スペースの空間設計・プログラムの企画・評価方法などに関する指針を提示していくこととした。（特任助教・荻野亮吾／特任研究員・高瀬麻以）

【共同研究7】「在宅高齢者のためのIoT活用による自立支援」グループ

超高齢社会において、さまざまな情報技術を活用して安心・安全な社会形成が期待されている。一方で、AIスピーカやIoT（Internet of Things）の普及により、一般家庭におけるインターネットを通じた情報通信のあり方が急速に変化している。本グループは、「高齢者支援技術のデザイン指針や導入方策を導くためのニーズ・現状調査」をテーマとして昨年度活動していたため、本年度は支援技術としての要素技術の一つとしてIoTが利活用できないか検討を行い、ニーズ・現状調査を実施することとした。

昨年度までは、高齢者やその支援者における「困りごと」にフォーカスしたニーズ調査や、介護施設などにおける支援技術の受容性についての現状調査を行ってきた。調査結果からは、「困りごと」に対してニーズを満たすだけでは支援機器の普及は難しく、先進的な技術を導入するにあたっては高齢者自身が示す技術に対する受容性だけでなく周囲との関係性も影響していることがわかった。これらを踏まえ、本年度は支援技術を絞り込み、より詳しく「困りごと」や受容性に関する調査を実施することとした。調査方法は、高齢者が自由に意見やアイデアを出せるようにワークショップを用いた。ワークショップは内容を変えつつ合計3回実施した。

1回目のワークショップは、共同研究4/5/6グループが主体的に活動している千葉県柏市豊四季台地区にある「地域活動館（仮称）」で実施した。このワークショップでは部屋の間取りを用いて、帰宅後の生活パターンから「困りごと」が発生する場所と順番などを明らかにした。2回目のワークショップは文京区の高齢者を対象としたワークショップを東京大学で実施した。「困りごと」だけでなく「できたらいいな」なニーズを新技術への理解と触れあいから引き出せないか調査し、IoTの機能をカードとして表現したワークショップを考案した。3回目のワークショップは千葉県柏市布施新町にある「布施新町ふるさとセンター」で実施した。3回目となるワークショップでは、考案したIoTの機能カードを用いて「できたらいいな」を引き出す目的で調査を実施し、IoTを用いた100以上のアイデアを得ることができ、また、その場で高齢者自身に簡単なIoTシステムを組んで貰う事ができた。本調査を通じて、IoTを利活用して解決できるニーズがあり、また高齢者自身がIoTを用いた簡単な解決方法を実現させることができることがわかった。

（特任研究員・伊藤研一郎）

岩手県大槌町フィールド演習

学習のねらいは、多様な分野の学生がチームになって、東日本大震災で津波の被害を受けた岩手県大槌町をフィールドに全4地域でコミュニティイベントを実施し、地域住民に直接ヒアリングを行いながら、被災から復興期にかけた地域コミュニティや高齢者の生活課題の変化を把握し、中長期の地域マネジメントのあり方について議論することである。

2018年度も岩手県上閉伊郡大槌町に整備した東京大学大ケ口多世代交流会館（コミュニティ・サポートセンター）で合宿し、全2回（9/1～3、9/5～7）の演習を行った。

〈参加人数〉

第1回演習：11名（GLAFS学生）、3名（GLAFS/IOGスタッフ）

第2回演習：7名（GLAFS学生）、3名（GLAFS/IOGスタッフ）

〈演習の様子〉（第1回）

9月1日	120分	被災地視察
	120分	地域への関与手法のレクチャー&トレーニング
9月2日	120分	コミュニティイベント
	300分	グループワーク（調査結果の整理）
9月3日	120分	コミュニティイベント
	90分	グループワーク（生活課題の変化の整理と地域マネジメントの検討）
	30分	グループ発表

	<p>身体測定やストレスチェックなどを行うコミュニティイベントを開催し、学生と地域住民が交流。</p>		<p>イベントの参加者に生活の状態や震災以降の地域の変化について聞き取りを行う。</p>
	<p>聞き取り結果から生活課題の変化をグループで整理。</p>		<p>震災後の地域マネジメントの論点を洗い出し、その解決策についてディスカッションした。</p>




柏市豊四季台団地フィールド演習：一人暮らし高齢者対象「懇談と昼食会」

10月8日、柏市豊四季台団地の一人暮らし高齢者を対象とした「懇談と昼食会」（豊四季台地区社会福祉協議会主催）が行われた。交流促進と友人づくりの機会提供を目的としたこの会は、今年で9年目。今年から参加資格を70歳以上としたにもかかわらず、196名もの方にお集まりいただいた。GLAFSの学生及び教員、産学ネットワーク「ジェロントロジー」のメンバー等、46名がスタッフとして参加。高齢者の方々の暮らしの状況や課題・ニーズを把握することに努めた。

演習の目的は以下の通り。

- ・実際に高齢者と接し、高齢者との対話の中から暮らしの状況や課題・ニーズを把握する手法やコミュニケーション方法を学ぶこと。
- ・地域の住民の方や団体と連携してイベントを運営する手法を学ぶこと。
- ・各専門分野からのアプローチを互いに学び、対話を通じてこれからのコミュニティ・超高齢社会のあり方について検討すること。

〈イベントスケジュール〉

11：00	開場
11：30—11：50	開会の辞 来賓挨拶
第1部	
11：50—12：20	<p>地域活動館「なばな会」によるコグニサイズ</p>  <p>コグニサイズとは、国立長寿医療研究センターが開発した運動と認知トレーニングを組み合わせた認知症予防プログラムのこと。この日は柏市豊四季台団地の地域活動館で活動している「なばな会」のメンバーの指導の下、200人弱の高齢者のみなさんが体験した。</p>
12：20—12：50	昼食会
12：50—13：20	<p>地域活動館「午後の軽音楽」有志による演奏</p>  <p>昼食後は、「なばな会」と同じく、地域活動館で活動するシニアエレキバンドHKT+1の演奏で始まった。プレイヤーも全員70歳以上の高齢者であった。</p>
第2部	
13：30—15：00	<p>ブース企画</p> <p>第2部では地域活動館で活動している3団体が企画した「交流カフェ」、「コグニサイズ」、「ふまねっと運動」のコーナーの他、(株)資生堂のご協力によって「いきいき美容教室」のブースが開かれ、メイクアップ法はもちろんのこと、顔の血行を良くするマッサージ法やオーラルフレイルを予防するための口腔内筋トレ法などが紹介された。</p> 



「交流カフェ」



「ふまねっと運動」



「いきいき美容教室」



「コグニサイズ」

GLAFSからは共同研究ごとに3ブースを開き、高齢者の日常生活の様子や、ニーズの把握に努めた。

GLAFSで企画したブースとその目的は次のようなものであった。

共同研究 G1/G2/G3 「住み替え双六」

IOGが作成した「住み替え双六」を使いながら、現在の暮らしやすさや、今後の居住環境に求めるものを聞き取った。



住み替え双六

共同研究 G4/5/6 「大人の遊び企画」

最新のテーブルゲームを体験してもらい、シニアの方がどの部分に面白さを感じるかを調査した。



共同研究 G7 「最新技術体験」

バーチャルリアリティやIoTなど、最新の技術をわかりやすい形で体験してもらい、生活にどのような形で応用できるかを一緒に考えた。



15 : 00

閉会

■ フィールド演習 2 (ケア・システム実習型)

実践的課題解決能力を養うために、医療や介護を必要とする高齢者の生活実態や、高齢者の生活を支える医療・介護・看護の実際を把握するため、生活支援や介護サービス施設の見学、訪問診療・訪問看護に同行する実習型のフィールド演習を行った。

実習前、他分野の学生でチームとなり、各自で参加目標を立案し、その目標をチームメンバー間で共有した。実習では、介護サービスを利用する高齢者に触れ、当事者の思いを捉えた。また、高齢者の地域生活を支える介護・訪問看護・訪問診療の機能を理解し、具体的な課題やその解決策を探索し、自らの専門分野で期待される役割を考えた。

スケジュールは、下記のとおりであった（介護は全コース生参加。訪問診療と訪問看護は希望者のみ）。

〈目標〉

- ・ 介護サービスを利用する高齢者と話をし、当事者の思いを捉える。
- ・ 参加目標を立案し、その目標をチームメンバー間で共有する。
- ・ 多専攻で構成したチームメンバー間で協力して、自らの専攻の役割を發揮し、実習（事前学習とレポート作成も含む）に取り組む。

〈実習先と日程〉

実習先	日程
地域包括支援センター	11月 9日（金） 9：00～17：00
	12月 14日（金） 9：00～17：00
小規模多機能型居宅介護	11月 29日（木） 9：00～17：00
専門職による相談事業 A	11月 24日（土） 13：00～16：00
	12月 22日（土） 13：00～16：00
専門職による相談事業 B	12月 5日（水） 14：00～16：00
訪問看護ステーション	1月 17日（木） 9：00～12：00
看護小規模多機能型居宅介護	1月 17日（木） 14：00～17：00
訪問診療	12月 18日（火） 13：00～16：00
	2月 19日（火） 13：00～16：00

〈コース生の感想〉

原菌陸正（新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻 修士2年）

訪問診療に同行し、どのような診療が行われるかを見学させていただきました。様々な家族構成・身体状況の患者様への診察を見学させていただき、若年層と比較して高齢者の身体状況や周囲の環境は大きく異なることを実感しました。また、実習に参加する前は、病院での医療行為の延長上に在宅診療があると考えていました。しかし、医療行為の目標として、病気の原因を除去し以前の身体状況を取り戻す“闘う医療”と、病気による苦しみを緩和し病気と上手く付き合っていく“病気と付き合う医療”の2種類があることに気づかされました。

実習参加の目標として、自身の基礎研究がどう応用されるかを見てこようと考えていましたが、結果として病気と付き合う医療という全く別の視点に触れることができました。当初想定していた学びとは異なる成果ではありましたが、自分が深掘りしている領域とは異なるものを学ぶことができ、GLAFSの掲げるT字型人材で言うところの横の視野・知見を得られました。

船城桐子（新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻 博士1年）

今回、医療機関外の国内初のがん患者のための相談施設が、がん患者さん、がん患者家族をどのように支えているのか学ぶべく実習に参加させていただきました。印象的であったのは、ヒューマンサポートケアの方法とケアを支える空間の創出に力を入れていることです。サポートケアとはあくまでも「自分の力を取り戻す」ためのものであり、何かを強要するのではなく、看護師や心理士さん達プロによって、自己決定を後押しする安心感が提供されることに重きを置いているように感じました。またそのために、プライベートを適度に保つ仕切りや窓の高さの設定、温もりを感じさせる木目調の家具などを用いるなど、話しやすくなる空間の提供（建築）に力を入れていることが他の施設と異なりました。相談者の本来のニーズを聞き出すためには、人と建築の両要素が必要であり、今後医療・介護現場などにおいて広く導入されていくべき要素であると感じました。

■ フィールド演習3（インターンシップ型）

2011年に設立された東京大学産学ネットワーク「ジェロントロジー」（自動車、電機、住宅、食品、生活用品関連等の企業が約40社参加）と連携。年3回の全体会（6/22、11/22、2/22）に学生も参加し、企業のスタッフとディスカッション、交流をした。各回に招へいした講師と演目は下記の通りである。

〈第1回全体会・講演内容〉

講演1 「自動運転の現状と展望」

鎌田実（新領域創成科学研究科教授）

講演2 「JST S-イノベ『高齢社会を豊かにする科学・技術・システムの創成』の成果と今後」

伊福部達（北海道大学名誉教授・東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構特任研究員・JST 領域代表）

〈第2回全体会・講演内容〉

テーマ：高齢社会における先進的トピックスを学ぶ

講演 「生涯活躍のまち（日本版CCRC）について」

中野孝浩（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 内閣参事官）

ケーススタディ①「都留市、佐久市の事例」芳地隆之（〈一社〉生涯活躍のまち推進協議会事務局長）

ケーススタディ②「近江八幡市の事例」大方潤一郎（工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）

〈第3回全体会・講演内容〉

講演 「東急多摩田園都市・次世代郊外まちづくり—官民連携による郊外住宅地再生—」

泉亜紀子（東京急行電鉄株 都市創造本部開発事業部 次世代郊外まちづくり課長）

グローバル演習

■ グローバル演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

国際的なコミュニケーション能力と多文化・多分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組む「グローバル演習」を開講した。

開講時に英語運用能力測定試験を実施し、3段階の能力別クラス分けを行い、1クラス4～7名×4クラスの少人数クラスにて指導を行った。

プログラムの内容は、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、論理的会話力、ファシリテーションの能力を向上させる英語学習の研修プログラムと、語学を活用し、リーディングプログラムの趣旨に沿った高いコミュニケーションスキル、グローバルマインドを向上させる研修プログラムによって構成され、年間22回×3時間 合計66時間のコースで、英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション能力の育成を図った。また、終了時にも英語運用能力測定試験を実施し、学生へのフィードバックを行った。

■ グローバル演習 2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

留学先① Carnegie Mellon 大学（アメリカ）

参加学生：小松廉 工学系研究科精密工学専攻 博士3年

渡航目的：A Dense Monocular SLAM using Semantics information

実施期間：2017年7月8日～2018年6月15日

留学先② Columbia 大学（アメリカ）

参加学生：楊濤嘉 工学系研究科精密工学専攻 博士2年

渡航目的：The stair mill training project which analyze how humans accomplish the stair climbing task on stair mill.

実施期間：2018年4月1日～2018年9月30日

〈留学報告 1〉

海外留学報告書

GLAFS 3期生

工学系研究科 博士課程3年

小松 廉

留学概要

1. 留学先の概要

Carnegie Mellon University, Robotics Institute

Carnegie Mellon University はアメリカの名門大学である。Robotics Institute は世界で初めて Robotics

の PhD コースを設置した大学で、現在でもロボティクスの分野でトップの研究が行われている。

Air Lab

Prof. Sebastian Scherer が率いている Air Lab は、ヘリコプターやドローンの自律飛行を目指して技術開発を行っている研究室である。ドローンとレーザーを用いた老朽化した橋の点検にも取り組んでいる。

2. 留学準備

(1) 応募

留学先選定について

M2の時にSGUの支援を受けてTUMに留学した際には、指導教員（浅間先生）の友達先生の研究室へ留学した。その研究室では友好的な雰囲気でもて迎えていただき、ミュンヘンの伝統的な料理に連れて行ってくれたり、1ヶ月弱の留学生生活を非常に楽しむことができた。しかし、研究面では私の研究テーマとは異なる研究室であったため、あまり得るものは多くはなかった。したがって、今回の留学先を決めるにあたり、指導教員の知り合いから選ぶのではなく、全世界の中から自分の研究テーマに近い研究室を選ぶことを心がけた。

また、留学先のテーマで学会に出したいと思っていたので、学会発表を多く行っている研究室を中心に調べた。したがって留学先を決める際には、ロボット系の Top conference の ICRA や IROS の予稿集から自分の興味がある論文を片っ端から集めて、その中から選ぶことにした。調べていく中でちょうど私が当時行っていた研究テーマの発展系の論文に出会い、「これだ！」と思った研究室に留学したいと思い、その研究室の先生、Basti にメールを送った。

メールを送ってしばらくすると、浅間先生から電話があった。驚くことに、その日 Basti は日本に講演会で来ていて、その講演会に浅間先生もいたのである。私はすぐにその会場に向かい、簡単に Basti と面接し留学の許可を得た。こうして、私の留学先は Carnegie Mellon University, Robotics Institute, Field Robotics Center と決まった。

英語面接

直接会った数日後にメールがあり英語の面接が必要とのことだった。当時は面接で落ちたらどうしようとして非常に不安になっていたが、面接の中身は留学先で何やりたい？などといった簡単なものばかりだった。留学後に調べたところ CMU の規則により Visiting scholar で留学するためには TOEFL84 点以上が必要で、そのスコアがない人の救済措置として英語面接により受け入れる先生の判断で受け入れ可能というものだった。という訳で、無事に受け入れが決定した。

VISA の申請

受け入れが決定したのが、2017年3月22日であった。本来は学期の始まりの4月1日から留学を行いたかったが、VISAの申請が3ヶ月くらいかかるということで7月10日を開始日として申請を行った。結果として、時間が余ることもなくちょうどよい開始日となった。

(2) 渡航前の準備（研究面）

英語に不安があったため、留学直前の4、5月はフィリピンで英語留学を行っていた。したがって、あまり時間をかけて準備を行うことができなかった。行ったことを以下に記す。日本では Windows を中心に使っていたが、留学先では Ubuntu を使うということでパソコンにインストールを行い使い慣れるように練習を行った。

留学先で行う研究テーマを決めるために文献調査を行なった。

(3) 渡航前の準備（生活面）

留学先で一番の問題はお金をどうアメリカに送るかといった点であった。GLAFSからの学習奨励金は日本の銀行に振り込まれるため、アメリカに送る手段を調べ以下の準備を行った。

- i) GLAFSの学習奨励金はオンラインバンキングができる楽天銀行に振込先を変更した。
- ii) 楽天銀行で海外送金できるように手続きを行った。
- iii) 簡単にアメリカで現金をおろせるようにマネバカードの申し込みを行った。

実際に、留学先で生活してみてマネバカードが非常に便利に使うことができた。マネバカードでは日本円でチャージした金額を好きな時にドルに変え保管することができ、好きな時にドルで引き出せるものである。チャージは楽天銀行のオンラインバンキングで行うことができるため、学習奨励金で振り込まれたものをすぐにドルで引き出すことができた。ATMによっては引き出す際の手数料が高かったが、CMUのUniversity centerには手数料が無料のATMがあったため助かった。留学の準備で追われ、家の片付けが最後の最後まで終わらずに、大変な思いをした。急なお願いにも関わらず片付けを手伝ってくれたNさんに感謝してもしきれない。

3. 留学期間中

(1) 研究生活

留学先では今までやっていたテーマと異なるものに取り組んだため、1年間でやることが尽きるのがなく忙しかった。

基本的に、火曜日にA4数ページの進捗レポートの提出と、金曜日に研究グループのミーティングといった形で研究を進めていった。同様のテーマを持つ博士課程の学生を上につけていただき、わからないことは相談できる環境だった。

計算資源も存分に使わせていただき、日本の研究室ではできないような実験ができて非常に感謝している。研究室のチャットシステムとしてslackが使われており、常に最新の論文やロボット系のニュースに関する話題が飛び交っていた。

Robotics Instituteでは毎週金曜日に他大学から先生を招いて講義が行われていた。毎回、著名な先生が来てくれるので、非常に学ぶものがあった。図書館は深夜の1時まで開かれており（金曜日は早めに閉まる）、平日も土日遅くまで学生で溢れていて勉強に取り組んでいた。このような姿を見ているだけで刺激になった。

(2) 現地での生活

田舎にある大学だったため非常にのんびり過ごすことができた。NYC等のアメリカの都市部に比べて家賃が安いほうではあるが、一人で暮らすにはお金が足りずシェアハウスで暮らしていた。家賃は670ドル。研究室には中国人とインド人が多く、アメリカ人と話す機会がほとんどなかったため、アメリカ人と暮らすシェアハウスは語学面で非常に良いものだった。暮らしていく中でネイティブが使う言い回しを学ぶことができた。外食は非常に高いので自炊にも取り組んだ。米はAmazon.comで買うことができたので、家で炊いて、おかずはひき肉を炒めるといった簡単なものを作って食べた。基本的に2-3日分まとめて作り、大学にもタッパに詰めたものを持っていった。

(3) 余暇の過ごし方

余暇はNetflixで海外ドラマを見ていることが多かった。また、ジムに通ったり、ダンスをしたりして過ごした。Thanks Giving Dayにはターキーを食べ、次の日のBlack Fridayにはアウトレットパークにお買い物に行くなど少しはアメリカらしいことができてよかった。

4. アドバイス・その他特記事項

前々から TOEFL の勉強をしたり、海外ドラマを見たりして、英語の勉強をすることが重要だと思う。しかし、英語の勉強は絶対ではなく、私のように留学したいならまず行って見て留学先で勉強するのも手だと思う。留学先で感じて驚いたことは、1日の時間が非常に長く感じることである。1日30時間くらいあるように感じるので、留学先で時間がいっぱいある中で英語の勉強をするのも手だと思う。英語の勉強は非常に時間がかかるものなので、英語は得意ではないけど留学したいという人は半年以上行くべきだと思う。私は、半年くらい経ってなんとなく英語がマシになってきたかなと感じた。

GLAFS 以外にもトビタテ！留学 JAPAN といった文部省の留学制度もあるので、ぜひ使ったほうが良いと思う。また半年以上休学する場合は、学振を次年度も申し込めたりするので、この点でも他の制度を使う利点があると思う。スウェーデンに渡航する際、長期夏季休暇に特に気をつける必要がある。スウェーデンは労働環境が整っており、夏季はどのような職種でも約1~2ヶ月間の長期休暇を取得する人が多い。特に6月半ば~8月半ばは、行政機関等の職員も順に休暇に入るため、ビザや倫理審査などの申請に関する対応に時間がかかる。そのため、上記期間内、あるいは上記期間を跨ぐ申請を行う場合は、以上のことを考慮して計画を立てる必要がある。また、訪問調査に行く場合も、上記期間は、公共機関などは外部からの訪問を受け入れない場合がある。そのため、どうしても上記期間に調査を実施したい場合は、時間的に十分な余裕を持って調査依頼を行う必要がある。ただし、事前に調査依頼をしたとしても、訪問を受け入れてもらえるかは定かではない。スウェーデンへの調査や留学を考えている方は、参考にして頂ければ幸いに思う。

キャンパス写真



〈留学報告 2〉

海外留学報告書

GLAFS 3 期生

工学系研究科 博士課程 2 年

楊 凜嘉

留学概要

In 2018, I visited Robotics and Rehabilitation Laboratory (ROAR lab) in Department of Mechanical Engineering, Columbia University in the U. S. from April to September. ROAR lab is focused on developing innovative robots and methods to help humans relearn, restore, or improve functional movements. The laboratory is led by Dr. Sunil Agrawal, and consisted of tens of Ph. D candidates from all around the world. They collaborated with clinical faculty from Columbia University Medical Center

and hospitals around New York City. I participated in the stair mill training project and collaborated with a phd candidate comes from Taiwan. We worked on analyzing the kinematics and muscle activation during stair climbing. We used motion capture system and surface EMG device to record human movements and muscle activation during stair climbing. We also have a pair special shoes to measure the force on feet. These shoes were developd by another phd candidates working on another project. The shoes can measure three parts of reaction force of the feet, including the toes, soles and heels. All the kinematic, EMG and force data were used to analyze how humans accomplish the stair climbing task on stair mill. Our experimental results will provide information and suggestions to stair mill training tasks.

I. Overview of Columbia University and ROAR lab

Columbia University

Columbia University is one of the world's most important centers of research and education. The university is established at 1754, which has a long history. The following photos show the main campus, Morningside campus, locates at Manhattan. The campus is not big comparing to other American Universities. Although Columbia University is famous for its law school and business school, its Engineering school also has many famous professors and researchers.



ROAR Lab

ROAR lab is focused on developing innovative robots and methods to help humans relearn, restore, or improve functional movements. The lab is housed both in Engineering and Medical campuses of Columbia University. Led by Dr. Sunil Agrawal, the lab works actively with clinical faculty from Columbia University Medical Center and hospitals around New York City. Human studies have targeted elderly subjects and patients with stroke, cerebral palsy, spinal cord injury, Parkinson's disease, ALS, and others.



II. Preparation for studying abroad

A. Application

With the financial support from GLAFS program, I planned to find an exchange program and visit a university in eastern America. Therefore I searched the related laboratories who also did rehabilitation research in robotic field. And I found one laboratory in Department of Mechanical Engineering, Columbia University which mainly focuses researches on rehabilitation. This laboratory is called robot-

ics and rehabilitation (ROAR) lab, which is led by Dr. Agrawal. I found that the lab members use similar experimental device as I used, and they also analyze kinematics in human movements. It seems that I can start my experiment easier in ROAR lab. In addition, I found they even design exoskeleton by themselves and print the components of exoskeleton using 3D printer. I was interested in development of this kind of hardware and I thought it would be a good chance for me to learn about it. I also found that they have EMG device but they did not make full use of EMG signal. I thought it may be my advantage because I can use my muscle synergy model in their research and collaborate with them. Therefore, I prepared a video to introduce my research and write an email to Dr. Agrawal to ask if he is willing to give me an opportunity to visit his laboratory for half a year. He replied me and told me he would like to have a skype meeting with me.

B. Preparation before the visit (in relation to research)

Before got the exchange opportunity to Columbia University, I had a discussion with Dr. Agrawal via skype for about half an hour. Firstly I gave a presentation to introduce my research in sit-to-stand motion of healthy elderly and stroke patients. I talked about the results I obtained and my future plan. Then Dr. Agrawal introduced the research projects in his laboratory and give some suggestions about the projects that I can participate during my visit. I also read their papers published in the past 2 years to get an insight view about their research.

After the meeting, I started to prepare the documents I needed to apply a J-1 visa. I sent my resume and funding statement to Columbia University and got my "DS-2019" sheet after three months. The "DS-2019" sheet is need to apply a J-1 visa and it takes different times to get the sheet from different universities. I planned to visit Columbia University from April but when I got the "DS-2019" sheet it is already March. I thought I prepared enough time for the application of "DS-2019" sheet but three months is still too long. At that time I was thinking to shift the visit time in case I cannot got my visa successfully. Once I got the "DS-2019" sheet, I started to schedule my appointment online. At that time I only had about 25 days. My friend told me it may took longer time to get visa if I mentioned some words on the alert list. Therefore, I carefully prepared my interview and luckily I past it and got my visa in one week.

C. Preparation before the visit (in relation to living abroad)

While preparing the documents for applying visa, I also tried to find a house in New York City. However, the rent is relative high in New York City, especially in Manhattan (Columbia University locates in Manhattan). So I decided to apply the additional budget from GLAFS program. I wrote a statement of circumstance and listed my budget for rent and details about all the other living expense. Then I prepared a document to describe the estimate of accommodation. Meanwhile, I contacted Chinese students who living in Jersey City and tried to rent a room from them. Jersey City is not far from Manhattan and the rent is lower. Sharing the house with other roommates also cut the living expense. Finally I rent a room with the price of 950 dollars per month.

Besides rent a house, I also bought health insurance in Japan. The medical expense is too expensive in the U. S. and usually people cannot afford it by themselves. For air tickets, I strongly suggest that booking the air tickets after obtaining the visa because no one knows how long it may take to get the

J-1 visa. And there is also a risk of being declined. After preparing all the things, I started to pack my luggage and flew to the U. S. on April 2nd.

III. My stay in Columbia University

A. Research

During my stay in Columbia University, I went to ROAR lab on weekdays and did the stair mill project with a female PhD candidate who came from Taiwan. We need to attend the project meeting every Monday and present our process on the project to the professor. Then we discussed what we could do next. The project meeting usually took one hour which was much shorter than the meeting in my laboratory in Japan. Other weekdays we just discussed how to design the experiments, invited students to be our subjects and finished the experiments. We used motion capture system to record the kinematic data and analyzed how healthy subjects climb stairs. We also used surface EMG device to measure muscle activation of the lower limb muscles. We need to analyze the joint angle data, center of mass of the pelvis movement and the EMG data. Processing the experimental data also took a lot of time. We finished the experiments together and I mainly worked on the EMG data. I built a model to help preprocess the EMG data and also extracted the muscle synergy structure from the raw data.

ROAR lab also has group meetings every Wednesday. Usually they let the new comers introduce themselves first, because the master students, undergraduates and even high school students may participate in some projects. I was surprised when I found that master course students in the U. S. do not need to do research. Many of them only take classes, and they can also choose to join a lab and do some research work. Sometimes PhD candidates working on different projects would introduce their work when they found some results in their experiments. They would present and discuss their findings with other lab members at the same time. Because all the members in the lab do similar research and they are familiar with human movements and kinematic analysis, they can give many useful suggestions. I also did presentations three times to introduce my findings and summarize my work there. The master students and undergraduates also need to make presentations every semester. Sometimes Professor Agrawal will invite professors and researchers from other universities and research institutes to make presentations and introduce their work. They will discuss if they can collaborate and try to make something new in the rehabilitation field.

B. Daily life

To cut my living expenses, I chose to live in Jersey City. It is a little far from Columbia University and it took about 1 hour on the way to school. Sometimes even one and a half hour if I met a traffic jam or the subway suddenly stopped. I usually left home at 7:30 am and took a bus to the Bus terminal on Times Square. Then I transferred to subway to go to St. 116th Columbia from St. 42nd Times Square. For lunch I usually went to a popular burger shop called "Shake & Shack" in front of the entrance of Columbia University across the street. Actually I went to school cafeteria on April, but all the cafeterias were closed from May to September because of the Summer Vacation. Sometimes I also went to Korean or Southeast Asian restaurants with other lab members. Students usually leave lab earlier in the U. S., so I went back home at 5:00 pm. I seldom hung out in the evening, considering the safety problem.

C. My free time

The U. S. also have some three days vacations similar to Japan. I visited other famous cities in the eastern America on these holidays. I went to Washington D. C. and looked around the capitol, Lincoln Memorial, Thomas Jefferson Memorial, white house and took photos of white house in the first day. The second day I visited a lot of museums. The museums in Washington D. C. are free while in New York City it costs \$20 for each museum.

I went to Boston for sightseeing in the end of June because my friends told me the best season for Boston is summer. Boston is more peaceful and suitable for living comparing to New York City. Its seafood is famous in the eastern American, especially the lobster. One choose for its breakfast, which is called benedict is made of lobster while in other cities it is made of shrimp. I went to Boston City Hall which has a golden top. I also visited Harvard and MIT but unfortunately many buildings were closed on weekends. I bought their clothes and caps in the coop

IV. Advice for those planning to study abroad in the future

In my opinion, I suggest to leave enough time to apply the “DS-2019” sheet and visa, which both takes long time. In my case, I did not expect that my “DS-2019” took 3 months and I even thought about shift my visiting time if I could not obtain my visa on time. For visa interview, I suggested to read the alert list in advance to find if our research is on the list. And it is necessary to prepare our resume and give answers carefully in the interview. Once be checked, we may need to wait at least one month before obtaining our visa. I also recognize to practice English listening and speaking as much as possible because Americans speak very fast it is hard to catch their points for nonnative speakers.

V. Other notable information

The U. S. is not safe as Japan, especially in the night. I suggest not to hang out after sunset and always bring at least 20 dollars cash with you. Another thing is do not forget to give tips when you eat at any restaurants. The tip usually costs about 15% to 20% of your total bill. Japanese students may not get used to this because we do not need to give tips in Japan. Also, I have to admit that the service is not good in the U. S.

■ グローバル演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー

2018年度の実績は以下のとおりである。

6/12 第1回 IOG/GLAFS 特別研究交流会

話題提供者：Aaron Wyllie, PhD Candidate, Department of Social Work, Monash University, Australia

講演タイトル：Finding (a) place in old age: understanding the relationship between urban change, place attachment and a meaningful old age

オーストラリア・モナシユ大学から東京大学高齢社会総合研究機構に研究交流で滞在中の PhD Candidate、Aaron Wyllie さんが、自身の博士号研究について発表し、GLAFS 生他とディスカ

セッションをした。メルボルンの、近年急激に環境が変化している一地区を舞台に、環境の変化とそこに住む古くからの住民層である高齢者と、新しく流入してきた若者層の対比やその中で生まれる交流などを丁寧に紹介した。また、まちづくりと住民支援のあり方についてのアクションリサーチを行っており、その報告や研究手法について議論が深まった。GLAFSでの演習や各自の研究活動で、高齢社会のまちづくりやアクションリサーチを実践している学生たちにとっては、海外のアクションリサーチ、地域介入の活動はみじかなテーマであり、同じ博士論文を執筆している学生としても多くの刺激が得られた。

6/27 国際シンポジウム「長寿者の暮らしを支える支援機器とサービス」(共催)

International symposium 'Assistive Products & Supporting Centenarians Lives'

6月27日、高齢社会総合研究機構共催の国際シンポジウム「長寿者の暮らしを支える支援機器とサービス」が本郷キャンパス福武ホール・福武ラーニングシアターで開催された。

セッション1では、アイルランドからお招きしたマルコム・マクラ克蘭先生(アイルランド国立大学メイヌース校教授)とエイリシュ・マカウリフ先生(アイルランド・ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン教授)に加え、権藤恭之先生(大阪大学人間科学研究科准教授)、井上剛伸先生(国立障害者リハビリテーションセンター福祉機器開発部部長)が、国内外の高齢者支援機器開発、老年学の最先端の研究動向を紹介。セッション2では、WHO神戸センターとの共同研究プロジェクトとして進めている調査研究「日本の長寿者に学ぶ支援機器の利活用」(研究代表者 新領域創成科学研究科/IOG 二瓶美里講師)やIOGの取り組みなどの紹介のほか、新領域創成科学研究科の修士生が柏で行っている長寿の方々の支援機器利用に関する事前調査についての報告も行われた。

私たちが自立と尊厳を持った豊かな暮らしを続けるために支援機器や支援サービスはどうあるべきか、新しい技術の可能性はどこにあるか等、考える良いきっかけを与えてくれたシンポジウムとなった。



エイリシュ・マカウリフ先生の報告

10/29-30 第2回東京大学-ストックホルム大学群 合同ワークショップ

Multidisciplinary collaboration for sustainable development

10月29、30日の2日間、スーパーグローバル大学創成支援事業による戦略的パートナーシップ大学プロジェクトの一環として、東京大学-ストックホルム大学群(スウェーデン王立工科大学、

カロリンスカ研究所、ストックホルム大学) 合同ワークショップが開催され、大方潤一郎機構長、飯島勝矢教授、GLAFS 生 4 人が参加した。

飯島教授は本郷キャンパス伊藤謝恩ホールで行われた初日のプレナリーセッション「Healthy aging (2)」でフレイルについて講演。2 日目には 8 テーマに分かれてワークショップが行われ、飯島教授がオーガナイザーとなった「Healthy ageing and well-being: From social science aspects」のグループで、GLAFS 生たちが発表をした。

【1 日目】 プレナリーセッション



「Healthy aging (2)」の議長を務める大方機構長 (右)



飯島教授の講演。演題は「To achieve healthy ageing and well-being: Multi-faceted action research of " Frailty prevention"」

【2 日目】 ワークショップ

田中友規 (医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻 博士 4 年)

発表テーマ: Community intervention with multidisciplinary collaboration for frailty prevention



「私自身は今回のワークショップや研究テーマの方向性を定める目的で、昨年度ストックホルム大学に足を運ぶところから関わっていたので、この 2 日間で極めて盛会となり嬉しく思いました。また、国際的にも最前線の研究者達と研究を紹介し合う機会は大変刺激的であり、分野横断的な視点の重要性を新たにしました。今回、築いた関係性をより深め、今後の共同研究に発展させることで、国際社会に貢献し得る持続可能なアウトプットを目指していきたいと思ひます。」

松田弥花（教育学研究科総合教育科学専攻 博士3年）

発表テーマ：Lifelong learning system in Japan and Sweden



「29日と30日の両日も参加させて頂きました。初日のプレナリーセッションは、多領域における先駆的な研究のお話を伺う貴重な機会でした。持続可能な社会に向け、人・社会・モノの構造やあり方について領域横断的に考えていくことの重要性を改めて認識しました。

2日目のサテライトワークショップでは、20名ほどの高齢社会に関心を寄せる人びとが集まり、終日にわたり医学、心理学、社会学、教育学などの幅広い視点から議論が交わされました。私は、これまでスウェーデンの生涯学習について研究してきた成果を活かし、日本とスウェーデンの生涯学習システムについて、比較の観点を交えながら発表しました。いくつも質問を頂き有り難かったと同時に、スウェーデン側の参加者は日本の公民館に特に関心を示してくれ、国際的な場で日本独自の文化を発信することの意義を実感いたしました。

2日間を通し、昨年度のワークショップ以来、1年ぶりに再会できた先生や、新たな出会いもたくさんあり、様々な方と交流を深め、有意義な時間を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。」

寺澤さやか（教育学研究科総合教育科学専攻 博士1年）

発表テーマ：Work-life balance in Japan



「2018年10月29日～30日に東京大学本郷キャンパスで開催されたストックホルム大学群との合同ワークショップに参加させて頂き、サテライトワークショップである「Healthy ageing and well-being: From social science aspects」で、個人研究の口頭報告をいたしました。このワークショップでは、スウェーデン側から5名、日本側から4名の研究報告があり、幅広い領域の最新の研究成果に触れ、大きな刺激を受けました。

私は「Work life balance in Japan」というタイトルで、自分の研究テーマである「不妊治療と仕事の両立」に関するインタビュー調査の結果を報告いたしました。国際ワークショップでの研究報告ははじめての機会でしたが、研究テーマの背景にあるジェンダーや雇用システムに関する日本の特徴を、どのように表現すると国外の方に伝わりやすいかといった観点から発表の準備をすることで、自分の研究についてより広い視野で捉え直す機会にもなりました。このような機会を得られたことで、より国際的・学際的な広がりを持つ研究をしていきたいという思いを新たにしました。」

駒沢行寛さん（工学系研究科都市工学専攻 博士1年）

発表テーマ：Community development practice in suburban Tokyo



「私が参加したセッション（Healthy aging and well-being）は、教育及び医学のバックグラウンドを中心に、職業的ストレス、フレイル、社会教育、ワークライフバランス、マクロ的な経済的分析など、多岐にわたる内容で展開されました。そんな中、人の生命力を、純化させた言葉で著してくれる研究には惹かれるものがありました。遠い北欧の地から、「人生は旅だ！」という90歳の老人が発した言葉を、仄かに香らせてくれるような、そんな研究が印象的でした。何より、同じ問題意識を持つ研究者同士が巡り逢い、談笑している風景は、どこか友を懐かしむような、心象的な雰囲気でした。ごく僅かな時間でしたが、参加した学生、研究者や教員の意外な一面が垣間見え、全員で「ゆびわっか」をしたチャームな姿も、一つのハイライトのように思います。この東京にあって、豊かなひとときであったように感じます。私たちよりももっともっと若い方達が、早いうちにこうした機会に顔を出されることを期待するばかりです。最後に、このような貴重な機会をいただき、また企画・準備・運営をされた方々、皆さまに、深く感謝いたします。」

1/21 第2回 IOG/GLAFS 特別研究交流会

話題提供者：Professor Ismail Tufan, Gerontology Faculty, Akdeniz University, Antalya, Turkey

講演タイトル：社会とテクノロジー

トルコ、アクデニズ大学のイスマイル教授と村上教授が、東京大学高齢社会総合研究機構を研究交流で訪問し、「社会とテクノロジー」をテーマとした講演を行なった。近年ますます速度が早まる科学技術の変化は、高齢社会そして高齢者の暮らしの問題を解決する可能性がある一方で、それを使いこなす人々の側にも変化を必要とする。倫理的な課題も含めて、高齢社会とテクノロジーの社会が、どのような課題を抱えうるのか、またどう解決しうるのかという講演だった。参加したGLAFS生からは、日本や自分の出身国での状況とトルコの状況を比較して、何が世界共通の問題なのかといった視点での質問やコメントがあり、熱心なディスカッションが繰り広げられた。

コアセミナー

コアセミナーとして、次のような学際的な研究指導の体制を確保した。

CS1：修論・博論の研究に関し、他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を確保し、専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導

CS2：医療・看護・介護や、まちづくり、新たな高齢者ビジネスなどの様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話をうかがい、ディスカッションするケーススタディ

月	日	CS1	CS2	
			内容	講師
4月	21日	新入生 研究計画報告 グループ共同研究発表会 1 研究進捗状況発表会 1		
5月	12日		セミナー1 「リビング・ラボ」 超高齢社会対応の製品・サービス開発の手法として注目を集めているリビングラボがもつ可能性について理解を深めたい。	秋山弘子（高齢社会総合研究機構 特任教授） 坂口律江（社会福祉法人伸こう福祉会川崎エリア責任者） 杉浦裕樹（NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ代表理事）
	26日	研究進捗状況発表会 2		
6月	2日	グループ共同研究発表会 2		
	9日		セミナー2 「施設で暮らす・看取る」 高齢者施設での暮らしや看取りが増加する中、最期まで施設で自分らしく、家族や地域とともに暮らしていく実態を知る。そして、人が生き切ることとはどういうことか、そのために家・ケア・医療はどうあるべきか、まちづくりには何が必要となるのかを考える。	小川利久（(株) エイジングサポート 代表取締役） 小林悦子（一般社団法人生活を支える看護師の会 会長）
	16日		セミナー3 「高齢者の移動を支援する制度」 高齢者の移動を支援する諸制度（交通バリアフリー法など）について、基礎的なことを学び、最新の論点を学ぶ。 セミナー4 「高齢者支援機器の実態」 高齢者の移動や見守りを支援するための機器は、支援を受ける人の生活の質確保、介護職員の負担軽減などさまざまな観点で期待が高まっており、その実態を把握する。	松本琢磨（厚生労働省老健局 高齢者支援課福祉用具・住宅改修指導官／介護ロボット開発・普及推進室室長補佐） 大森宣暁（宇都宮大学教授）
		30日		セミナー5 「Age Friendly City (AFC) をつくりよう」 WHOの目指すAFCと超高齢社会における地方自治体の政策のあり方を考え、超高齢社会における地方自治体の政策のあり方について、ともに議論する。グループ別に、ありうる将来の可能性（シナリオ）を描いてもらい、ディスカッションする。 セミナー6 「グループワーク技法を学ぶ」 集团的政策形成の重要性と、そのための小集団の知識を集約し構造化する技法（KJ法型WS）について、AFCを話題にして実習を通して学ぶ。
7月	14日		セミナー7 「セカンドライフジョブ」 リタイア後も経験を活かして、自分の役割が果たせるようにするために、社会でどのような支援が必要となるかを考える。	野田亮子（福岡県70歳現役応援センター・センター長） 田中真宏（ピープルデザイン研究所ディレクター） 長島洋介（高齢社会総合研究機構協力研究員）

	21日		セミナー 8 「人生の最期を支える準備」 自分の意思が明示できなくなった場合や死後のトラブルを回避するために、どのようなことを事前に取り組んでおけばよいかについて考える。	住田敦子 (NPO 法人尾張東部成年後見センター所長) 久島和子 (NPO 法人ライフデザインセンター代表理事) 三国浩晃 (NPO 法人 人生まるごと支援理事長)
	28日	グループ共同研究活動		
10月	6日	GLAFS オリエンテーション	セミナー 9 「団塊スタイル最前線」 70～74 歳の高齢者の約半数は、自分のことを高齢者とは考えていない。従前の高齢者向けの楽しみ・生きがいではない、団塊世代の等身大の楽しみ方、生き方の最前線を学ぶ。 セミナー 10 「Society5.0 へのロードマップを考える」 グループワーク技法②：大集団の知識を集約し構造化する：ワールドカフェ	緒方敦 ((株) ジェイアール東日本企画 企画制作本部副本部長/jeki シニアラボ) 後藤純 (高齢社会総合研究機構特任講師)
	13日	グループ共同研究活動		
	20日	グループ共同研究発表会 4		
	27日		セミナー 11 「高齢者の食事と居場所」 高齢期のフレイル予防対策には、栄養と運動をどのようにバランスよく行うかが必要となる。加えて、栄養と運動とともに、社会参加も重要である。そこで、シニアの外出を促し、心と体を活性化させるための、様々な交流・活動・憩いの場づくりについて考える。	平野覚治 (老人給食協力会ふきのとう理事長) 萩野亮吾 (高齢社会総合研究機構特任助教) 似内遼一 (高齢社会総合研究機構 学術支援専門職員)
11月	10日	研究進捗状況発表会 4		
	17日		セミナー 12 「医療による場づくりと福祉の街づくり」 超高齢社会のまちづくりには、日常生活圏域単位で在宅医療と福祉との連携が必要となる。また、市民が医療や介護サービスを身近に感じ、まちづくりに参画し、地域で支え合うシステムとなるようにすることが重要である。近年、医療関係者が進める医療による場づくりについて、また介護保険制度以前から取り組まれてきた福祉の街づくりのこれまでと、これからについて学ぶ。	清水愛子 (一般社団法人グッドネイバースカンパニー代表理事) 鷺尾公子 (NPO 法人ぐるーぷ藤会長)
	24日	グループ共同研究活動		
12月	1日		セミナー 13 「生活支援を問い直す(自宅で暮らす・最期を過ごす)」 住み慣れた自宅で最期まで自分らしく暮らすためには、住まいとケアがどのように連携すればよいのか、要介護になったときの生活支援はどうなっているだろうか。そこで、住まいとケアサービス、さらに生活支援との連携の最前線を学ぶ。	柴田範子 (NPO 法人 楽 理事長) 関野幸吉 (SONPO ケア(株) 地域包括ケア推進部部长)

	8日		セミナー 14 「地域を見守る～家族から社会へ～」 心身が弱ってきた高齢者の自立的生活を支えるためには、地域協働の見まもりと生活支援体制が重要となる。地域住民による見守りの最前線を学ぶとともに、住民の限界を専門職との連携やAI等のICT技術の活用によって協働して行う取り組みの最前線を学ぶ。	菅原健介（(株)ぐるんとびー代表取締役） 後藤純（高齢社会総合研究機構特任講師） 伊藤研一郎（高齢社会総合研究機構特任研究員）
	15日	グループ共同研究発表会 5		
	22日	グループ共同研究活動		
1月	12日		セミナー 15 「高齢期のバリアフリー支援・住み替え支援」 高齢期になると戸建ての管理が負担になる。そのため郊外戸建て住宅では住み切れない世帯が増加することが想定できる。そこで住宅のバリアフリー化に関するガイドラインや、住み替え支援（住宅建設助成、リバースモーゲージ）、またその後の中古住宅流通促進、空き家の利活用など、戸建てに関する動向の最前線を学ぶ。	服部哲治（公益財団法人武蔵野市福祉公社 武蔵野市高齢者総合センター所長） 岸英恵（積水化学工業（株）住宅カンパニーフロンティア事業統括部高齢者事業グループ部長）
	26日		セミナー 16 「今年度のセミナーをまとめる」 今年度のセミナーで現実の高齢社会問題の解決に資する最新の知識や先進的な事例を学んだ。最終回のセミナーでは1年間の学びを振り返り、高齢者が暮らしの多様性を失わず、自立した生活を営むための発想を深めるための議論を行う。	後藤純（高齢社会総合研究機構特任講師）
2月	9日	研究進捗状況発表会 6		
3月	9日	グループ共同研究発表会 6		

3. 夏季セミナー

1期生から5期生まですべての学年がそろった本年度は遠方での合宿に替えて、本郷キャンパスで夏期セミナーが開かれた。恒例のグループ共同研究発表や研究進捗状況の発表に加えて、Society5.0を題材にした話題提供とグループワークを企画。話題提供では、情報理工学系研究科の廣瀬通孝教授に「先端技術は社会をどう変えるか—Society5.0に向けて—」として、今後の社会のビジョンをお話いただいた。また、さいたま市子ども未来局の有山信之氏からは「Society5.0実現に向けた産官学民の取組の実態と課題」として、浦和美園の事例について伺った。

その後、「Society5.0」をテーマに9班に分かれてグループワークを実施。今後の社会のビジョンについて様々なアイデアが出たが、Mobility for All、ワンストップの診療センター、Free ロ


ーといったユニークな提案もなされた。

今回のセミナーには、コース生 50 名、教職員 36 名が参加。セミナーのねらいは次の通り。

〈ねらい〉

1. 共同研究プロジェクトの進捗状況を共有し、今後の方向性などについて教員から助言を行う。
2. 院生の個人研究の進捗状況の報告を受けると共に、プログラム担当教員による指導を実施する。
3. GLAFS のプログラムと関わるテーマで、セミナーやワークショップ等を実施する。
4. プログラム担当教員（特に外部教員）と院生の間で懇親を図る。

〈スケジュール〉

1 日目	
12:30	集合
12:30—12:35	開会の辞 全体スケジュール説明
12:35—13:50	共同研究発表 (G7、G3 ①、G3 ②)  G7 の発表
14:00—15:40	研究進捗発表会①
16:00—17:00	Society5.0 に関する話題提供 話題提供① 廣瀬通孝教授 (情報理工学系研究科) 「先端技術は社会をどう変えるか-Society5.0 に向けて-」  廣瀬教授 話題提供② 有山信之氏 (さいたま市子ども未来局) 「Society5.0 現実に向けた産官学民の取組の実態と課題-浦和美園の事例から-」  有山信之氏

17:10—18:40	<p>グループワーク「Society5.0を具体化する」</p> 
19:00—	<p>懇談会・ナイトセッション</p>  <p>ライブラリで行われた懇親会</p>
<p>2日目</p>	
9:30—10:50	<p>共同研究発表 (G4/5/6、G2、G1)</p>  <p>G4/5/6の発表 G1の発表</p>
11:00—12:40	<p>研究進捗状況発表会②</p>  <p>3部屋に分かれて行われた研究進捗状況発表会</p>
14:00—16:00	<p>研究進捗状況発表会③</p>
16:00—	<p>夏期セミナーの総括</p> 

4. 国際・産学活動

国際セミナー・学会等参加状況

10/17 International Alliance of Research Universities (IARU) Graduate Student Conference (GSC) 'Ageing, Longevity and Health—New Frontiers and Perspectives'

世界のトップクラス 11 研究大学による教育研究の連携推進をめざす、大学間ネットワーク IARU (国際研究型大学連合) では、「Aging, Longevity, and Health」を主要研究テーマに、各大学で加齢、老化、社会の高齢化に関する研究に取り組んでいる教員、学生が毎年研究交流をしている。18 年度はシンガポール国立大学 Center for Ageing Research and Education の主催で 10 月 17 日にシンポジウムが開催された。Rogie Royce Carandang さんが大学院生の発表者に選ばれ、自身がフィリピンで主導している研究の成果を発表。また、秋山弘子特任教授が千葉県柏市で実施している実践型研究の取り組みについて講演した。

〈コース生の感想〉

Rogie Royce Carandang (医学系研究科国際保健専攻 博士 3 年)

I learned a lot of things from the scientific presentations, poster sessions and roundtable discussions. The scientific presentations were encompassing which covers many different aspects of aging, from the biomolecular level to theories and practice. What I liked most was the discussion about translating research into practice. We know many things about aging but what is missing is the application of our knowledge in the community. By doing action research, through a bottom-up approach, we can make a difference in the quality of life of older adults. I also had a great time meeting old faces. Since the University of Tokyo hosted IARU two years ago and APRU last year, I was able to meet my old friends and colleagues in IARU Singapore. Also, since the organizers invited many community partners, agencies, and academic institutions, we were able to have significant and productive roundtable discussions. We discussed aging issues related to health and longevity, employability, and housing. Overall, the 3-day conference was worth the time and a valuable opportunity to learn, engage, and share to others what we have done so far.

10/31~11/1 International Joint Seminar - Everyday activities and the health of the urban elderly: Comparison between Japan and Korea

10 月 31 日から 11 月 1 日の 2 日間にわたって、神戸大学と韓国ソウル国立大学が共催の、老年

学に関する大学院生の交流ワークショップ 'International Joint Seminar - Everyday activities and the health of the urban elderly: Comparison between Japan and Korea' が、神戸大学人間発達環境学研究科アクティブエイジング研究センターで開催された。GLAFS から2名が参加した。

1日目は、ソウル大学、神戸大学、東京大学、大阪大学に所属している様々な国籍、研究関心の大学院生が研究発表を行い、GLAFS からはキムテウンさんと前田一步さんが、共同研究グループ1の研究成果を発表した。午後は高齢者施設の見学もあり、学生同士で交流を深めた。2日目はシニア研究者の研究発表が行われ、菅原育子特任講師が中高年者の Anxiety に関する研究発表を行った。

〈コース生の感想〉

前田一步（人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士2年）

わたしたちは「Working towards an age-friendly workplace: from interviews with the elderly and their supervisors」というタイトルで報告しました。フロアからは、いくつかの質問やコメントが投げかけられました。全体として気楽な、しかし熱のこもった研究報告会だったようにおもいます。研究報告会のあとには、神戸市内にある高齢者住宅の見学と懇親会をおこないました。

ソウル国立大の Gyounghae Han 先生が、わたしたちジュニア・スカラーにお話して下さったことが印象的です。複数の学問領域から、しかも国境を超えてわたしたちは神戸に集まったわけですが、Gerontology というひとつの関心によって結びつけられています。この先20年、30年とここで築かれた関係を維持し発展させて、次の研究につなげていければとおもいます。

金兌恩（人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士2年）

2018年10月31日～11月1日、神戸大学で開催された「International Joint Seminar」に参加し、共同研究グループ1の研究テーマである「Working towards an age-friendly workplace: from interview with the elderly and their supervisors」をテーマにして発表をしました。31日は主に大学院生の発表となっており、主にソウル大学、神戸大学、大阪大学からの大学院生が集まり、発表し、意見を交換しました。

発表が終わってからは交流会があり、発表した内容についての意見交換や研究に関する情報交換などを行いました。セミナー後は、「はっぴーの家ろっけん」を訪問し、高齢社会におけるコミュニティーについて考えてみる時間になりました。1日には先生方の貴重な発表を聞いて勉強になりました。

今回のセミナーは国や言語、所属の大学はそれぞれ異なりましたが、高齢社会に関して研究しているという共通のテーマがあり、英語という共通言語で議論し合う、楽しい交流会でした。

11/14～18 The Gerontological Society of America Annual Scientific Meeting 2018

アメリカ・ボストンで開催されたGSA（The Gerontological Society of America：アメリカ老年学会）Annual Scientific Meetingに、今年もGLAFSから多くの学生が研究発表や情報収集、交換のために参加した。GLAFSの共同研究グループからは、2017年度G1/2「要介護高齢者の居住地選択を規定する要因の検討」が2演題をポスター発表（筆頭発表者・角川由香さん、須沢栞さん）。また、駒沢行賓さん、Rogie Royce Carandangさん、馬場絢子さんの3名が、自身の博士論文や修士論文の一部のポスター発表を行った。

〈コース生の感想〉

角川由香（医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士2年）

今年のGSAは、“The Purposes of Longer Lives”をテーマに掲げ、全世界の高齢者のQuality of lifeを改善するために、医学、看護学、社会科学、心理学、経済学など様々な領域から最新のアプローチを共有することを目的として開催されました。朝8時～夜8時と、1日12時間も続けて開催されるGSAのパワーを感じるとともに、Agingはそれほどの時間をかけても行うべき重要な課題なのだと改めて認識しました。私は2017年度共同研究グループG1/2で実施した、グループホームへ入所する際の意思決定に関するケーススタディをポスター報告してきました。発表の際、「介護保険に関して興味を抱き自国の参考にしたい」、「分野横断的に研究を実施している視点が面白い」とのコメントをいただいたことが、とても印象に残っています。ポスター発表の会場は、連日300-400本近くの演題がホールに一斉に並び、見て回るだけで2時間以上はかかります。各所で活発な意見交換がなされていたほか、夕方のポスターセッションでは、無料の軽食やバーカウンター（こちらは有料）もあり、食べたり飲んだりしながらお互いの研究について気軽に意見を交わし合う場面がたくさんありました。互いの研究のよいところを見つけ、さらに「私が知っている研究では、このようなmethodを使っていたよ」「あっちにあったポスターがあなたのフォーカスと似ていたよ」「アメリカの現状は～だけど、日本はどう？」など、情報“交換”がさかんに行われていました。オーラルセッションやシンポジウムでも、多くの会場で立ち見が出るような状況で大きな賑わいを見せていました。今回のテーマにも通じますが、高齢先進国で学ぶ学生として、単に長寿を願うだけでなく、いかに生きるか、ということに貢献できるような研究を続けていきたいと思いました。

須沢栞（工学系研究科建築学専攻 博士3年）

私が参加したポスター発表のセッションでは、300枚にもおよぶポスターが同時に貼り出され、非常に規模の大きな学会という印象を受けました。内容としては公衆衛生分野を中心に、量的な報告が多かったように思います。

今回、私は共同研究G1/2（2017年度）、G2（2016年度）の成果をポスター形式で発表しました。発表内容としては、在宅介護を継続している事例と、施設に入居した事例を通して、在宅介護が継続できる要因について、個別事例のプロセスの詳細な分析から明らかにし、その成果を報告しました。

ポスター形式の発表は、参加者と発表者の距離も近く、研究について気軽に議論でき、非常に有意義な経験となりました。

具体的には以下のような意見をいただきました。「在宅介護が中断されずに継続されていくプロセスを明らかにできたことは大きな成果。これを今後どのように社会に還元していくか。40代くらいの人をターゲットに、事例やエピソードベースで情報発信できるとよいのでは」。

国際学会に発表することで、自分たちの研究意義を多角的な視点から認識できたことも、大きな成果であると感じています。今回の学会参加を通じた議論、得られたモチベーションを今後の研究活動に活かしていく所存です。



ポスター発表する須沢さん（左）

12/7~8 9th Annual Association of Pacific Rim Universities (APRU) Research Conference on Population Aging ‘Dementia, Cognition, and Healthy and Productive Aging’

環太平洋地域の大学で構成される大学連合（Association of Pacific Rim Universities）の Population Aging グループの年次会議が、2018年12月7日から8日の2日間にわたって香港科学技術大学（Hong Kong University of Science and Technology）で開催され、APRU加盟校から参加した著名な研究者のレクチャーや、若手研究者による研究報告が数多く行われた。初日の夕方には大学院生のポスター発表会が開催され、数多くの応募の中から選ばれた16名がじっくり2時間発表を行った。GLAFSからは Rogie Royce Carandang さん、馬場絢子さんが自身の研究を発表した。会議の最後には大学院生の優秀ポスター発表賞が発表され、見事、馬場さんが受賞した。

〈コース生の感想〉

馬場絢子（教育学研究科総合教育科学専攻 博士2年）

今年のAPRUでは、2日間にわたり様々なプログラムが開催されました。社会学・経済学・生物医学など様々な分野で活躍する研究者が、“Dementia, Cognition, and Healthy and Productive Aging”をテーマに最新の知見を発表し合いました。パネルデータや大規模調査データを用いた量的研究に関する発表が多く、統計解析の手法や各国の状況について学ぶことができました。

1日目の夜にはPhDポスターセッションも行われ、私は母親を介護する娘の介護態度と介護負担感に関する質的研究について報告させていただきました。研究手法に関してご質問いただくことが多く、他領域の研究者にも伝わるように説明する難しさを感じる場面もありましたが、「介護者の精神的健康に関わる重要な研究だ」「心理学分野と協働したい」などのコメントをいただき、自分の研究の意義を確認することができました。

APRUはほとんどの参加者が全てのプログラムに出席します。そのため参加者間の距離が近く活発な交流が生まれていました。ランチやコーヒーブレイクの時間に先生に気軽に質問をすることができたり、ポスターを見た方が声をかけてくださったりする環境は非常に貴重なものでした。

学会の最後には、予想もしていなかったBest Poster Prizeをいただくことができ驚きましたが、大変励みになりました。多分野の研究者に興味を持っていただいたアイデアを社会に貢献できるものへと昇華できるよう、さらに精進していきたいと思えます。



授賞式での馬場さん（中）

【国際学会参加コース生】

氏名	学会名	期間	
須沢栞 (工学系研究科建築学専攻 博士3年)	The Environmental Design Research Association (EDRA) 49 (オクラホマシティ/アメリカ)	6/7-6/10	ポスター
	*GSA 2018 Annual Scientific Meeting (ボストン/アメリカ)	11/15-11/19	ポスター
藤原綾 (医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士3年)	Nutrition Society Summer Conference 2018: Getting energy balance right (リーズ/イギリス)	7/7-7/14	ポスター
篠崎奈々 (医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士3年)	Nutrition Society Summer Conference 2018: Getting energy balance right (リーズ/イギリス)	7/7-7/14	ポスター
麦山亮太 (人分社会系研究科社会文化研究専攻 博士3年)	19th International Sociological Association World Congress of Sociology (トロント/カナダ)	7/14-7/22	ポスター
亀澤明彦 (総合文化研究科広域科学専攻 修士2年)	Human-Computer Interaction International 2018 (ラスベガス/アメリカ)	7/16-7/20	口頭発表
吉崎れいな (工学系研究科機械工学専攻 博士1年)	Human-Computer Interaction International 2018 (ラスベガス/アメリカ)	7/18-7/23	口頭発表
スタッヴォラヴット アンヤポーン (医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻 MD3年)	4th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia (大連/中国)	10/19-10/22	ポスター
今枝秀二郎 (工学系研究科建築学専攻 博士2年)	The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (平昌/韓国)	10/23-10/26	口頭発表
ロジーロイスカラندان (医学系研究科国際保健専攻 博士3年)	American Public Health Association (APHA) 2018 Annual Meeting and Expo (サンディエゴ/アメリカ)	11/9-11/14	口頭発表
ロジーロイスカラندان (医学系研究科国際保健専攻 博士3年) 角川由香 (医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士2年)	*GSA 2018 Annual Scientific Meeting (ボストン/アメリカ)	11/14-11/20	ポスター
	*The 9th Annual Association of Pacific Rim Universities (APRU) Research Conference on Population Aging (香港)	12/6-12/9	ポスター
	*GSA 2018 Annual Scientific Meeting (ボストン/アメリカ)	11/13-11/17	ポスター
駒沢行賓 (工学系研究科都市工学専攻 博士2年)	*GSA 2018 Annual Scientific Meeting (ボストン/アメリカ)	11/13-11/20	ポスター
北村智美 (医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士1年)	the 23rd Congress of the Asian Pacific Society of Respirology (台北/台湾)	11/28-12/2	ポスター
馬場絢子 (教育学研究科総合教育科学専攻 博士2年)	*The 9th Annual Association of Pacific Rim Universities (APRU) Research Conference on Population Aging (香港)	12/6-12/9	ポスター

*GSA 2018 Annual Scientific Meeting、および APRU Research Conference on Population Aging での発表に関しては、上記レポートと重複している。

■日産自動車株式会社との共同研究

運転中の車載インタフェース操作の安全性を鑑み、操作の認知負荷を簡易的に計測するための手法を開発し評価・検討を行っている。

前年度までに、脳のワーキングメモリ機能の評価テストと評価対象のインタフェース操作の二重課題を基に、それらインタフェース操作に伴って、ディストラクションに繋がる Mind-wandering がどの程度発生するかを定量的に評価する手法を提案し、複数種類のインタフェースによる比較実験を比較検討してきた。本年度は、視覚を用いない音声対話方式において、どのような認知負荷が起り得るかを議論し、計測手法の検討を行った。さらに、自動運転や新技術を背景とした認知負荷に関する新たな安全性の課題についても検討を進めている。

■日立東大ラボ ハビタットイノベーション WG4「超高齢社会」

昨年度より、高齢者の生活状況支援のためのモニタリング技術の開発を開始している。本年度は、浴室でのモニタリング技術開発、リビングなどでの新しいモニタリング手法の提案を行い、住居などへの新技術導入に関する協創の場の形成をすすめた。モニタリング手法については、プライバシーに配慮しつつも生活状況に関して高い詳細度で記録できる手法を導入する準備をすすめている。

また、日立東大ラボの研究プロジェクトの一環として、学内ロボットコンテストを実施した。ロボットコンテストは合計4名が受賞し、そのうち、3名はGLAFS生であった。

■GEX インターナショナル株式会社との共同研究

観賞魚を観察した時の高齢者の状態（脳波と唾液中ストレスホルモンの変化）を追跡し、観賞魚が高齢者へ与える影響を評価した。さらに半構造化面接を行い、高齢者の生き物の飼育に対する意欲や、観賞魚の飼育に至るまでの課題点を抽出した。本企業との共同研究はH28年度から行っており、これまでは家庭用小型水槽を用いてきた。令和元年は生活の中で簡単に手に入る容器（ボトル）を水槽代わりとし、フィルターやエアレーションの器具が不要な「ボトリウム」を用いて多世代交流を視野に入れた調査を行う予定である。

5. シンポジウム

12/4 博士課程教育リーディングプログラム「フォーラム2018」

一橋大学・一橋講堂にて、博士課程教育リーディングプログラム「フォーラム2018」が開催された。今年のフォーラムは「社会に新しい価値を実装する」（セッションA）と「リーディングプ

プログラム資産を将来に活かすために」(セッション B) の2つのテーマで構成。GLAFS からは高瀬麻以特任研究員がセッション A に、吉崎れいなさん(工学系研究科機械工学専攻 修士2年)がセッション B に参加し、他リーディングの学生や教員、企業人らと交流を図った。



セッション B のテーマ C に参加した吉崎れいなさん(左から2人目)



高瀬特任研究員(右から2人目)がメンタリングした名古屋大学「宇宙開拓リーダー養成プログラム」チームはこの日、優秀賞を受賞した

3/9 国内シンポジウム「超高齢社会において『地域』を考える」

東京大学本郷キャンパス工学部2号館大講堂で、IOG/GLAFS 国内シンポジウム「超高齢社会において『地域』を考える」を開催した。

午前の部は GLAFS 学生による共同研究の成果発表。午後からは(社)持続可能な地域社会総合研究所の藤山浩所長をお招きし、「地域を創りなおす」ための具体的な処方箋をお話しいただいた。

パネルディスカッションでは、信州大学の井上信宏教授から「田園回帰を支える生活保障」について、IOG の菅原育子特任講師から「都市部における持続可能な地域社会」について、それぞれ問題提起があった後、後藤特任講師の司会のもと、藤山浩所長と共に「持続可能な地元」はどのようにしたら創れるかを話し合った。

参加者は 125 名。大変活発な意見交換がなされたため、当初の予定より終了時間を大幅にずらして対応した。

〈プログラム〉

午前の部 (10:00 ~ 12:00)
開会挨拶 大方潤一郎 (東京大学教授/高齢社会総合研究機構機構長)
<p>GLAFS 共同研究成果報告</p> <p>本年度で5年目となる共同研究の成果報告と共に、残された課題や今後の方針について意見交換を行った。</p> <p>【各グループの発表テーマ】</p> <p>G1 「Age-Friendly Workplace の実現に向けて」: 高齢者本人、企業、高齢者就労支援の現場への調査からみる「Age-Friendly Workplace」について</p> <p>G2 「要介護期における独居高齢者の在宅療養生活の継続要因」—要介護度 100 スタイル—</p> <p>G3 ① 「弱らない・弱っても住み続けられる住環境のデザイン」—転倒・骨折高齢者を対象とした調査—</p> <p>G3 ② 「要介護になっても暮らし続けられる住宅改修マニュアルづくり」</p> <p>G4/5/6 「高齢者の QoL 向上のためのコミュニティ活動の調査とデザイン」</p> <p>G7 「在宅高齢者のための IoT 活用による自立支援」</p>

プログラム教員、プログラムオフィサーからのコメント

午後の部（13:30～16:30）

基調講演「地域を創りなおす時代」～繋がりと循環の再生へ～

講演者：藤山浩（一般社団法人 持続可能な地域社会総合研究所所長）

パネルディスカッション「地域を創りなおす時代の生き方を考える」

地域の再生へと向かうこの時代を生きる我々は、如何なるマインドセットを持って今後の生活を考えたいのか。田園回帰、生活保障や、都市部に移住してきた高齢者の生活をふまえた討論が行われた。総合的なディスカッションに限らず、アクションリサーチを行う際に気をつけたい点やジレンマにも焦点が当たり、アカデミックな視点からも勉強になったパネルディスカッションだった。

【登壇者】

藤山浩（一般社団法人 持続可能な地域社会総合研究所所長）

井上信宏（信州大学学術研究院社会科学系教授）

菅原育子（高齢社会総合研究機構特任講師）

【司会・ファシリテーター】

後藤純（高齢社会総合研究機構特任講師）



左から後藤純特任講師、藤山浩所長、井上信宏教授、菅原育子特任講師

3. 若手研究者による研究成果

1. 論文等

■ 菅原育子（特任講師）

【学術雑誌等又は商業誌における解説，総説】

1. 菅原育子. 高齢者就労：フレイル予防とまちづくりの視点から考える（特集 まちづくりとして取り組むフレイル予防）. *Geriatric Medicine*, 2019;57:79-82.

【国際会議における発表】

1. Ishioka, Y., Takayama, M., Sugawara, I. The relationship between cognitive function and well-being among the old-old: A cross-sectional data of the Keio-Kawasaki Aging Study. 2018 Annual Conference of the Korean Psychological Association, Seoul, Korea, 2018. 8. 16-18. 査読有
2. Kobayashi, E., Sugawara, I., Fukaya, T., & Liag, J. Later retirement and volunteering among older Japanese. Gerontological Society of America 2018 Annual Meeting, Boston, USA, 8. 14-18. 査読有
3. Takayama, M., Ishioka, Y., Sugawara, I. Effects of the physical and social environments on cognition: Findings from K2 study. Gerontological Society of America 2018 Annual Meeting, Boston, USA, 8. 14-18. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 江原望, 二瓶美里, 鎌田実, 菅原育子, 権藤恭之, 増井幸恵, 稲垣宏樹, 井上剛伸. 長寿者の福祉用具利用調査からみた支援機器開発の課題. 日本人間工学会第59回大会, 仙台, 2018. 6. 2-3. 査読有
2. 菅原育子. 孤独感の関連要因：時代による相違に注目して. (シンポジウム『全国高齢者パネル調査データを分析してみませんか』話題提供). 日本老年社会科学会第60回大会, 東京, 2018. 6. 9-10. 査読有
3. 高山緑, 石岡良子, 菅原育子. 後期高齢期の認知機能, コミュニティ感覚, 環境の関連性: K2study データを用いて. 日本老年社会科学会第60回大会 (抄録集 p167), 東京, 2018. 6. 9-10. 査読有
4. 小林江里香, 菅原育子, 深谷太郎. 高齢期のワーク・ライフ・バランスと主観的ウェルビーイング. 日本老年社会科学会第60回大会 (抄録集 p224), 東京, 2018. 6. 9-10. 査読有
5. 菅原育子, 今城志保. 高年齢就労希望者のパーソナリティおよび就労に関する意識. 産業・組織心理学会第34回全国大会 (抄録集 91-94), 名古屋, 2018. 9. 1-2. 査読有
6. 菅原育子, 長島洋介, 田中紀之, 吉田涼子. 地域のためにどれだけの時間を割けるか: 地域へ

の関与意図とその関連要因. 日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会, 神戸, 2018. 9. 8-9. [査読有](#)

7. 萱原育子. 現役世代の抱える「定年後」への不安と準備 (シンポジウム『日本の定年の過去・現在・未来』話題提供). 日本心理学会第 82 回大会, 仙台, 2018. 9. 25-27. [査読有](#)
8. 萱原育子, 高山緑, 石岡良子, 増井幸恵, 菅沼真樹, 小川まどか. 後期高齢者の近隣関係の変化とその関連要因: K2study における 20 ヶ月後の変化. 日本心理学会第 82 回大会, 仙台, 2018. 9. 25-27. [査読有](#)

■ 村山洋史 (特任講師)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. [Murayama H](#), Fujiwara T, Tani Y, Amemiya A, Matsuyama Y, Nagamine Y, Kondo K. Long-term impact of childhood disadvantage on late-life functional decline among older Japanese: Results from the JAGES prospective cohort study. *Journal of Gerontology: Biological Sciences & Medical Sciences*. 2018;73 (7): 973-979. [査読有](#)
2. [Murayama H](#), Sugiyama M, Inagaki H, Okamura T, Miyamae F, Ura C, Eda Hiro A, Motokawa K, Awata S. Is community social capital associated with subjective symptoms of dementia among older people? A cross-sectional study in Japan. *Geriatrics & Gerontology International* 2018;18 (11): 1537-1542. [査読有](#)
3. Amemiya A, Fujiwara T, [Murayama H](#), Tani Y, Kondo K. Adverse childhood experiences and higher-level functional limitations among older Japanese people: results from the JAGES study. *Journal of Gerontology: Biological Sciences & Medical Sciences* 2018;73 (2): 261-266. [査読有](#)
4. Nemoto Y, Nonaka K, Hasebe M, Koike T, Minami U, Murayama Y, [Murayama H](#), Matsunaga H, Fukaya T, Kobayashi E, Maruo K, Fujiwara Y. Factors that promote new or continuous participation in social group activity among Japanese community-dwelling older adults: a 2-year longitudinal study. *Geriatrics & Gerontology International* 2018;18 (8): 1259-1266. [査読有](#)
5. Itoh S, Hikichi H, [Murayama H](#), Ishimaru M, Ogata Y, Yasunaga H. Association between advanced care management and progression of care need level in long-term care recipients: a retrospective cohort study. *JMIR Aging* 2018;1 (2): e11117. [査読有](#)
6. Okamura T, Ura C, Miyamae F, Sugiyama M, Inagaki H, Eda Hiro A, [Murayama H](#), Motokawa K, Awata S. To give or to receive: Relationship between social support giving/receiving and psychometrics in the large-scale survey. *International Journal of Geriatric Psychiatry* 2018;33 (5): 798-799. [査読有](#)
7. Okamura T, Ura C, Miyamae F, Sugiyama M, Inagaki H, Eda Hiro A, [Murayama H](#), Mo-

- tokawa K, Awata S. Prevalence of depressed mood and loss of interest among community-dwelling older people: Large-scale questionnaire survey and visiting intervention. *Geriatrics & Gerontology International* 2018;18 (11): 1567–1572. [査読有](#)
8. 小林江里香, 野中久美子, 倉岡正高, 松永博子, 村山幸子, 田中元基, 根本裕太, [村山洋史](#), 渡辺修一郎, 稲葉陽二, 藤原佳典. 「地域の子育て支援行動尺度」の多世代への適用可能性と支援行動の世代別特徴. *日本公衆衛生雑誌*, 2018;65 (7): 321–333. [査読有](#)
 9. 井手一茂, 鄭丞媛, [村山洋史](#), 宮國康弘, 中村恒穂, 尾島俊之, 近藤克則. 介護予防のための地域診断指標: 文献レビューと6基準を用いた量的指標の評価. *総合リハビリテーション*, 2018;46 (12): 1205–1216. [査読有](#)
 10. 根本裕太, 倉岡正高, 野中久美子, 田中元基, 村山幸子, 松永博子, 安永正史, 小林江里香, [村山洋史](#), 渡辺修一郎, 稲葉陽二, 藤原佳典. 若年層と高年層における世代内/世代間交流と精神的健康状態との関連. *日本公衆衛生雑誌*, 2018;65 (12): 719–729. [査読有](#)
 11. Taniguchi Y, Kitamura A, Nofuji Y, Ishizaki T, Seino S, Yokoyama Y, Shinozaki T, [Murayama H](#), Mitsutake S, Amano H, Nishi M, Matsuyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S. Association of trajectories of higher-level functional capacity with mortality and medical and long-term care costs among community-dwelling older Japanese. *Journal of Gerontology: Biological Sciences & Medical Sciences* 2019;74 (2): 211–218. [査読有](#)
 12. [Murayama H](#), Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S. Age and gender differences in the association between body mass index and all-cause mortality among older Japanese. *Ethnicity & Health*. (in press) [査読有](#)
 13. [Murayama H](#), Sugiyama M, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Edahiro A, Motokawa K, Okamura T, Awata S. The differential effects of age on the association between childhood socioeconomic disadvantage and subjective symptoms of dementia among older Japanese people. *Journal of Epidemiology*. (in press) [査読有](#)
 14. [Murayama H](#), Sugiyama M, Inagaki H, Edahiro A, Okamura T, Ura C, Miyamae F, Motokawa K, Awata S. Childhood socioeconomic disadvantage as a determinant of late-life physical function in older Japanese people. *Archives of Gerontology & Geriatrics*. (in press) [査読有](#)
 15. [村山洋史](#), 小宮山恵美, 平原佐斗司, 野中久美子, 飯島勝矢, 藤原佳典. 在宅医療推進のための多職種連携研修プログラム参加者におけるソーシャルキャピタル醸成効果: 都市部での検証. *日本公衆衛生雑誌*. (in press) [査読有](#)
 16. Okamura T, Sugiyama M, Inagaki H, [Murayama H](#), Ura C, Miyamae F, Edahiro A, Motokawa K, Awata S. Anticipatory anxiety about future dementia-related care needs: Toward a dementia-friendly community. *Psychogeriatrics*. (in press) [査読有](#)
 17. Murayama Y, [Murayama H](#), Hasebe M, Yamaguchi J, Fujiwara Y. The impact of inter-

generational programs on social capital in Japan: a randomized population-based cross-sectional study. *BMC Public Health*. (in press) [査読有](#)

18. Carandang RZ, Shibamura A, Kiriya J, Asis EL, Chavez DC, Meana M, [Murayama H](#), Jimba M. Determinants of depressive symptoms in Filipino senior citizens of the community-based ENGAGE study. *Archives of Gerontology & Geriatrics*. (in press) [査読有](#)
19. Morita A, O’Caoimh R, [Murayama H](#), Molloy DW, Inoue S, Shobugawa Y, Fujiwara T. Validity of the Japanese version of the Quick Mild Cognitive Impairment screen. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. (in press) [査読有](#)
20. Taniguchi Y, Kitamura A, Kaito S, Yokoyama Y, Yokota I, Shinozaki T, Seino S, [Murayama H](#), Matsuyama Y, Ikeuchi T, Fujiwara Y, Shinkai S. Albumin and hemoglobin trajectories and incident disabling dementia in community-dwelling older Japanese. *Dementia and Geriatric Cognitive Disorders*. (in press) [査読有](#)

【学術雑誌等又は商業誌における解説，総説】

1. [村山洋史](#). 高齢期の体重管理を考える. 老年看護学, 2018;22 (2): 25-27.

【著書，編著】

1. [村山洋史](#). 「つながり」と健康格差：なぜ夫と別れても妻は変わらず健康なのか. ポプラ社, 2018.

【国際会議における発表】

1. Shobugawa Y, [Murayama H](#), Fujiwara T, Inoue S. Health status and individual social capital in Agricultural Development Project (ADP) participants in rural Japan: *From the NEIGE study*. The 10th Annual Meeting of International Society of Social Capital Research, Hvar, Croatia, 2018. 6. 13-15. [査読有](#)
2. [Murayama H](#), Shobugawa Y, Fujiwara T, Inoue S. Social appearance (*sekentei*) and cognitive decline among community-dwelling older adults in rural Japan. The 20th Congress of the International Association of Rural Health and Medicine, Tokyo, 2018. 10. 10-12. [査読有](#)
3. Shobugawa Y, [Murayama H](#), Fujiwara T, Inoue S. Difference of health status and neighborhood relationship between participants and non-participants to agricultural development project among rural older adults in Japan. The 20th Congress of the International Association of Rural Health and Medicine, Tokyo, 2018. 10. 10-12. [査読有](#)
4. Taguchi A, [Murayama H](#), Ito K, Takeda K, Tonai S. Recruiting, training, and supporting community based health promotion volunteers in Japan: Findings from a national survey. The 146th Annual Meeting & Exposition of the American Public Health Association, San Diego, CA, USA, 2018. 11. 10-14. [査読有](#)
5. Carandang RR, Asis E, Shibamura A, Kiriya J, [Murayama H](#), Jimba M. Defining the un-

- met need for government services and family assistance among community-dwelling elderly Filipinos: A qualitative study. The 2018 Annual Meeting & Exposition of the American Public Health Association, San Diego, CA, USA, 2018. 11. 10–14. [査読有](#)
6. [Murayama H](#), Sugiyama M, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Edahiro A, Okamura T, Awata S. Socioeconomic disadvantage in early life predicts poor physical performance in late life among older Japanese. The 70th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Boston, MA, USA, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
 7. [Murayama H](#), Kobayashi E, Fukaya T, Ishizaki T, Liang J, Shinkai S. National prevalence of frailty in older Japanese population: From a representative national longitudinal survey. The 70th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Boston, MA, USA, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
 8. Komazawa Y, [Murayama H](#), Harata N. The relationship among financial strain, social support and daily physical activity in older Japanese. The 70th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Boston, MA, USA, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
 9. Sumikawa Y, Baba A, Fukui C, Kimata M, [Murayama H](#), Sugawara I. Decision-making process regarding relocation to a group home for persons with dementia. The 70th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Boston, MA, USA, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
 10. Carandang RZ, Asis EL, Vardelon K, Marges M, Kiriya J, Shibamura A, [Murayama H](#), Jimba M. Building a network of senior leaders and peer counselors in an urban slum in the Philippines: An action research. The 70th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Boston, MA, USA, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
 11. Suzawa S, Yokouchi N, Baba A, Yamane K, Kim T, Kimata M, Sugawara I, [Murayama H](#). Obstacles to continue staying at home in Japan: Viewpoints of older persons, family caregivers, and care specialists. The 70th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Boston, MA, USA, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
 12. Takase M, [Murayama H](#), Hirukawa S, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Kimata M. Which aspect of dining condition is associated with depressive symptoms? A study at assisted living facility in Japan. The 70th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Boston, MA, USA, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. [村山洋史](#). 生活機能低下の軌跡パターンと社会経済状況. 日本老年社会科学会第60回大会, 東京, 2018. 6. 8–10. [査読有](#)
2. 根本祐太, 倉岡正高, 野中久美子, 田中元基, 村山幸子, 松永博子, 安永正史, 小林江里香,

- 村山洋史, 渡辺修一郎, 藤原佳典. 若年層と高年層における世代内／世代間交流と精神的健康状態との関連. 日本老年社会科学会第60回大会, 東京, 2018. 6. 8-10. 査読有
3. 青木由香, 野中久美子, 倉岡正高, 村山洋史, 藤原佳典. 地域資源情報の提供に関する地域包括支援センターの業務実態の検討: その1. 日本老年社会科学会第60回大会, 東京, 2018. 6. 8-10. 査読有
 4. 野中久美子, 青木由香, 倉岡正高, 村山洋史, 藤原佳典. 地域資源情報提供に関する地域包括支援センターの業務実態の検討: その2. 日本老年社会科学会第60回大会, 東京, 2018. 6. 8-10. 査読有
 5. 村山幸子, 小林江里香, 倉岡正高, 野中久美子, 安永正史, 田中元基, 松永博子, 村山洋史, 渡辺修一郎, 藤原佳典. 世代性の規定要因に関する探索的検討: 都市部高齢者を対象とした調査から. 日本老年社会科学会第60回大会, 東京, 2018. 6. 8-10. 査読有
 6. 清野諭, 西真理子, 横山友里, 村山洋史, 成田美紀, 谷口優, 天野秀紀, 北村明彦, 新開省二. フレイル予防のための複合プログラムが高齢者のフレイル指標に及ぼす長期的効果: 傾向スコアマッチング法による前向き研究. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 14-16. 査読有
 7. 岡村毅, 杉山美香, 宇良千秋, 稲垣宏樹, 宮前史子, 村山洋史, 枝広あや子, 本川佳子, 栗田主一. 地域在住高齢者における抑うつ気分と興味関心の喪失の分布: 大規模郵送調査と訪問調査. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 14-16. 査読有
 8. 宇良千秋, 杉山美香, 稲垣宏樹, 枝広あや子, 本川佳子, 宮前史子, 岡村毅, 村山洋史, 栗田主一. 認知症アセスメントシート (DASC-21) における自己評価と他者評価の関連性について. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 14-16. 査読有
 9. 天笠志保, 井上茂, 福島教照, 菊池宏幸, 町田征己, 村山洋史, 藤原武男, 菖蒲川由郷. 農作業の実施と高齢者の身体活動パターンとの関連. 第73回日本体力医学会大会, 福井, 2018. 9. 7-9. 査読有
 10. 村山洋史 (シンポジスト・座長). ソーシャルキャピタルと認知症関連アウトカム. 第8回日本認知症予防学会学術集会, 東京, 2018. 9. 22-24.
 11. 村山洋史 (シンポジスト). 高齢期における健康の社会的決定要因にどう挑むか: 社会疫学の立場から. 第13回日本応用老年学会大会, 東京, 2018. 10. 20-21. 査読有
 12. 村山洋史, 福田吉治. 職場のソーシャルキャピタルとバーンアウト: 地域包括支援センター職員へのパネル調査. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
 13. 岡本翔平, 小林江里香, 深谷太郎, 村山洋史, 新開省二. 男女の健康格差: Male-female health-survival paradox. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
 14. 小川尚子, 森下絵梨, 岩間純子, 松永篤志, 備前真結, 伊藤海, 村山洋史, 田口敦子. 地域課題の共有を重視した介護予防サポーター養成プログラムの効果—プロセス評価—. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有

15. 田口敦子, 松永篤志, 森下絵梨, 小川尚子, 岩間純子, 備前真結, 伊藤海, 村山洋史. 地域課題の共有を重視した介護予防サポーター養成プログラムの効果—アウトカム評価—. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
16. 藤原佳典, 高橋知也, 野中久美子, 松永博子, 長谷部雅美, 根本裕太, 村山洋史, 小池高史, 南潮, 深谷太郎, 村山陽, 小林江里香. 高齢労働者は就労理由の差異により健康への影響が異なるか—ESSENCE 研究より—. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
17. 稲垣宏樹, 杉山美香, 宇良千秋, 宮前史子, 枝広あや子, 岡村毅, 本川佳子, 村山洋史, 栗田主一. 大都市部高齢者における包括的健康評価尺度と一年後の要介護状態との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
18. 野藤悠, 新開省二, 吉田由佳, 谷垣知美, 清野諭, 村山洋史, 北村明彦. 地域におけるフレイル予防 (1) 兵庫県養父市の取り組み. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
19. 深谷太郎, 杉澤秀博, 村山洋史, 石崎達郎, 新開省二, 小林江里香. 居住地規模による死亡と要介護の発生率の比較—全国サンプルによる縦断調査 JAHEAD から—. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
20. 小林江里香, 野中久美子, 倉岡正高, 村山洋史, 村山幸子, 田中元基, 根本裕太, 松永博子, 村山陽, 渡辺修一郎, 稲葉陽二, 藤原佳典. 地域住民による子育て支援と子育て世代の居住満足度との関係. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018. 10. 24-26. 査読有
21. 村山洋史, 天笠志保, 井上茂, 藤原武男, 菖蒲川由郷. 世間体意識と高齢期の身体活動量: NEIGE study. 第29回日本疫学会学術総会, 東京, 2019. 1. 30-2. 1. 査読有
22. 天笠志保, 井上茂, 菊池宏幸, 福島教照, 町田征己, 村山洋史, 藤原武男, 菖蒲川由郷. 農作物高齢者における加速度計で評価した身体活動パターンの性差: NEIGE study. 第29回日本疫学会学術総会, 東京, 2019. 1. 30-2. 1. 査読有
23. 菖蒲川由郷, 村山洋史, 井上茂, 藤原武男. 農作業頻度と高齢者の身体機能の関連: NEIGE study. 第29回日本疫学会学術総会, 東京, 2019. 1. 30-2. 1. 査読有

■ 後藤純 (特任講師)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Sakka M, Goto J, Kita S, Sato I, Soejima T, Kamibeppu K. Associations among behavioral and psychological symptoms of dementia, care burden, and family-to-work conflict of employed family caregivers. *Geriatrics & Gerontology International*, 2019 Jan;19 (1): 51-55.

【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 後藤純. 人生100年時代の活力ある超高齢社会をつくる. 別冊「愛」, 2019; 14-23, 公益財団法人アジア福祉教育財団.
2. 後藤純. 被災地におけるコミュニティ・デザイン: 岩手県大槌町および釜石市におけるコミュ

ニティ・ケアを事例に（特集 緊急時の介護：災害弱者への支援）. 介護福祉：介護専門職情報誌, 2018;(111), 27-36, 社会福祉振興・試験センター.

3. 後藤純. 活力ある超高齢社会と高齢者にとってのコミュニティ拠点：拠点論 計画された拠点と現実. 2018；日本建築学会都市計画委員会.

【国際会議における発表】

1. Goto J. Planning for an age friendly society. Japan-ASEAN Students Conference2018, JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER, Tokyo, Japan, 2019. 2. 21

■ 木全真理（特任助教）

【学術雑誌等又は商業誌における解説，総説】

1. 木全真理, 飯島勝矢. 地域包括ケアシステムは機能するか — vol. 9 医療行政が推進する地域包括ケアシステム. 医学のあゆみ, 2019；268 (2): 149-153.

【国際会議における発表】

1. Sumikawa Y, Baba A, Fukui C, Kimata M, Murayama H, Sugawara I. Decision-making process regarding relocation to a group home for persons with dementia. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, Massachusetts, 2018. 11. 14-18. 査読有
2. Suzawa S, Yokouchi N, Baba A, Yamane K, Kim T, Kimata M, Sugawara I, Murayama H. Obstacles to Continue Staying at Home in Japan: Viewpoints of Older Persons, Family Caregivers and Care Specialists. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, Massachusetts, 2018. 11. 14-18. 査読有
3. Takase M, Murayama H, Hirukawa S, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Kimata M. Which aspect of dining style is associated with depressive mood? A study from assisted living facility in Japan. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, Massachusetts, 2018. 11. 14-18. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 木全真理. 訪問看護師が居宅外で実践する保険制度外の訪問看護の実態. 第38回日本看護科学学会学術集会, 松山, 2018. 12. 15-16. 査読有

■ 荻野亮吾（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Miura T, Yabu K, Ogino R, Hiyama A, Hirose M, Ifukube T. Collaborative Accessibility Assessments by Senior Citizens Using Smartphone Application ReAcTS (Real-world Accessibility Transaction System). Proceedings of the Internet of Accessible Things (W4A '18). ACM, New York, NY, USA, 2018；32:10 pages. 査読有

2. Fukui C, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Yokouchi N, Sumikawa Y, Horinuki F, Baba A, Suto M, Okada H, Ogino R, Park H, Okata J. Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafés. Aging Clinical and Experimental Research, 2019. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説，総説】

1. 荻野亮吾. 子どもの貧困に関する政策の動向と課題. 社会教育, 2018;863:24-30.
2. 荻野亮吾. 日本財団子どもの貧困対策チーム—子どもの貧困対策プロジェクト—. 社会教育, 2018;867:42-45.
3. 荻野亮吾. 彩の国子ども・若者支援ネットワーク—埼玉県アスポート学習支援事業—. 社会教育, 2018;868:28-32.
4. 荻野亮吾. eラーニングと多様な連携を活用した学習支援—認定NPO法人エデュケーションエーキューブ—. 社会教育, 2018;870:42-44.
5. 荻野亮吾. 地域運営組織と公民館. 日本公民館学会年報, 2018;15:93-96.
6. 荻野亮吾. 米国の高等教育機関における地域との関わりの評価—カーネギー大学分類を中心に—. 文部科学教育通信, 2019;451:32-34.
7. 荻野亮吾. 効果の高い教育実践の体系化と評価（上）—IUPUIのRISEの取り組みから—. 文部科学教育通信, 2019;452:28-29.
8. 荻野亮吾. 効果の高い教育実践の体系化と評価（下）—IUPUIの分類法に学ぶ—. 文部科学教育通信, 2019;453:30-32.
9. 荻野亮吾. 認定NPO法人カタリバが運営するアダチベースの取り組み—足立区における子どもの貧困対策としての「居場所を兼ねた学習支援」事業—. 社会教育, 2019;875:34-39.

【著書，編著】

1. 荻野亮吾. 学校支援を通じた地域のソーシャル・キャピタル再構築の過程—大分県佐伯市の「協育」関連事業を事例として—. 露口健司（編），ソーシャル・キャピタルで解く教育問題，ジダイ社，2019；46-84.
2. 荻野亮吾. 第4章 総論 子どもの貧困に関する政策の動向と課題，第4章 事例1 日本財団「子どもサポートプロジェクト」，第4章 事例2 彩の国子ども・若者支援ネットワーク，第4章 事例5 エデュケーションエーキューブ. 岩崎久美子（編），社会的セーフティネットの構築—アメリカ・フランス・イギリス・日本—，一般社団法人日本青年館「社会教育」編集部，2019；142-162, 174-178.
3. 荻野亮吾. 学校・家庭・地域の連携・協力の動向. 今西幸蔵・矢野裕俊・古川治（編），教職に関する基礎知識（第2版），八千代出版，2019；167-176.
4. 八木信一，荻野亮吾. 再エネ条例施行後におけるエネルギー自治の展開—長野県飯田市を事例として—. 諸富徹（編），入門地域付加価値創造分析—再生可能エネルギーが促す地域経済循環—，日本評論社，2019；147-174.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 荻野亮吾. まちづくりの拠点としての公民館. 第91回すまいろんシンポジウム, 東京, 2019. 3. 19.

■ 孫輔卿 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Son BK, Eto M, Oura M, Ishida Y, Taniguchi S, Ito K, Umeda-Kameyama Y, Kojima T, Akishita M. Low-intensity exercise suppresses C/EBP β /myostatin pathway through androgen receptor in muscle cells. *Gerontology*. (in press) 査読有
2. Hashizume T, Son BK, Taniguchi S, Ito K, Noda Y, Endo T, Nanao-Hamai M, Ogawa S, Akishita M. Vascular Inflammation Accelerates Cognitive Aging. *Sci Rep*. 9 (1):4023, 2019. 査読有
3. Imaeda J, Son BK, Uchiyama E, Tanaka T, Taniguchi S, Unyaporn S, Miyoshi Y, Tanaka T, Iijima K, Otsuki T. The Architectural Factors in Continuity of Living for the Elderly After Falls and Fractures. *The 12th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia*, 420-424, 2018. 査読有
4. Tanaka T, Matsumoto H, Son BK, Imaeda S, Uchiyama E, Taniguchi S, Nishino A, Miura T, Tanaka T, Otsuki T, Nishide K, Iijima K, Okata J. Environmental and physical factors predisposing middle-aged and older Japanese adults to falls and fall-related fractures in the home. *Geriatr Gerontol Int* 18:1372-1377, 2018. 査読有
5. Hashizume T, Son BK, Kojima T, Nanao-Hamai M, Asari Y, Umeda-Kameyama Y, Ogawa S, Akishita M. Sex difference in the association of androgens with aortic calcification. *Geriatr Gerontol Int*, 18:1137-1138, 2018. 査読有
6. 今枝秀二郎, 孫輔卿, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, Suthutvoravut Unyaporn, 三好友良, 西野亜希子, 田中敏明, 飯島勝矢, 田中栄, 松原全宏, 西出和彦, 大月敏雄. 在宅高齢者における転倒状況の把握と建築的な転倒予防対策—東京大学医学部附属病院へ入院した大腿骨近位部骨折患者の調査—. 日本建築学会 住宅系研究報告会論文集, 13: 65-70, 2018. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 孫輔卿, 秋下雅弘. 先端医療シリーズ 50 「循環器疾患の最新医療」 第3章 老化と循環器疾患の最先端 1 老化は治療すべき病なのか. 2018.
2. 孫輔卿. 超高齢社会のデザイン 第3巻 老化と老年病 第1部 老化の概念とメカニズム 第2章 老化のメカニズム I, 第3章 老化のメカニズム II.
3. 孫輔卿, 秋下雅弘. エストロゲンと動脈硬化症 (基礎). *The Lipid*, 特集7月号, 2018.

【国際会議における発表】

1. Hashizume T, Son BK, Kojima T, Nanao-Hamai M, Asari Y, Umeda-Kameyama Y, Ogawa

- S, Akishita M. Sex difference in the association of androgens with aortic calcification. XIX ISA world congress of society, Toronto, Canada. 2018. 6. 15-21.
2. Son BK, Ogawa S, Akishita M. Testosterone inhibits aortic aneurysm formation through suppression of inflammation. the Gerontological Society of America, Boston, USA, 2018. 11. 14-17.
 3. Son BK, Eto M, Ishida Y, Oura M, Akishita M. Low-intensity exercise suppresses myostatin pathway through androgen receptor in muscle cells. International Conference on Sarcopenia & Frailty Research, Miami, USA, 2019. 2. 20-24.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 橋詰剛, 孫輔卿, 濱井道子, 小川純人, 秋下雅弘. 加齢に伴う血管炎症の認知機能への影響—大動脈瘤マウスモデルを用いた検討—. 第50回日本動脈硬化学会, 大阪, 2018. 7. 7-8.
2. 孫輔卿, 小川純人, 秋下雅弘. テストステロンの炎症抑制作用を介した大動脈瘤形成の抑制効果. 第50回日本動脈硬化学会, 大阪, 2018. 7. 7-8.
3. 内山瑛美子, 孫輔卿, 今枝秀二郎, 田中友規, 松本博成, 森田光治良, 三好友良, スタッヴォラヴット・アンヤポーン, 田中敏明, 飯島勝矢, 松原全宏, 大方潤一郎. 大腿骨近位部骨折による入院患者への聞き取り調査内容の定量的分析に基づいた転倒に関わる環境要因の推定. 第5回日本転倒予防学会, 静岡, 2018. 10. 7.
4. 今枝秀二郎, 孫輔卿, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, 三好友良, スタッヴォラヴット・アンヤポーン, 馬場絢子, 角川由香, 松原全宏, 大月敏雄, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 入院時ベッドサイドインタビューと自宅訪問調査による 大腿骨骨折患者の転倒状況の正確な把握. 第5回日本転倒予防学会, 静岡, 2018. 10. 7.
5. 孫輔卿, 小川純人, 秋下雅弘. テストステロンは炎症抑制作用を介して大動脈瘤の形成を抑制する. 第12回日本性差医学・医療学会, 大宮, 2019. 1. 19-20.
6. 孫輔卿, 江頭正人, 大浦美弥, 秋下雅弘. 雄マウスでの低強度運動は筋内のテストステロン分泌を亢進し, 筋分解を抑制する. 第12回日本性差医学・医療学会, 大宮, 2019. 1. 19-20.
7. 孫輔卿. 高齢者における大腿骨骨折の要因を解明するための分野横断的アプローチ. 本郷 Hip Fracture symposium, 東京, 2019. 3. 5.

■ 朴孝淑 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 朴孝淑. 韓国の特殊形態勤労従事者に対する社会的保護 - 産業災害補償保険法 125 条 (特例規定) を素材に. 労働問題リサーチセンター編 『第4時産業革命と労働法の課題』, 公益財団法人労働問題リサーチセンター, 2018; pp191-207.

【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 朴孝淑. [判例評釈] 職能資格制度の下での降格に伴う賃金減額等の有効性—Chubb 損害保険

事件（東京地裁平成 29 年 5 月 31 日判決）。ジュリスト（有斐閣），2018；1521 号：pp138～141.

2. 朴孝淑. 韓国の産業災害補償保険法の解説-特殊形態勤労従事者に対する特例規定を中心に. 科研費（平成 27～29 年度）基盤研究（C）研究成果報告書『業務委託型就業者の就業実態と法的保護の在り方』, 東洋大学, 2018；pp122-134, pp138-151.

【著書, 編著】

1. 朴孝淑, 林勝政, 小西知世, 和泉澤千恵（編）. ナーシング・グラフィカ健康支援と社会保障④『看護をめぐる法と制度』. メディカ出版, 2019；pp288-300.
2. 朴孝淑, 장지연（チャン・ジヨン）他. 『사회적 위험과 격차 심화에 대응하는 중장기 정책 과제（社会的危険と格差深化に対応する中長期政策課題）』[일본의 사회적 위험（노령）에 관한 정책적 대응（日本の社会的危険（老齡）に関する政策的対応）]. 韓国經濟・人文社会研究会共同研究叢書（經濟・人文社会研究会）, 2018；pp229-268.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 朴孝淑. [判例評釈] Chubb 損害保険事件（東京地裁平成 29 年 5 月 31 日判決労判 1166 号 42 頁）. 東京大学労働法研究会, 2018. 3. 2.

■ 西野亜希子（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Tanaka T, Matsumoto H, Son BK, Imaeda S, Uchiyama E, Taniguchi S, Nishino A, Miura T, Tanaka T, Otsuki T, Nishide K, Iijima K, Okata J. Environmental and physical factors predisposing middle-aged and older Japanese adults to falls and fall-related fractures in the home. Geriatr Gerontol Int. 2018 Aug 21. doi: 10.1111/ggi.13494. [Epub ahead of print] 査読有
2. 西野亜希子, 高田遼介, 福井千絵, 金旻敏, 大月敏雄, 西出和彦. 有料老人ホーム入居プロセスに関する事例研究. 日本建築学会学術講演梗概集, pp269-270, 2018. 9.
3. 今枝秀二郎, 孫輔卿, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, Suthutvoravut Unyaporn, 三好友良, 西野亜希子, 田中敏明, 飯島勝矢, 田中栄, 松原全宏, 西出和彦, 大月敏雄. 在宅高齢者における転倒状況の把握と建築的な転倒予防対策—東京大学医学部附属病院へ入院した大腿骨近位部骨折患者の調査—. 日本建築学会 住宅系研究報告会論文集, Vol. 13, pp. 65-70, 2018. 12. 査読有

■ 藤崎（阪井）万裕（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 高橋競, 田中友規, Unyaporn Suthutvoravut, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 栄養（食・口腔機能）・運動・社会参加の包括的フレイルチェックによる高齢者の行動変容に関する質的

研究. 日本未病システム学会誌, 2018 ; 24 (2) : 84-87. [査読有](#)

2. Chie Fukui, Mahiro Fujisaki-Sueda-Sakai, Nobutada Yokouchi, Yuka Sumikawa, Fumika Horinuki, Ayako Baba, Makoto Suto, Hiroko Okada, Ryogo Ogino, Hyosook Park, Junichiro Okata. Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafés. Aging Clinical and Experimental Research, 2019. (in press) [査読有](#)
3. 吉澤裕世, 高橋競, 田中友規, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係 身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係. 日本公衆衛生雑誌, 2019. (in press) [査読有](#)

【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 藤崎万裕, 飯島勝矢. 全国で一斉に推し進めよう！フレイル予防のまちづくり. 保健師ジャーナル, 74 巻 2 号, 2018 ; pp. 92-97,

【著書, 編著】

1. 藤崎万裕, 飯島勝矢. 実地診療のための最新認知症学 IX. 認知症患者とその家族を支える社会支援体制 7. 公的介護保険の上手な利用法. 日本臨牀, 76 巻増刊号 1, 2018 ; pp. 435-441, 日本臨牀社.
2. 藤崎万裕, 飯島勝矢. 強みと弱みからみた在宅看護過程+総合的機能関連図 (編集 河野あゆみ, 編集協力 草場鉄周). 第 2 章健康障害別看護過程 3 老年症候群 14) フレイル, 2018 ; pp. 242-245, 医学書院.

【国際会議における発表】

1. Wu J, Sakurai Y, Kang SI, Yoshizaki R, Kamesawa A, Nakano K, Yoshioka D, Kaneko K, Lin CH, Funaki T, Hirose S, Ito K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J. Design Implications and Methodology based on the Potential Needs of Seniors for Home Monitoring Systems. In. Asian Conference on Design and Digital Engineering, Okinawa, 2018. 11. 1-3. [査読有](#)
2. Tanaka T, Takahashi K, Unyaporn S, Nishimoto M, Fujisaki M, Yoshizawa Y, Akishita M, Kauya Iijima. Social frailty as a predictor of 5-year disability and mortality in physically non-frail adults. The Gerontological Society of America (GSA) 2018 Annual Scientific Meeting, John B. Hynes Veterans Memorial Convention Center, Boston, USA, 2018. 11. 14-18. [査読有](#)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 田中友規, 高橋競, Unyaporn Suthutvoravut, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 西本美紗, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』はサルコペニア新規発症リスクを高める: 柏スタディー. 第 2 回日本老年薬学会学術大会, 東京, 2018. 5. 12-13. [査読有](#)
2. 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, Suthutvoravut Unyaporn, 飯島勝矢. ヘルスリテラシーの低下と 4 年後のフレイル有無との関連—柏スタディーより—. 第 60 回日本老年医学会

学術集会, 京都, 2018. 6. 14-16. 査読有

3. Unyaporn Suthutvoravut, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 西本美紗, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域在住高齢者における食事パターンとサルコペニアとの関連: 柏スタディー. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 14-16. 査読有
4. 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 高橋競, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 西本美紗, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 市民主導型フレイルチェックの簡易チェックを活用したサルコペニア有症予測—全国マルチデータベースから—. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 14-16. 査読有
5. 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 西本美紗, 飯島勝矢. フレイルチェック複数回参加者における健康関連セルフエフィカシーの向上. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 14-16. 査読有
6. 山本なつ紀, 成瀬昂, 藤崎万裕, 山本則子. 訪問看護事業所における「利用者の安全に関わる出来事」の発生実態. 日本地域看護学会第21回学術集会, 岐阜県 長良川国際会議場, 2018. 8. 11-12. 査読有
7. 藤崎万裕, 高橋競, 吉澤裕世, 田中友規, Unyaporn Suthutvoravut, 西本美紗, 飯島勝矢. 市民フレイル予防サポーターにおける主観的健康観の向上: 縦断研究. 第5回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2018. 11. 10-11. 査読有
8. 岩崎りほ, 藤崎万裕, 寺本千恵, 成瀬昂. 大学院保健師教育コースにおける農村地域での戦略型地域診断演習 (I 報: 概要). 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会, 山口, 2019. 1. 26-27. 査読有
9. 次郎丸奈美, 角川由香, 岩崎りほ, 藤崎万裕, 寺本千恵, 成瀬昂. 大学院保健師教育コースにおける農村地域での戦略的地域診断演習 (II 報: 経験). 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会, 山口, 2019. 1. 26-27. 査読有

■ 税所真也 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 税所真也 (主査), 山城一平 (研究協力者), アントニ (研究協力者), 西定春 (研究協力者). 成年後見人による住環境支援. 住総研 研究論文集・実践研究報告集, 2018; 45号 2018: 177-188. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 税所真也, 飯島勝矢. 今日の話: 医師が知っておくべき成年後見制度. Medical Practice, 2018; 35 (2): 1300-1302.

【著書, 編著】

1. 税所真也. 要介護高齢者と成年後見制度. 日本家政学会家族関係学部会 (編) 家族を読み解く 12章, 丸善出版, 2018; 142-143.

【国際会議における発表】

1. 武川正吾, 税所真也. 日本の高齢社会と産学連携のあり方. 華東師範大学経済・管理学部公共管理学院主催国際共同研究学術交流会議, 上海, 中国, 2018. 6. 22. (招待)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 税所真也. 成年後見人による支援の親密性の検討. 日本家政学会家族関係学部会第38回家族関係学セミナー, 鎌倉, 2018. 10. 14.
2. 税所真也. 成年後見の社会化と家族への影響. 家族問題研究学会2018年度第三回例会「成年後見制度と家族」, 東京, 2019. 3. 5. (招待)

■ 伊藤研一郎 (特任研究員)

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Ito K, Nishimura H, Ogi T. Motorcycle Head-Up Display: Design of Presenting Navigation Information. IEEE Consumer electronics Magazine. (Accepted 2018–11, to appear) 査読有

【著書, 編著】

1. 伊藤研一郎. 自動二輪車用ヘッドアップディスプレイを用いた情報提示タイミングの検討と評価. ユーザの感性と製品・サービスをむすぶ: 真意を聞き出すアンケート設計と開発・評価事例, サイエンス&テクノロジー出版, 2018: pp149–161.

【国際会議における発表】

1. Wu J, Sakurai Y, Kang SI, Yoshizaki R, Kamesawa A, Nakano K, Yoshioka D, Kaneko K, Lin CH, Funaki T, Hirose S, Ito K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J. Design Implications and Methodology based on the Potential Needs of Seniors for Home Monitoring Systems. In. Asian Conference on Design and Digital Engineering, Okinawa, 2018. 11. 1–3. 査読有
2. Ito K, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J, Maki A, Ando M, Fukuda N, Hiroike A, Kotani M, Asa Y, Komatsu Y. Home Automation Platform Using Interaction-Based Sensing. 2019 IEEE International Conference on Consumer Electronics, Las Vegas, USA, 2019. 1. 11–13. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 伊藤研一郎, 西村秀和, 小木哲朗. 二輪自動車の情報提示装置設計のための没入型バイクシミュレータ. 第83回CG・可視化研究会(CAVE研究会), 横浜, 2018. 6. 7.
2. 伊藤研一郎. 自動二輪車用ヘッドアップディスプレイを用いた情報提示の評価. 自動車技術会第2回二輪車の運動特性部門委員会(2018–2019年度), 東京, 2018. 7. 27.

■ 高瀬麻以 (特任研究員)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Kameda K, Suzuki K, Kuroyanagi K, Takase M, Matsuda K, Noda J. Comparison of green turtle *Chelonia mydas* sex ratios at two time-points over 20 years at a foraging ground in Yaeyama Islands, Ryukyu Archipelago, Japan. *Endangered Species Research*, 2019 ; 38: 127-134. [査読有](#)
2. Takase M, Murayama H, Hirukawa S, Sugimoto M, Ono S, Tanaka T, Kimata M. Which aspects of dining style are associated with depressive mood? A study at an assisted living facility in Japan. *Journal of Nutrition in Gerontology and Geriatrics*. (under revision)

【著書, 編著】

1. 高瀬麻以. 世界の病院食・術後食 102 コペンハーゲンの老人ホームで Nordic な思考を栄養管理に垣間見る. *ヘルスケアレストラン*, 日本医療企画, 2019:pp82-83.

【国際会議における発表】

1. Takase M, Murayama H, Hirukawa S, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Kimata M. Which aspect of dining style is associated with depressive mood? A study from assisted living facility in Japan. *GSA 2018 Annual Scientific Meeting*, Boston, Massachusetts, U.S.A. 2018. 11. 14-18. [査読有](#)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 高瀬麻以, 阿部浩子, 工藤正美, 上坂英二, 中村岳雪, 丸山道生. 回復期リハ病棟入院患者のクラスタリング解析 統計学的比較検定に基づかない, 患者特性を汲み取る分析の試み. 第10回日本静脈経腸栄養学会 首都圏支部会, 東京, 2018. 5. 11. [査読有](#)
2. 高瀬麻以, 工藤正美, 吉田真希, 阿部浩子, 石塚佳久, 上坂英二, 中村岳雪, 丸山道生. 回復期リハビリテーション病棟における, 入院時 Alb, BUN, Cr, BUN/Cr と運動機能の変化の関連性. 第6回日本静脈経腸栄養学会 関東甲信越支部学術集会, 山梨, 2018. 10. 28. [査読有](#)
3. 高瀬麻以. 栄養療法のためのファーストステップ～臨床データの捉え方を考える～. 第7回東京 Clinical Nutrition 研究会, 東京, 2018. 12. 8.
4. 高瀬麻以. 地域における多職種協働による食支援プロジェクトについて. 食支援講演会, 東京, 2019. 2. 2.
5. 若杉智恵美, 安東理恵, 高瀬麻以, 阿部浩子, 福永拙, 上坂英二. 重度心身障害児に施行された栄養管理を見直す—介護体重と血液項目からの再考—. 第34回日本静脈経腸栄養学術集会, 東京, 2019. 2. 14. [査読有](#)
6. 佐々木達也, 北英士, 井上真, 阿部浩子, 高瀬麻以, 上坂英二. 体内における水分の浸透圧調節にまつわる血漿 Na 値, BUN 値, 血糖値の相互関係の探索. 第34回日本静脈経腸栄養学術集会, 東京, 2019. 2. 14. [査読有](#)
7. 野田武, 高瀬麻以, 阿部浩子, 上坂英二. 長期経腸栄養患者における水分量および食塩量の調

- 査. 第34回日本静脈経腸栄養学会, 東京, 2019. 2. 14. [査読有](#)
8. [高瀬麻以](#), 阿部浩子, 工藤正美, 吉田真希, 石塚佳久, 中村岳雪, 上坂英二, 丸山道生. BMIと血清 Albumin を比で捉える: 回復期リハビリテーション病棟入院患者の運動機能との関連. 第34回日本静脈経腸栄養学会, 東京, 2019. 2. 15. [査読有](#)
9. 阿部浩子, 山田和嘉, 岡村和良, 小出玲子, [高瀬麻以](#), 上坂英二. 地域完熟キウイフルーツ(キウイ)で地域高齢者の栄養を支えることができるか?. 第34回日本静脈経腸栄養学会, 東京, 2019. 2. 15. [査読有](#)

2. 受賞歴

■ 村山洋史 (特任講師)

1. 「第25回日本老年医学会優秀論文賞」(Seino S, Nishi M, [Murayama H](#), Narita M, Yokoyama Y, Taniguchi Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S. Effects of a multifactorial intervention comprising resistance exercise, nutritional, and psychosocial programs on frailty and functional health in community-dwelling older adults: a randomized, controlled, crossover trial.) 2018. 6.

■ 孫輔卿 (特任助教)

1. 「第12回日本性差医学・医療学会最優秀演題賞」([孫輔卿](#). テストステロンは炎症抑制作用を介して大動脈瘤の形成を抑制する) 2018. 9.

■ 藤崎(阪井) 万裕 (特任助教)

1. 「第2回日本老年薬学会学術大会最優秀演題賞」(田中友規, 高橋競, Unyaporn Suthutvoravut, 吉澤裕世, [藤崎万裕](#), 西本美紗, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域高齢者の『多剤併用(Polypharmacy)』はサルコペニア新規発症リスクを高める: 柏スタディー) 2018. 5.
2. 「日本地域看護学会第21回学術集会 優秀ポスター賞」(山本なつ紀, 成瀬昂, [藤崎万裕](#), 山本則子. 訪問看護事業所における「利用者の安全に関わる出来事」の発生実態) 2018. 8.
3. 「第25回日本未病システム学会学術総会最優秀演題賞」(西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, [藤崎万裕](#), 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルの地域在住高齢者は食事の満足感や口腔関連 QOL が低い—柏スタディより—) 2018. 10.

■ 高瀬麻以 (特任研究員)

1. 「第10回日本静脈経腸栄養学会 首都圏支部会 優秀賞」([高瀬麻以](#), 阿部浩子, 工藤正美, 上坂英二, 中村岳雪, 丸山道生. 回復期リハ病棟入院患者のクラスタリング解析 統計学的比較検定に基づかない, 患者特性を汲み取る分析の試み) 2018. 5.

3. コース生による研究成果

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- Fujiwara A, Murakami K, Asakura K, Uechi K, Sugimoto M, Wang HC, Masayasu S, Sasaki S. Association of free sugar intake estimated using a newly-developed food composition database with lifestyles and parental characteristics among Japanese children aged 3–6 years: DONGuRI study. Proceedings of The Nutrition Society, 2018;77 (OCE4): E200. [査読有](#)
- Kogami H, An Q, Yang N, Yamakawa H, Tamura H, Yamashita A, Asama H, Shimoda S, Yamasaki H, Itkonen M, Alnajjar F, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I. Effect of physical therapy on muscle synergy structure during standing-up motion of hemiplegic patients. IEEE Robotics Automation Letter, 2018;3 (3): 2229–2236. [査読有](#)
- Zhou J, Yang Y. The Enlightenment of Japanese lifelong learning platform establishment to credit bank construction in China. Lifelong Education Research, 2018;29 (6): 50–56. [査読有](#)
- Tanaka T, Matsumoto H, Son BK, Imaeda S, Uchiyama E, Taniguchi S, Nishino A, Miura T, Tanaka T, Otsuki T, Nishide K, Iijima K, Okata J. Environmental and physical factors pre-disposing middle-aged and older Japanese adults to falls and fall-related injuries in homes. Geriatrics & Gerontology International, 2018;18 (9): 1372–1377. [査読有](#)
- Kaneko K, Kishita Y, Umeda Y. Proposal for the design of personalization procedure. International Journal of Automation Technology, 2018;12 (6): 833–841. [査読有](#)
- Ito Y, Yoshizaki R, Miyamoto N, Sugita N. Ultrafast and precision drilling of glass by selective absorption of fiber-laser pulse into femtosecond-laser-induced filament. Applied Physics Letters, 2018;113 (6): 61–101. [査読有](#)
- Tanaka T, Takahashi K, Akishita M, et al. Can bioelectrical impedance analysis using a home-use device properly estimate sarcopenia in community-dwelling older adults?. Geriatr Gerontol Int. 2018;18 (11): 1579–1580. [査読有](#)
- Shimada H, Lee S, Akishita M, Kozaki K, Iijima K, Nagai K, Ishii S, Tanaka M, Koshiba H, Tanaka T, Toba K. Effects of golf training on cognition in older adults: a randomised controlled trial. J Epidemiol Community Health, 2018;72 (10): 944–950. [査読有](#)
- Akishita M, Kozaki K, Iijima K, Tanaka T, Shibasaki K, Ogawa S, Arai H. Chapter 1

Definitions and diagnosis of sarcopenia. *Geriatr Gerontol Int.* 2018;18 (suppl_1): 7–12. [査読有](#)

- Murakami K, Okubo H, Livingstone MBE, [Fujiwara A](#), Asakura K, Uechi K, Sugimoto M, Wang HC, Masayasu S, Sasaki S. Adequacy of Usual Intake of Japanese Children Aged 3–5 Years: A Nationwide Study. *Nutrients*, 2018;10 (9): 1150. [査読有](#)
- [Fujiwara A](#), Murakami K, Asakura K, Uechi K, Sugimoto M, Wang HC, Masayasu S, Sasaki S. Estimation of starch and sugar intake in a Japanese population based on a newly developed food composition database. *Nutrients*, 2018;10 (10): 1474. [査読有](#)
- Murakami K, Livingstone MBE, [Fujiwara A](#), Sasaki S. Breakfast in Japan: Findings from the 2012 National Health and Nutrition Survey. *Nutrients*, 2018;10 (10): 1551. [査読有](#)
- [Shah R](#), Kiriya J, Shibamura A, Jimba M. Use of modern contraceptive methods and its association with QOL among Nepalese female migrants living in Japan. *PLoS ONE*, 2018; 13 (5): e0197243.
- [Fujiwara A](#), Murakami K, Asakura K, Uechi K, Sugimoto M, Wang HC, Masayasu S, Sasaki S. Association of free sugar intake estimated using a newly-developed food composition database with lifestyles and parental characteristics among Japanese children aged 3–6 years: DONGuRI study. *Journal of Epidemiology*, 2018. [査読有](#)
- [Carandang RR](#), Shibamura A, Kiriya J, Asis E, Chavez DC, Meana M, Murayama H, Jimba M. Determinants of depressive symptoms in Filipino senior citizens of the community-based ENGAGE study. *Arch Gerontol Geriatr*, 2019;82:186–191. [査読有](#)
- Hashizume T, Son BK, [Taniguchi S](#), Ito K, Noda Y, Endo T, Nanao-Hamai M, Ogawa S, Akishita M. Establishment of novel murine model showing vascular inflammation-derived cognitive dysfunction. *Scientific Reports*, 2019;9 (1): 4023. [査読有](#)
- [Shinozaki N](#), Wang HC, Yuan X, Li T, Asano K, Kobayashi S, Sasaki S. Current status of education and research on public health nutrition in Japan: comparison with South Korea, Taiwan, and mainland China. *BMC Nutrition*, 2019;5:10. [査読有](#)
- Murakami K, [Shinozaki N](#), [Fujiwara A](#), Yuan X, Hashimoto A, Fujihashi H, Wang HC, Livingstone M. B. E., Sasaki S. A systematic review of principal component analysis-derived dietary patterns in Japanese adults: are major dietary patterns reproducible within a country?. *Adv Nutr.* 2019;10 (2): 237–249. [査読有](#)
- [Yoshida K](#), An Q, Yozu A, Chiba R, Takakusaki K, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H. Visual and vestibular inputs affect muscle synergies responsible for body extension and stabilization in sit-to-stand motion. *Frontiers in Neuroscience*, 2019;12:1–12. [査読有](#)
- Watanabe T, Yagata H, Saito M, [Okada H](#), Yajima T, Tamai N, Yoshida Y, Takayama T,

- Imai H, Nozawa K, Sangai T, Yoshimura A, Hasegawa Y, Yamaguchi T, Shimozuma K, Ohashi Y. A multicenter survey of temporal changes in chemotherapy-induced hair loss in breast cancer patients. PLoS One, 2019;14 (1) (in press) [査読有](#)
- Agnes S, Yagi H, Gkarzios M, [Ogawa K](#). Art festivals and rural revitalization: Organizing the Oku-Noto triennale in Japan. Journal of Asian Rural Studies, 2019;3 (2). (in press)
 - [Yokouchi N](#), Hashimoto H. Association between deviation of fairness perceptions from group average and serious psychological distress in Japanese worksites: a cross-sectional study. International Journal of Behavioral Medicine, 2019. (in press) [査読有](#)
 - [Emami A](#), Kunii N, Mtasuo T, Shinozaki T, Kawai K, Takahashi H. Seizure detection by convolutional neural network-based analysis of scalp electroencephalography plot images. NeuroImage: Clinical, 2019. (in press) [査読有](#)
 - [Matsumoto H](#), Igarashi A, Suzuki M, Yamamoto-Mitani N. Association between neighbourhood convenience stores and independent living in older people. Australian Journal of Ageing, 2019. (in press). [査読有](#)
 - [Suthutvoravut U](#), [Tanaka T](#), Takahashi K, et al. Living with family yet eating alone is associated with frailty in community-dwelling older adults: the Kashiwa study. J Frailty Aging, 2019. (in press) [査読有](#)
 - [Fukui C](#), Fujisaki-Sueda-Sakai M, [Yokouchi N](#), [Sumikawa Y](#), [Horinuki F](#), [Baba A](#), [Suto M](#), [Okada H](#), Ogino R, Park H, Okata J. Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafés. Aging Clinical and Experimental Research, 2019. (in press) [査読有](#)
 - [Shinozaki N](#), Murakami K, Masayasu S, Sasaki S. Development and simulated validation of a dish composition database for estimating food group and nutrient intake in Japan. Public Health Nutr. 2019. (in press) [査読有](#)
 - [松田弥花](#). スウェーデンにおけるソスペッド (Social Pedagogue) 養成課程に関する考察: 高等教育機関のカリキュラム検討を通して. 日本の社会教育, 2018;62:151-164. [査読有](#)
 - [坂井愛理](#). 訪問マッサージにおけるままたらなさの訴え: 患者によって自己開始される問題の訴えを例に. 現代社会学理論研究, 2018;13:1-14. [査読有](#)
 - [鈴木由真](#). 介護におけるケアの多様化に関する一考察: 教育カリキュラム・テキストの内容分析から. 東京大学大学院教育学研究科付属学校教育高度化センター 若手研究者育成プロジェクトワーキングペーパー, 2018;1-14.
 - [鈴木由真](#). 労働法の知識と自己責任観との関連についての計量分析: X区アンケート調査から. 東京大学教育学部総合教育科学科比較教育社会学コース 教育社会学調査実習報告書, 2018; 191-202.

- ・ 鈴木由真, 介護福祉士の職業教育訓練による職務認識の差異:「尊厳と自立」概念に着目して, 福祉社会学研究, 2018;15: 265-286. 査読有
- ・ 須沢栞, 新井信幸, 岩佐明彦, 黒野弘靖, 大月敏雄, 井本佐保里. 仮設住宅コミュニティを基盤とした復興公営住宅への近隣移転の有効性: 環境移行の視点からの検証. 日本建築学会計画系論文集, 2018;83 (750): 1391-1401. 査読有
- ・ 千野優斗, 須沢栞, 井本佐保里, 大月敏雄. 福島第一原子力発電所事故後の小中学校の再編プロセスに関する研究: 福島県9市町村を対象として. 日本建築学会計画系論文集, 2018;83 (749):1205-1215. 査読有
- ・ 今枝秀二郎, 孫輔卿, 大月敏雄, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, Suthutvoravut Unyaporn, 三好友良, 西野亜希子, 田中敏明, 飯島勝矢, 田中栄, 松原全宏, 西出和彦. 在宅高齢者における転倒状況の把握と建築的な転倒予防対策: 東京大学医学部附属病院へ入院した大腿骨近位部骨折患者の調査. 日本建築学会 住宅系研究報告会論文集, 2018;13:65-70. 査読有
- ・ 金晃敏, 大月敏雄. 移動を伴う介護サービスの利用実態からみる利用者属性と時間距離の考察: 福岡県大牟田市の介護給付明細データの分析. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2018;9:203-204.
- ・ 西野亜希子, 高田遼介, 福井千絵, 金晃敏, 大月敏雄, 西出和彦. 有料老人ホーム入居プロセスに関する事例研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2018;9:206-207.
- ・ 今枝秀二郎, 大月敏雄. 入院時インタビューと自宅訪問調査による高齢者の転倒実態の把握: 大腿骨骨折により東大病院へ入院した患者に対する調査より. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2018;9:1259-1260.
- ・ 北村智美, 上羽瑠美, 上柳葉摘, 荻野亜希子, 岡田美紀, 鈴木樹美, 森浩美. 嚥下調査票導入による看護師の摂食嚥下評価の変化. 日摂食嚥下リハ会誌, 2018;22 (3): 273-277. 査読有
- ・ 山口香苗, 林忠賢. 台湾の生涯学習: この一年. 東アジア社会教育研究, 2018;23:130-144.
- ・ 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 栄養(食・口腔機能)・運動・社会参加の包括的フレイルチェックによる高齢者の行動変容に関する質的研究. 日本未病システム学会誌, 2018;24 (2): 84-87. 査読有
- ・ 小川景司, 八木洋憲. 環境支払制度による環境保全型農業の普及条件: 滋賀県甲賀地域の水稲作における経営対応の実態分析. 農業経営研究, 2018;56 (3): 44-49. 査読有
- ・ 五十嵐歩, 松本博成, 鈴木美穂, 濱田貴之, 青木伸吾, 油山敬子, 村田聡, 鈴木守, 安井英人, 山本則子. 訪問介護サービスを利用する高齢者のコンビニエンスストア利用の実態: コンビニエンスストアが生活支援の役割を果たしている事例に関する質問紙調査. 老年社会科学, 2018;40 (3): 283-291. 査読有
- ・ 石井絢子, 五十嵐歩, 武村雪絵, 鈴木美穂, 山本則子. 脳神経外科病棟に勤務する看護補助者の就業状況と患者の有害事象/看護師の時間外勤務時間数との関連: 全国横断調査. 看護研究集録, 2018;25:23-33. 査読有

- ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 事業多角化戦略に関連する経営資源および家族経営の社会情緒的資産—イングランド都市近郊農家のアンケート調査結果を用いた実証分析—. 農業経営研究, 2018;56 (3): 62-67. 査読有
- ・ 松田弥花. 1900~1930年代のスウェーデンにおける Social Pedagogy 論議:「教師マガジン」と「子どもと若者—北欧 SP 雑誌—」を中心に. 高知大学教育学部研究報告, 2018;79 (in press)
- ・ 須沢栞, 新井信幸, 岩佐明彦, 黒野弘靖, 大月敏雄, 井本佐保里. 仮設住宅コミュニティを基盤とした近隣の復興公営住宅への環境移行. 2018年度日本建築学会大会(東北)建築計画部門研究協議会資料 計画対象としてのコミュニティを問う, 2018.
- ・ 井本佐保里, 須沢栞, 大月敏雄. 福島第一原発事故被災自治体の復興状況データ. 2018年度日本建築学会大会(東北)建築計画部門研究協議会資料 計画対象としてのコミュニティを問う, 2018.
- ・ 馬場絢子. 家族介護における介護者-被介護者関係に関する研究の動向. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 2019;58. (in press).
- ・ 稲吉玲美, 勝又結菜, 馬場絢子, 本田由美, 高橋美保. 臨床心理実践者に対するマインドフルネス実践の意義:ワークショップの体験プロセスに着目して. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2019;42. (in press)
- ・ 中山莉子, 勝又結菜, 亀田優衣, 北中眞貴, 江浦瑛子, 高橋美保, 島津明人. ワーキングペアレンツの怒りに関する探索的検討:ワークライフバランスにまつわる怒りとその影響. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2019;42. (in press)
- ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 多角化戦略と経営管理能力が農業経営の効率性に与える相乗効果—イングランド都市近郊の大規模農業経営を対象とした計量分析—. 農業経済研究, 2019;90 (4): 385-390. 査読有
- ・ 吉田真悟, 八木洋憲. 都市農業経営の多角化戦略における単位事業の特定方法—事業間での経営資源の共有と機能の相互補完の観点から—. 農村計画学会誌, 2019;37 (4): 369-375. 査読有
- ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 都市近郊農業における事業多角化の決定要因 - 関東地域の市区町村レベルデータを用いた空間計量経済分析-. 地域学研究, 2019. (in press) 査読有
- ・ 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 他. 地域在住高齢者における身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係. 日本公衆衛生雑誌, 2019. (in press) 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

- ・ 鈴木由真. 論文 Today (文献紹介): ポスト工業社会における出産の理想と意思, ジェンダー不平等:比較定性分析から. 日本労働研究雑誌, 2018;698:93-94.
- ・ 丹間康仁, 向井健, 肖蘭, 松田弥花. 公民館研究の動向. 日本公民館学会年報, 2018;15:133-138.
- ・ 田中友規. 第1回 エビデンスから地域で根づく活動へ. Geriatric Medicine, 2018;56 (7):

687-690.

- ・ 田中友規, 西本美紗, 飯島勝矢. 高齢者における口腔機能と重要性: フレイルとの関連. *Geriatric Medicine*, 2018;56 (8): 715-718.
- ・ 田中友規, 飯島勝矢. 地域で取り組むフレイル予防. *診断と治療の ABC 最新医学社*, 2018; 190-196.
- ・ 田中友規, 飯島勝矢. 指輪っかテスト: だれでもどこでも簡単チェック法. フレイルとロコモの基本戦略. 先端医学社, 2018;45-46.
- ・ 田中友規, 飯島勝矢. オーラルフレイルの位置づけと歯科医療②: フレイルとサルコペニアに対する効果的な介入とは?. *日本歯科評論*, 2018;78 (2).
- ・ 田中友規. プロからプロへ: コミュニティで実践するフレイル予防のポイントは? 自治体, 産業, 当事者の連携による日常生活に根付いた予防をめざす. *日本医事新報*, 2018;4849:54.
- ・ 田中友規. 超高齢社会における社会的フレイル対策の意義. *臨床栄養*, 2018;132 (4): 378-379
- ・ 田中友規, 高橋競, 飯島勝矢. 健康長寿社会への新しい取り組み: フレイル予防を通じた健康長寿のまちづくり. *予防医*, 2019;60:15-19.
- ・ 田中友規. オーラルフレイルへのアプローチを標準化する. *Therapeutic Research*, 2019; 40 (1): 24-26.
- ・ 鈴木由真. フェミニズムとマルクス. *雑誌 POSSE*, 2019;41: 113-115.
- ・ 伊藤佑介, 吉崎れいな, 杉田直彦. 注目技術: レーザによるガラスの超高速微細精密加工. *機械と工具: 生産加工技術を支える*, 2019. 9. 2:50-55.
- ・ スタッヴォラヴット・アンヤポーン, 飯島勝矢. 高齢者における薬物使用の注意点. *診断と治療*, 2019;107 (2): 188-193.

【著書, 編著】

- ・ 角川由香. 病院からはじまる在宅看取りケア. 福井小紀子 (編), *メヂカルフレンド社*, 2018; pp67-73.
- ・ 石井絢子, 磯部環, 岩田恵里子, 五十嵐歩, 山本則子. Fresno 地域病院における麻酔看護師の役割について 前編. *月刊ナーシング*, 学研メディカル秀潤社, 2018;pp62-65.
- ・ 磯部環, 石井絢子, 山本則子. UCLA 大学病院における看護管理 後編. *月刊ナーシング*, 学研メディカル秀潤社, 2018;pp66-69.
- ・ 田中友規, 飯島勝矢. 指輪っかテスト—だれでもどこでも簡単チェック法—. フレイルとロコモの基本戦略 (葛谷雅文, 田中栄, 楽木宏美, 編). 先端医学社, 2018;45-46.
- ・ 岡田宏子. 看護の現場ですぐ役立つ 婦人科ケアのキホン (ナースのためのスキルアップノート). 秀和システム, 2018.
- ・ サルコペニア診療実践ガイド作成委員会 (田中友規, 含). *サルコペニア診療実践ガイド*. 日本サルコペニア・フレイル学会・国立長寿医療研究センター, 2019. 査読有

- ・ 田中友規. フレイルの転帰. フレイルのみかた (荒井秀典 編著), 中外医学社, 2018.
- ・ 松田弥花. スウェーデンにおける Social Pedagogue による伴走的支援: 依存症成人支援事業を対象に. 松田武雄 (編) 社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ: 日本・アジア・欧米の社会教育職員と地域リーダー, 大学教育出版, 2019. (in press)

【国際会議における発表】

- ・ Kaneko K, Kishita Y, Umeda Y. Toward developing a design method of personalization: proposal of a personalization procedure. 25th CIRP Life Cycle Engineering Conference, Copenhagen, Denmark, 2018. 4. 30-5. 2. 査読有
- ・ Kogami H, An Q, Yang N, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H, Shimoda S, Yamasaki H, Itkonen M, Alnajjar F, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I. Effect of physical therapy on muscle synergy structure during standing-up motion of hemiplegic patients. Proceedings of the 2018 IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA2018), Brisbane, Australia, 2018. 5 (RA-L Option). 査読有
- ・ Fredriksson U, Gougoulakis P, Kitamura Y, Kusanagi K, Matsuda Y. Education for sustainable development: a comparative study of school curricula and education policy in Japan and Sweden. Comparative Education Society in Europe (CESE28), Cyprus, 2018. 5. 29-6. 1.
- ・ Gougoulakis P, Fredriksson U, Kitamura Y, Kusanagi K, Matsuda Y. Education for sustainable development: a comparative study of schools in Japan and Sweden. Comparative Education Society in Europe (CESE28), Cyprus, 2018. 5. 29-6. 1.
- ・ Suzawa S, Arai N, Iwasa A, Kurono H, Otsuki T. Study on belongings brought into disaster public housing after living in temporary housing. EDRA49 Annual Conference in the Oklahoma City, Oklahoma City, US, 2018. 6. 6-9. 査読有
- ・ Suzuki Y, Osawa S. Sexual violence in Japan: cultural contexts and institutional perspectives. International Conference: Perspectives and Discourses on Sexual Harassment in International Higher Education Contexts at Free University of Berlin, Berlin, Germany, 2018. 6. 13.
- ・ Shinozaki N, Murakami K, Masayasu S, Sasaki S. Development and validation of a dish composition database for estimating food group and nutrient intake in Japan. Nutrition Society Summer Conference 2018, Leeds, UK, 2018. 7. 10-12. 査読有
- ・ Fujiwara A, Murakami K, Asakura K, Uechi K, Sugimoto M, Wang HC, Masayasu S, Sasaki S. Association of free sugar intake estimated using a newly-developed food composition database with lifestyles and parental characteristics among Japanese children aged 3-6 years: DONGuRI study. Nutrition Society Summer Conference 2018: Getting

energy balance right, Leeds, UK, 2018. 7. 10–12. [査読有](#)

- [Funaki T](#), Ito T, Murakami T. The role of CADMI in enhancement of malignant features of small cell lung cancer. The 6th JCA-AACR Special Joint Conference, Kyoto, Japan, 2018. 7. 11–13.
- [Mugiyama, R](#). How Does Job Turnover Affect Subsequent Employment Instability? An Analysis of Inequality among Job Leavers in Japan. 19th International Sociological Association World Congress of Sociology, Metro Toronto Convention Center, Canada, 2018. 7. 15–21. [査読有](#)
- [Kamesawa A](#), [Yoshizaki R](#), [Hirose S](#), [Shinozaki N](#), [Komatsu R](#), [Kitamura S](#), [Fu O](#), [Yang N](#), [Ishii A](#), [Sumikawa Y](#), [Okatani T](#), [Kaneko K](#), [Nakagawa Y](#), [Goto T](#), Miura T, Mori T, Ifukube T, Okata J. Acceptance and practical use of assistive technologies for frail seniors and caregivers: interview surveys on nursing homes. HCI International 2018 20th International Conference on Human-Computer Interaction, Las Vegas, US, 2018. 7. 19.
- [Eri S](#). Noticing as an account-fishing device in medical massaging sessions. 5th International Conference of Conversation Analysis, Loughborough, UK, 2018. 7. [査読有](#)
- [Tanaka T](#), Akishita M, [Suthutvoravut U](#), Iijima K. Polypharmacy as a predictor of sarcopenia, disability, and mortality among community-dwelling older adults. 4th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Dalian, China, 2018. 9. 19–20. [査読有](#)
- Nishimoto M, [Tanaka T](#), Hirano H, Kikutani K, Watanabe Y, Ohara Y, Furuya H, Iijima K. Severe periodontitis increases the risk of ORAL FRAILITY: From the longitudinal Kashiwa cohort study. 4th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Dalian, China, 2018. 9. 19–20. [査読有](#)
- [Harazono Y](#). Toward detecting structural variations in human genome using graph structures. IIBMP2018, Tsuruoka Japan, 2018. 9. 19–21.
- [Suzuki Y](#). Actual condition of sexual harassment from users of elderly care to staffs. World Social Science Forum of International Social Science Council (ISSC), Hakata, Japan, 2018. 9. 27. [査読有](#)
- [Matsuda Y](#). Lifelong learning system in Sweden and Japan (Poster presentation). MIRAI Workshop: Active and Healthy Ageing in Japan and Sweden - Individual, Group, and Population Perspectives, Tokyo, Japan, 2018. 10. 10–12.
- [Carandang RR](#), Shibanuma A, Kiriya J, Asis E, Chavez DC, Meana M, Murayama H, Jimba M. Subjective psychological well-being and depression among community-dwelling senior citizens in the Philippines. 2018 International Alliance of Research Universities (IARU) Ageing, Longevity and Health Scientific and Graduate Student Conference, Singapore, 2018. 10. 17–19.

- Suthutvoravut U, Tanaka T, Takahashi K, Akishita M, Iijima K. Effect of dietary patterns on sarcopenia, muscle mass and muscle strength in older adults: Kashiwa study. 4th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Dalian China, 2018. 10. 20–21. [査読有](#)
- Imaeda S, Son B-K, Uchiyama E, Tanaka T, Taniguchi S, Unyaporn S, Miyoshi Y, Tanaka T, Iijima K, Otsuki T. Combined interviews of bedside and home-visit clarify factors related with continuity of living for the elderly who experienced falls and femoral fractures. The 12th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Pyeongchang, Korea, 2018. 10. 23–26. [査読有](#)
- Funaki T, Ito T, Murakami T. The role of CADMI in enhancement of malignant features of small cell lung cancer. The 25th East Asia Joint symposium on biomedical research, Chongqing, China, 2018. 10. 24–27.
- Makino A, Yang Y. Japan-china education research exchange from an international perspective. The Academic Seminar on the 40th Anniversary of the Conclusion of the China-Japan Treaty of Peace and Friendship-Sino-Japanese educational research exchange and talent cultivation in the new era, Shanghai, China, 2018. 10. 26–27.
- Tanaka T. Longitudinal impact of “Social Frailty” on healthy life expectancy and community-based approach for frailty prevention. 2nd Stockholm-Tokyo Workshop on Sustainable Development: multidisciplinary collaboration for sustainable development, Tokyo, Japan, 2018. 10. 29. [査読有](#)
- Matsuda Y. Lifelong learning system in Sweden and Japan. 2nd Stockholm-Tokyo Workshop on Sustainable Development: multidisciplinary collaboration for sustainable development, Tokyo, Japan, 2018. 10. 29–30.
- Terazawa S. Work-life balance in Japan: from the perspective of gender and life-course. 2nd Stockholm-Tokyo Workshop on Sustainable Development: multidisciplinary collaboration for sustainable development. Tokyo, Japan, 2018. 10. 29–30.
- Taeun Kim, Kazuho Maeda. Working towards an age-friendly Workplace: from interviews with the elderly and their supervisors. Internatrional Joint Seminar, Kobe, Japan, 2018. 10. 31.
- Wu J, Sakurai Y, Kang S, Yoshizaki R, Kamesawa A, Nakano K, Yoshioka D, Kaneko K, Lin C, Funaki T, Hirose S, Ito K, Fujisaki M, Sugawara I, M, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T and Okata J. Design implications and methodology vased on the potential needs of seniors for home monitoring systems. 2018 Asian Conference on Design and Digital Engineering, Okinawa, Japan, 2018. 11. 1–3. [査読有](#)
- Komazawa Y, Murayama H, and Harata N. The Relationship among financial strain, social supports and physical activity. GSA 2018 Annual Scientific Meeting, Boston, US,

2018. 11. 1–14.

- Huang D, Wu J. Technology of computer-aided diagnosis of early lung cancer CT images. The 15th IEEE Transdisciplinary-Oriented Workshop for Emerging Researchers, Tokyo, Japan, 2018. 11. 3.
- Taniguchi S, Ogura M, Tanabe K, Yamanaka D, Ito K. Spontaneously hypertensive rat exhibits increased synaptic plasticity. The 48th Annual Meeting of Society for Neuroscience, San Diego, US, 2018. 11. 3–7. [査読有](#)
- Yasuda K., Ogura M., Taniguchi S., Nakashima A., Suzuki K., Ito K. Paramylon improves age-dependent impairment of spatial memory of the senescence-accelerated mouse prone 8. The 48th Annual Meeting of Society for Neuroscience, San Diego, US, 2018. 11. 3–7. [査読有](#)
- Fu O, Iwai Y, Misaka T, Minokoshi Y, Nakajima K. Hypothalamic neuronal circuits regulating hunger induced taste modification. The 48th Annual Meeting of Society for Neuroscience, San Diego, US, 2018. 11. 3–7. [査読有](#)
- Zhang T, Uchiyama E, Nakamura Y. Dense RGB-D SLAM for humanoid robots in the dynamic human environments. IEEE-RAS 18th International Conference on Humanoid Robots, Beijing, China, 2018. 11. 6–9. [査読有](#)
- Carandang RR, Asis E, Shibamura A, Kiriya J, Murayama H, Jimba M. Defining the unmet need for government services and family assistance among community-dwelling elderly Filipinos: a qualitative study. The American Public Health Association 2018 Annual Meeting & Expo, San Diego, US, 2018. 11. 10–14.
- Carandang RR, Asis E, Vardeleon KR, Marges MA, Kiriya J, Shibamura A, Murayama H, Jimba M. Building a network of senior leaders and peer counselors in an urban slum in the Philippines: an action research. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, US, 2018. 11. 14–18.
- Tanaka T, Akishita M, Suthutvoravut U, Iijima K. Polypharmacy as a predictor of sarcopenia, disability, and mortality among community-dwelling older adults. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, US, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
- Tanaka T, Takahashi K, Suthutvoravut U, Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K. Social frailty as a predictor of 5-year disability and mortality in physically non-frail adults. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, US, 2018. 11. 14–18. [査読有](#)
- Nishimoto M, Tanaka T, Hirano H, Kikutani K, Watanabe Y, Ohara Y, Furuya H, Iijima K. Health literacy and oral health behaviors decrease the risk of ORAL FRAILITY in

- Japanese elderly. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, US 2018. 11. 14-18. [査読有](#)
- [Baba A](#). Understanding the process of caregiving for mothers by daughters: a view of the parent-child relationship. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, US, 2018. 11. 14-18. [査読有](#)
 - [Suzawa S](#), [Yokouchi N](#), [Baba A](#), [Yamane K](#), [Kim T](#), [Kimata M](#), [Sugawara I](#), [Murayama H](#). Obstacles to continue staying at home in Japan: viewpoints of older persons, family caregivers and care specialists. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, US, 2018. 11. 14-18. [査読有](#)
 - [Sumikawa Y](#), [Baba A](#), [Fukui C](#), [Kimata M](#), [Murayama H](#), [Sugawara I](#). Decision-making process regarding relocation to a group home for persons with dementia. The Gerontological Society of America's 70th Annual Scientific Meeting, Boston, US, 2018. 11. 14-18. [査読有](#)
 - [Eri S](#). Acknowledging patients' problems in routine care: accounting practices from home visit medical massaging sessions. 2018 SNU-UT Joint Sociological Forum: Critical Reflections on Contemporary Societies and Sociology, Seoul, South Korea, 2018. 11.
 - [Kitamura S](#), [Igarashi A](#), [Yamauchi Y](#), [Senju H](#), [Yanai H](#), [Horie T](#), [Yamamoto-Mitani N](#). Association between self-management behaviors of patients with chronic obstructive pulmonary disease and the types of healthcare services: cross-sectional questionnaire study. The 23rd Congress of the Asian Pacific Society of Respiriology, Taipei, Taiwan, 2018. 11. 29-12. 2. [査読有](#)
 - [Baba A](#). Care burden and other attitudes in mother-daughter residential caregiving relationship. The 9th Annual Association of Pacific Rim Universities Research Conference on Population Aging, Hong Kong, China, 2018. 12. 7-8. [査読有](#)
 - [Carandang RR](#), [Shibanuma A](#), [Kiriya J](#), [Asis E](#), [Chavez DC](#), [Meana M](#), [Murayama H](#), [Jimba M](#). Predictors of subjective psychological well-being among Filipino senior citizens: findings from the community-based ENGAGE study. The 9th Annual Association of Pacific Rim Universities Research Conference on Population Aging, Hong Kong, 2018. 12. 7-8.
 - [Masuda K](#). Formation and utilization of public space in Mexico City: case of temporal market "Tianguis". The 14th Asian and African City Planning (AACP2018), Tokyo, Japan, 2018. 12. 8.
 - [Wu J](#), [Shino M](#). Development of transfer assist equipment by lower back burden reduction method of caregiver. Robotics and Biomimetics (ROBIO), 2018 IEEE International Conference, Kuala Lumpur, Malaysia, 2018. 12. 12-15. [査読有](#)

- Yang N, An Q, Yamakawa H, Tamura Y, Takahashi K, Kinomoto M, Yamasaki H, Itkonen M, Shibata-Alnajjar F, Shimoda S, Hattori N, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Clarification of altered muscle synergies during sit-to-stand motion in stroke patients. Proceedings of the 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmboSS2018), Osaka, Japan, 2018. 12. [査読有](#)
- An Q, Kogami H, Yang N, Yamakawa H, Tamura Y, Yamasaki H, Itkonen M, Shibata-Alnajjar F, Shimoda S, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Rehabilitation intervention of physical therapists improves muscle synergy during standing-up motion of stroke patients. Proceedings of the 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmboSS2018), Osaka, Japan, 2018. 12. [査読有](#)
- Kogami H, An Q, Yang N, Yamakawa H, Tamura Y, Yamasaki H, Itkonen M, Shibata-Alnajjar F, Shimoda S, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Effect of physical therapy on joint angle of hemiplegic patients during standing-up motion. Proceedings of the 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmboSS2018), Osaka, Japan, 2018. 12. [査読有](#)
- Iijima K, Tanaka T, Toba K, Kozaki K, Akishita M. Cognitive frailty and adverse health outcomes in community-dwelling elderly adults: comparison with physical frail individuals without cognitive impairment. The Alzheimer's Association International Conference, Chicago, US, 2018. [査読有](#)
- Kugai H, Igarashi A, Takaoka M, Suzuki M, Matsumoto H, Aoki S, Miyahara M, Yamamoto-Mitani N. Characteristics of convenience store managers interested in supporting community-dwelling older adults. The 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EA-FONS), Furama Riverfront, Singapore, 2019. 1. 17-18. [査読有](#)
- Okatani T, Shimoyama I. Evaluation of ground slipperiness during collision using MEMS local slip sensor. The 32th IEEE International Conference on Micro Electro Mechanical Systems (MEMS2019), Seoul, Korea, 2019. 1. 27-31. [査読有](#)
- Suzuki Y. The situation of sexual violence at the University of Tokyo. Workshop: Stop Sexual Violence on Campus! by Educational Project S of Integrated Human Science Program for Cultural Diversity (IHS), Tokyo, Japan, 2019. 1. 29
- Moriizumi H, Nakamura T, Youngmin C, Suzuki, T Takekawa M. Mathematical analysis of the spatio-temporal regulation of SAPK pathway. Core to Core meeting, Bordeaux, France, 2019. 3. 21-22,
- Mugiyama R. Long-term Effects of Job Change on Wage Growth in Japan: Moderating Role of Employment Status and Gender. Research Committee of Social Stratification and

Mobility (RC 28) of the International Sociological Association Spring Meeting, Goethe-Universität Frankfurt am Main, Germany, 2019. 3. 21-23. [査読有](#)

- [Mugiyama R.](#) and Toyonaga K. Association between Educational Attainment and Access to Service Class over Career in Japan: Decomposing into Professional and Managerial Jobs. Research Committee of Social Stratification and Mobility (RC 28) of the International Sociological Association Spring Meeting, Goethe-Universität Frankfurt am Main, Germany, 2019. 3. 21-23. [査読有](#)
- [Akizuki Y.](#), Murayama A, Manabe R. “Temporary places” in communities formed by mobile retailers: a case of COOP associations in Japan. the 2nd IASUR International Conference, Xi’an, China, 2019. 3. 29-31.
- [Funaki T.](#), Ito T, Murakami T. Overexpression of CADM1 enhances malignant features of small cell lung cancer. AACR annual meeting 2019, Georgia World Congress Center, Atlanta, Georgia, US, 2019. 3. 29-4 3. [査読有](#)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- [篠崎奈々](#), [王菡婕](#), [苑曉藝](#), [李天鈺](#), [浅野加奈](#), [児林聡美](#), [佐々木敏](#). 日韓台中における公衆栄養学教育・研究の現状と位置づけに関する文献研究. 第72回日本栄養・食糧学会, 岡山, 2016. 5. 11-13. [査読有](#)
- [田中友規](#), [秋下雅弘](#), [Suthutvoravut Unyaporn](#), [飯島勝矢](#). 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』はサルコペニア新規発症リスクを高める: 柏スタディー. 第2回日本老年薬学会学術集会, 東京, 2018. 5. 12-13. [査読有](#)
- [田中友規](#), [秋下雅弘](#), [平野浩彦](#), [菊谷武](#), [渡邊裕](#), [Suthutvoravut Unyaporn](#), [飯島勝矢](#). 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』はオーラルフレイル新規発症リスクを高める: 柏スタディー. 第2回日本老年薬学会学術集会, 東京, 2018. 5. 12-13.
- [Suthutvoravut Unyaporn](#), [田中友規](#), [高橋競](#), [秋下雅弘](#), [飯島勝矢](#). 地域在住高齢者における多剤併用とロコモティブシンドロームとの関連: 柏スタディー. 第2回日本老年薬学会学術集会, 東京, 2018. 5. 12-13.
- [伊藤佑介](#), [篠本凜](#), [長藤圭介](#), [吉崎れいな](#), [岩田大二郎](#), [長澤郁夫](#), [杉田直彦](#). ガラスのフェムト秒レーザ穴あけ加工におけるダメージ形成メカニズム. 第89回レーザ加工学会講演, 大阪, 2018. 5. 23-24.
- [久貝波留菜](#), [五十嵐歩](#), [高岡茉奈美](#), [鈴木美穂](#), [松本博成](#), [村田聡](#), [柳瀬奈緒美](#), [青木伸吾](#), [宮原正量](#), [山本則子](#). コンビニエンスストアにおける認知症高齢者への支援を推進するプログラムの効果: 都市部自治体における産官学連携プロジェクト. 第20回認知症ケア学会大会, 京都, 2019. 5. 25-26. [査読有](#)
- [金志勲](#). 再生産レジームにおける政策方向の再編. 第136回社会政策学会, 埼玉, 2018. 5. 26. [査読有](#)

- 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 多角化戦略と経営管理能力が農業経営の効率性に与える相乗効果—イングランド都市近郊農業経営を対象とした計量分析—. 2018年度日本農業経済学会大会, 北海道, 2018. 5.
- 坂井愛理. 専門家-患者間における知識の非対称性問題: 権限・責任の配分に注目して. 日本社会史学会関東研究例会, 東京, 2018. 5.
- 内山瑛美子, 味野俊裕, 堀川智行, 小原大輝, 田中友規, 中村仁彦, 高野渉, 飯島勝矢. 高齢者の脳活動計測による転倒に繋がる認知機能低下指標の探索. 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 2018, 福岡, 2018. 6. 2-5.
- 水木佑哉, 岡谷泰佑, 高畑智之, 下山勲. 指末節側面部の変形計測による指腹部の接触力の計測. ロボティクス・メカトロニクス講演会 2018, 福岡, 2018. 6. 2-5.
- Kang S. I., Noguchi H., Araki D., Sanada H., Mori T. Posture analytics by pressure sensor mattress using convolutional neural network. ロボティクス・メカトロニクス 講演会 2018, 2018. 6. 2-5. 査読有
- 森泉寿土, 中村貴紀, 武川睦寛. 数理解析を活用したSAPK シグナル時空間制御機構の解明. 第18回 東京大学生命科学シンポジウム, 東京, 2018. 6. 9.
- 駒沢行賓, 原田昇, 高見淳史, トロンコソ・パラディ・ジアンカルロス. 自動車利用可能性が高齢者の加齢に伴う外出抑制に与える影響に関する分析: 年齢, 健康状態, 歩行可能距離に基づく加齢指標を考慮して. 第57回土木計画学研究発表会, 東京, 2018. 6. 9-10.
- 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 市民主導型フレイルチェックの簡易チェックを活用したサルコペニア有症予測: 全国マルチデータベースから. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 13-15.
- 田中友規, 平野浩彦, 渡邊裕, 菊谷武, 中條和子, 佐藤哲郎, 鈴木駿介, 秋下雅弘, 飯島勝矢. オーラルフレイル簡易スクリーニング法の開発: マルチ観察データによる外的妥当性検証. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 13-15.
- 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 西本美紗, 飯島勝矢. フレイルチェック複数回参加者における健康関連セルフエフィカシーの向上. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 13-15.
- Suthutvoravut Unyaporn, 田中友規, 高橋競, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 西本美紗, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域在住高齢者における食事パターンとサルコペニアとの関連: 柏スタディー. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 13-15.
- 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, Suthutvoravut Unyaporn, 西本美紗, 飯島勝矢. ヘルスリテラシーの低下と4年後のフレイル有無との関連: 柏スタディーより—. 第60回日本老年医学会学術集会, 京都, 2018. 6. 13-15.
- 村上正治, 枝広あや子, 本川佳子, 小原由紀, 白部麻樹, 田中友規, 飯島勝矢, 平野浩彦, 岩佐康行, 渡邊裕. 咬筋体積の簡易測定法の検討とサルコペニアとの関連性. 第29回日本老年

歯科医学会学術集会, 品川, 2018. 6. 22-23.

- ・ 松田弥花. スウェーデンにおけるソスペッド (Social Pedagogue) の専門性. 日本比較教育学会第 54 回研究大会 (ラウンドテーブル), 東広島, 2018. 6. 22-24.
- ・ 麦山亮太. 転職が賃金上昇に与える影響とそのメカニズム: 職業と雇用形態の変化に着目して. 第 66 回数理社会学会大会, 会津, 2018. 8. 30.
- ・ 森泉寿士, 中村貴紀, 曹永旻, 鈴木貴, 武川睦寛. 数理解析を活用した SAPK シグナル時空間制御機構の解明. 数理シグナル 第二回・若手ワークショップ, 滋賀, 2018. 8. 31-9. 2.
- ・ 小川景司, 八木洋憲. 集落営農法人による収益分配とステークホルダー関係—滋賀県の多面的機能支払い実施集落の実態分析—. 平成 30 年度日本農業経営学会研究大会, つくば, 2018. 9. 1-2.
- ・ 藤原綾, 大野治美, 塩沢浩太, 佐々木敏. 諸外国の食事摂取基準: 食事摂取基準 2020 年版策定に向けて. 第 65 回日本栄養改善学会学術集会, 新潟, 2018. 9. 3-5. 査読有
- ・ 須沢栞, 新井信幸, 大月敏雄, 井本佐保里. 広域避難後の居住環境の変化に関する研究: 仙台市 A 地区周辺の災害復興公営住宅を対象として—. 2018 年度日本建築学会大会. 2018. 9. 4-6.
- ・ 宮本直之, 伊藤佑介, 吉崎れいな, 杉田直彦. ガラスの局所高自由電子密度化による超高速微細レーザ加工法の開発. 2018 年度精密工学会秋季大会, 函館, 2018. 9. 5.
- ・ Zhang T, Uchiyama E, Guan K, and Nakamura Y. Humanoids dense RGB-D SLAM in dynamic human environment, 第 36 回日本ロボット学会学術講演会, 愛知, 2018. 9. 5-7.
- ・ 内山瑛美子, 小原大輝, 田中友規, 中村仁彦, 高野渉, 飯島勝矢. 錯視課題を用いた奥行き方向の知覚能力の推定. 第 36 回日本ロボット学会学術講演会, 愛知, 2018. 9. 5-7.
- ・ 江間見亜利. Visual Inspection of scalp EEG by machine for seizure detection. 平成 30 年電気学会 電子・情報・システム部門大会, 北海道, 2018. 9. 5-8.
- ・ 藤原綾, 政安静子, 佐々木敏. 食品中糖類含有量データベース構築と日本人成人の糖類摂取量推定. 第 64 回日本栄養改善学会, 徳島, 2017. 9. 13-15. 査読有
- ・ 寺澤さやか. 女性の就労と不妊治療. 第 91 回 日本社会学会大会, 神戸, 2018. 9. 15.
- ・ 麦山亮太. 職業経歴からみる転職経験の意味: 転職者内の多様性を加味した縦断的分析. 第 91 回日本社会学会大会, 神戸, 2018. 9. 16.
- ・ 伊藤佑介, 吉崎れいな, 宮本直之, 長藤圭介, 杉田直彦. 局所高電子密度化によるガラスの超高速微細精密レーザ加工. 第 79 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋, 2018. 9. 18-21.
- ・ 櫻井友理希, Baeg Kyungmin, 吉川学, 泊幸秀, 岩川弘宙. 植物における二次的小分子 RNA 生成経路の試験管内再現. RNA frontier meeting, 2018. 9. 20. 査読有
- ・ 船城桐子, 伊東剛, 村上善則. 小細胞肺がんの悪性化における細胞接着分子 CADM1 の機能解析. 第 77 回日本癌学会学術総会, 大阪, 2018. 9. 25-28.
- ・ 吉田和憲, 蛭田智昭, 木下裕介, 梅田靖. 故障のシミュレーションを用いた故障診断手法の提案. 2018 年度精密工学会秋季大会学術講演会, 函館, 2018. 9. 28-29.

- ・ 金晃敏, 大月敏雄. 移動を伴う介護サービスの利用実態からみる利用者属性と時間距離の考察
福岡県大牟田市の介護給付明細データの分析. 日本建築学会大会, 仙台, 2018. 9.
- ・ 西野亜希子, 高田遼介, 福井千絵, 金晃敏, 大月敏雄, 西出和彦. 有料老人ホーム入居プロセスに関する事例研究. 日本建築学会大会, 仙台, 2018. 9.
- ・ 今枝秀二郎, 大月敏雄. 入院時インタビューと自宅訪問調査による高齢者の転倒実態の把握:
大腿骨骨折により東大病院へ入院した患者に対する調査より. 日本建築学会大会学術講演,
仙台, 2018. 9.
- ・ 小倉基嗣, 谷口紗貴子, 安田光佑, 中島綾香, 鈴木健吾, 山中大介, 伊藤公一. 加齢性認知機能低下における微細藻類ユーグレナ含有成分の効果について. 第161回日本獣医学会学術集会, つくば, 2018. 9.
- ・ 松田弥花. スウェーデンにおけるソスペッド (Social Pedagogue) の専門性に関する研究: ソーシャルワーカーとの比較から一. 日本社会教育学会第65回研究大会, 名護, 2018. 10. 5-7.
- ・ 林忠賢. 日本における公共複合施設の現状と課題. 日本社会教育学会第65回研究大会, 名護, 2018. 10. 6.
- ・ 今枝秀二郎, 孫輔卿, 内山瑛美子, 田中友規, 谷口紗貴子, 三好友良, スタッヴォラヴット・アンヤポーン, 馬場絢子, 角川由香, 松原全宏, 大月敏雄, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎. 入院時ベッドサイドインタビューと自宅訪問調査による大腿骨骨折患者の転倒状況の正確な把握. 日本転倒予防学会第5回学術集会, 浜松, 2018. 10. 6-7. 査読有
- ・ 前田一步. 明治後期・東京の都市公園の利用を問う: 計量テキスト分析を用いた新聞見出し分析による資料全体像の提示の試み. ソーシャル・コンピューテーション学会第8回研究例会, 東京, 2018. 10. 14.
- ・ 傅欧, 三坂巧, 箕越靖彦, 中島健一朗. 空腹に伴う味覚の調節を担う視床下部神経回路の同定. 第45回日本神経内分泌学会学術集会, 東京, 2018. 10. 27-28. 査読有
- ・ 田中友規, 高橋競, 西本美紗, Suthutvoravut Unyaporn, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 家族・配偶者・友人に不満がある高齢者は多面的なフレイルの有病率が高い傾向: 柏スタディ. 第25回日本未病システム学会学術総会, 東京, 2018. 10. 27-29. 査読有
- ・ 西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルの地域在住高齢者は食事の満足感や口腔関連 QOL が低い: 柏スタディより. 第25回日本未病システム学会学術総会, 東京, 2018. 10. 27-29. 査読有
- ・ 岡谷泰佑, 下山勲. 曲面表面を有する局所滑り覚センサの特性評価. 第35回「センサ・マイクログラフと応用システム」シンポジウム, 札幌, 2018. 10. 30-11. 1. 査読有
- ・ 伊藤佑介, 吉崎れいな, 宮本直之, 杉田直彦. ガラスの局所高電子密度化による超高速微細精密レーザ加工. 第18回国際工作機械技術者会議, 東京, 2018. 11. 1-6.
- ・ 北村智美, 千住秀明. 高齢慢性閉塞性肺疾患患者のセルフマネジメント行動の実態. 第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会, 千葉, 2018. 11. 9-10. 査読有

- ・ 田中友規, 筋肉量・運動機能の“見える化”が, 高齢者のフレイル予防に与える影響: 市民主導型フレイルチェック現場から. 第5回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2018. 11. 10-11.
- ・ 田中友規, オーラルフレイルへのアプローチを標準化する. 第5回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2018. 11. 10-11.
- ・ 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 市民主導型フレイルチェックへの参加は多面的なフレイル予防と関連する: 多母集団における前向きケースシリーズ研究. 第5回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2018. 11. 10-11.
- ・ 西本美紗, 田中友規, 平野浩彦, 菊谷武, 渡邊裕, 小原由紀, 古屋裕康, 飯島勝矢. 歯周病はオーラルフレイルのリスクを高める: 地域在住高齢者コホート研究 (柏スタディ) より. 第5回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2018. 11. 10-11. 査読有
- ・ Suthutvoravut Unyaporn, 田中友規, 高橋競, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 地域高齢者における食事パターンとフレイルの関連: 柏スタディー. 第5回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2018. 11. 10-11.
- ・ 秋月優里, 真鍋陸太郎, 村山顕人, 大方潤一郎. 斜面市街地整備と立地適正化計画: 長崎市江平地区および岩瀬道・立神地区を中心に. 2018年度 (第1回) 日本都市計画学会全国大会, 大阪, 2018. 11. 16-18.
- ・ 森泉寿士, 中村貴紀, 曹永旻, 鈴木貴, 武川陸寛. 数理解析を活用したSAPKシグナル時空間制御機構の解明. 第41回日本分子生物学会年会, 横浜, 2018. 11. 28-30. 査読有
- ・ 湖上碩樹, Qi An, 楊濤嘉, 山川博司, 田村雄介, 山崎弘嗣, Matti Itkonen, Fady Shibata-Alnajjar, 下田真吾, 服部憲明, 木野本誠, 高橋幸治, 藤井崇典, 乙宗宏範, 宮井一郎, 山下淳, 浅間一. 片麻痺患者の起立動作のリハビリテーションにおける理学療法士の技能と筋シナジーに与える影響の調査. 計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会2018講演論文集, 富山, 2018. 11.
- ・ 次郎丸奈美, 角川由香, 岩崎りほ, 藤崎万裕, 寺本千恵, 成瀬昂. 大学院保健師教育コースにおける農村地域での戦略型地域診断演習 (Ⅱ報: 経験). 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会, 山口, 2019. 1. 26-27. 査読有
- ・ 上野裕生, 熊谷和美, 西川瑛亮, 渡邊由桂, 田中友規. 誰もが暮らしやすい旭川の未来に向けた分野横的フレイル対策の検討. 旭川ウエルビーイング・コンソーシアム合同成果発表会報告, 旭川, 2019. 1. 30.
- ・ Uchiyama E. Analysis of depth perception dependency of stumble risks through a pseudo-visuospatial test. UTokyo-SNU Workshop on Robotics, Tokyo, 2019. 2. 20.
- ・ 馬場絢子. 介護様式決定プロセスの質的分析. 日本老年臨床心理学会第1回大会, 東京, 2019. 3. 3. 査読有

- ・ 森泉寿土, 中村貴紀, 曹永旻, 鈴木貴, 武川睦寛. 数理解析を活用したSAPKシグナル時空間制御機構の解明. 応用数理学会 2019年研究部会連合発表会, 筑波, 2019. 3. 4-5.
- ・ 須沢栞, 大月敏雄, 新井信幸, 井本佐保里, 李鎔根. 仙台市における市外被災世帯の居住地・住まいの変遷と世帯属性の把握. 2017年度日本建築学会関東支部研究発表会, 東京, 2019. 3. 6-7
- ・ 麦山亮太, 豊永耕平. キャリアを通じてみる学歴と上層ホワイト到達の関係: 専門職と管理職の異質性を考慮して. 第67回数理社会学会大会, 京都, 2019. 3. 7.
- ・ Mugiyama Ryota. Long-term Trends of Employment Trajectories among Women around First Childbirth. Japanese Association for Mathematical Sociology 67th Meeting, Kyoto, Japan. 2019. 3. 7.
- ・ 伊藤佑介, 吉崎れいな, 宮本直之, 柴田章広, 長澤郁夫, 長藤圭介, 杉田直彦. 高電子密度領域への選択的光吸収による硝子の超高速微細精密レーザー加工. 第66回応用物理学会春季学術講演会, 東京, 2019. 3. 9-12.
- ・ 宮本直之, 伊藤佑介, 吉崎れいな, 柴田章広, 長澤郁夫, 長藤圭介, 杉田直彦. 局所的電子励起領域へのレーザー光吸収によるガラスの超高速内部加工. 第66回応用物理学会春季学術講演会, 東京, 2019. 3. 9-12.
- ・ 本郷結希, 金子和樹, 木下裕介, 梅田靖, 個人化手続き設計のためのテンプレートの提案. 精密工学会 2019年度春季大会, 東京, 2019. 3. 13.
- ・ 内山瑛美子, 小原大輝, 味野俊裕, 田中友規, 中村仁彦, 高野渉, 飯島勝矢. 射影画像の提示による奥行知覚能力の評価. 第24回ロボティクスシンポジウム, 富山, 2019. 3. 14-15. 査読有
- ・ 小川景司, 八木洋憲. 集落営農法人によるステークホルダーマネジメントの選択と持続性: 滋賀県における実証分析. 日本農業経済学会 2019年度東京大学大会, 東京, 2019. 3. 30-31.
- ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 経営のアントレプレナーシップの決定要因および革新的経営管理への影響—都市近郊農業における立地特性と社会関係資本を考慮して—. 日本農業経済学会 2019年度東京大学大会, 東京, 2019. 3.

4. コース生受賞歴

■ 篠崎奈々

1. 「やずや食と健康研究所 2016年度助成研究 奨励賞」(篠崎奈々, 日韓台中における公衆栄養学教育・研究の現状と位置づけ及び歴史的変遷に関する文献研究) 2018. 4.

■ 吉田真悟

1. 「平成 29 年度農村計画学会ベストペーパー賞」(吉田真悟, 八木洋憲. 都市農業経営の多角化の採用要因と経営成果-東京都の農業経営を対象としたアンケートをもとに-) 2018. 4.
2. 「平成 30 年度東京大学大学院農学生命科学研究科研究科長賞」(吉田真悟. 都市近郊農業経営における多角化と持続的経営発展-日英を対象とした経営戦略論的接近-) 2019. 3.

■ 岡谷泰佑

1. 「日立東大ラボ・コンテスト『あなたの大切な人と暮らすロボット』優秀賞」(岡谷泰佑, 今枝秀二郎. 転倒予報ロボット Pureko/プレコ) 2018. 5.

■ 今枝秀二郎

1. 「日立東大ラボ・コンテスト『あなたの大切な人と暮らすロボット』優秀賞」(岡谷泰佑, 今枝秀二郎. 転倒予報ロボット Pureko/プレコ) 2018. 5.

■ 田中友規

1. 「第 2 回日本老年薬学会優秀演題賞」(田中友規, 秋下雅弘, Suthutvoravut Unyaporn, 飯島勝矢. 地域高齢者の『多剤併用 (Polypharmacy)』はサルコペニア新規発症リスクを高める: 柏スタディー) 2018. 5.
2. 「第 25 回日本未病システム学会優秀演題賞」(西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルの地域在住高齢者は食事の満足感や口腔関連 QOL が低い-柏スタディより-) 2018. 10.
3. 「旭川ウエルビーイング・コンソーシアム旭川市長賞」(上野裕生, 熊谷和美, 西川瑛亮, 渡邊由桂, 田中友規. 誰もが暮らしやすい旭川の未来に向けた分野横的フレイル対策の検討) 2019. 2.

■ 吉崎れいな

1. 「第 89 回レーザ加工学会講演会優秀ポスター賞」(伊藤佑介, 篠本凜, 長藤圭介, 吉崎れいな, 岩田大二郎, 長澤郁夫, 杉田直彦. ガラスのフェムト秒レーザ穴あけ加工におけるダメージ形成メカニズム) 2018. 5.
2. 「The 18th International Machine Tool Engineer's Conference Excellent Poster Award」(Ito Y, Yoshizaki R, Miyamoto N, Sugita N. Ultrafast and precision laser processing of glass by locally exciting electrons.) 2018. 11.

■ 森泉寿士

1. 「第 18 回 東京大学 生命科学シンポジウム 優秀ポスター賞」(森泉寿士. 数理解析を活用した SAPK シグナル時空間制御機構の解明) 2018. 6.
2. 「数理シグナル 第二回・若手ワークショップ 最優秀発表賞」2018. 9.
3. 「東京大学大学院 新領域創成科学研究科 メディカル情報生命専攻 ERA 優秀賞」2019. 3.

■ 麦山亮太

1. 「The RC28 Travel Awards at the 19th ISA World Congress, “Aage B. Sørensen

Award.”] (Mugiyama, Ryota. How Does Job Turnover Affect Subsequent Employment Instability? An Analysis of Inequality among Job Leavers in Japan.) 2018. 7.

2. 「日本社会学会 第17回日本社会学会奨励賞・論文の部」(麦山亮太. 職業経歴と結婚への移行：職種・企業規模・雇用形態と地位変化の効果における男女差) 2018. 9.

■ 内山瑛美子

1. 「日本ロボット学会第33回研究奨励賞」(内山瑛美子. 脳活動情報及び身体運動情報からの特徴量抽出による認知的フレイル評価に関する検討) 2018. 9.
2. 「日本機械学会女性未来賞」2019. 3.

■ 馬場絢子

1. 「The 9th Annual Association of Pacific Rim Universities Research Conference on Population Aging, the Best Poster Prize」(Baba A. Care Burden and Other Attitudes in Mother-Daughter Residential Caregiving Relationship.) 2018. 12.

■ 小川景司

1. 「農学生命科学研究科長賞」(小川景司. 水田経営のステークホルダー・マネジメントと持続性—滋賀県内の集落営農法人の実態分析—) 2019. 3.

4. 広報活動



超高齢社会において 「地域」を考える

このシンポジウムでは、東京大学高齢社会総合研究機構 (IOG) 及び、博士課程教育リーディング・プログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS) の教育・研究成果をもとに、超高齢社会を迎えた日本で、都市と地域の共生を考えます。

日時

平成31年 **3月9日(土)**
10時00分～16時30分
(受付: 9時30分より)

会場

東京大学本郷キャンパス
工学部2号館・大講堂

入場無料

【プログラム】

午前

10:00-12:00
GLAFS 共同研究成果報告会

(研究テーマ)

- 高齢者に対する就労支援の作り方
- 単身高齢者の在宅継続要因
- 弱っても暮らし続けられる住環境
- 住民主体のコミュニティ活動
- 高齢者支援技術のデザイン

午後

13:30-14:40
基調講演

「地域を創りなおす時代」～繋がりと循環の再生へ～

藤山 浩 (一般社団法人 持続可能な地域社会総合研究所 所長)

15:00-16:30

パネルディスカッション

パネリスト

藤山 浩 (一般社団法人 持続可能な地域社会総合研究所 所長)

井上信宏 (信州大学 学術研究部 社会科学系 教授)

菅原育子 (高齢社会総合研究機構 特任講師)

ファシリテーター

後藤 純 (高齢社会総合研究機構 特任講師)

プログラムの詳細は、ホームページをご覧ください。
<http://www.iog.u-tokyo.ac.jp> もしくは <http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp>



事前登録

Eメール: glafs-event@iog.u-tokyo.ac.jp

FAX: 04-7136-6677

お申し込みの際、お名前・ご所属・ご連絡先(電話番号、メールアドレス)・希望時間帯(午前のみ・午後のみ・全てに出席)をご記入ください。

申込期限: 平成31年 **3月7日(木)**まで

お問い合わせは、上記のEメールアドレスまたはFAXまでご連絡ください。

【主催】

東京大学高齢社会総合研究機構 (IOG)

博士課程教育リーディング・プログラム

「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS)

International Symposium

長寿者の 暮らしを支える

Assistive Products & Services Supporting Centenarians Lives

支援機器とサービス



参加無料
事前登録制

2018.6.27.WED 13:00-17:00

東京大学本郷キャンパス 福武ホール 地下2階 福武ラーニングシアター
FUKUTAKE Learning Theater, The University of Tokyo

主催：東京大学 新領域創成科学研究科 人間環境学専攻 生活支援工学分野
共催：高齢社会総合研究機構、新領域創成科学研究科 後援：日本生活支援工学会

世界規模で 90 歳、100 歳をこえる長寿者の数が急増しています。加齢にともない私たちの多くは身体機能、認知機能の低下を経験し、疾患や障害を抱えますが、自立した生活を営み続けるには、支援機器や支援サービスは不可欠です。自立と尊厳を持った豊かな暮らしのためには、支援機器や支援サービスはどうあるべきでしょうか、新しい技術の可能性はどこにあるのでしょうか。国内外での高齢者支援機器開発、老年学の最先端の研究動向を紹介し、超高齢社会の支援機器のあり方を議論します。



お申込み

参加には事前参加登録が必要です。
大会 HP よりご登録ください。

<http://www.atl.k.u-tokyo.ac.jp/centenarians>

WHO 神戸センター 高齢化とユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC) に関する研究の助成を受け、「日本の長寿に学ぶ支援機器の利活用 (主導研究員 二瓶美里)」の一環として行います。

Session 1 Assistive Technologies X Centenarians

世界が関心を寄せる日本の長寿社会と、それを支える支援サービス・支援機器について、アイルランドの研究者と日本の研究者がそれぞれの現状や取組みについて紹介します。



Professor Malcolm MacLachlan
Maynooth University

心理学およびソーシャル・インタラクションの専門家。WHO の支援技術に関するグローバル・コソレーション (GATE) プロジェクトの研究リーダー。発達上層の支援機器の開発に興味がある。



権藤 幹之
大阪大学 人間科学研究科 准教授

百寿研究の専門家。超高齢社会の福祉研究 健康長寿調査 (SONIC) の研究リーダー。豊かな高齢期の創造に向けて、高齢者中心で取り組む、高齢者の健康と幸福にどのように研究している。



Professor Eilish McAuliffe
University College Dublin

保健システムおよび保健サービスの専門家。高齢者ケアの改善への体系的アプローチを医療従事者不足の地域におけるタスクシェアリング・マネジメントなど、学際的かつ実践的研究活動を行っている。



井上 剛伸
国立高齢者福祉センター

福祉機器開発部 部長
福祉機器の専門家。福祉用具の国際標準化 ISO/TC113 の委員を務める。広い視野で高齢者に役立つ福祉機器の研究を進め、日本の支援機器の普及促進に尽力している。

Session 2 Experiences of Assistive Products Use among Older People in Japan

WHO 神戸センターのプロジェクトとして進めている調査研究「日本の長寿者に学ぶ支援機器の利活用」を紹介します。



二瓶 美里

東京大学大学院
新領域創成科学研究科
高齢社会総合研究機構
講師



ローゼンバーク 恵美
WHO 神戸センター
技官

公衆衛生学の専門家。世界的な高齢化が進む中、各国が国民の健康と福祉を向上し、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジを拡充することに資する研究を推進している。



菅原 育子
高齢社会総合研究機構
特任講師

社会心理学の専門家。友人関係、地域社会との関わり、職場での人間関係、周辺的人間関係が幸福や健康に与える影響に関する研究を行っている。

2018年度開講

超高齢社会を支える ジェロントロジー概論

(高齢社会総合研究学)



ジェロントロジーとは、高齢者や高齢社会の諸課題を解決するために生まれた学際的学問です。医学、看護学、理学、工学、法学、経済学、社会学、心理学、倫理学、教育学などの幅広い領域を包括します。2030年には3人に1人が65歳以上という超高齢社会を迎える日本では、専門分化した学問だけでは対応が難しい複雑な問題が生じてきています。ジェロントロジーを学ぶことは、将来どの専門領域に進む上でも非常に有用です。



学部横断型教育プログラム
ジェロントロジープログラム構成
(学部3・4年生対象)

選択科目 約50科目のうち8単位



必修科目 4単位

必修科目1
「高齢者の体と心：老いとつきあう」

必修科目2
「高齢社会のリ・デザイン」

▼ 計12単位分を履修

履修単位の付与 (各学部)



修了証の付与 (教育運営委員会)

※ 修了証の発行には、卒業年の4月(10月入学の方は10月)までに、UTASにて申請する必要があります。

総長室直轄の高齢社会総合研究機構では、ジェロントロジーに関する学際的教育基盤構築の一環として、2008年度より学部横断型教育プログラム「ジェロントロジー」を国内で初めて設置し、高齢者や高齢社会の諸問題に関する学際的な知識を有する学生の育成を行っています。あらゆる分野を目指す学生の参加を歓迎します。

必修科目シラバス

夏学期 高齢社会総合研究学概論Ⅰ 高齢者の体と心：老いとつきあう

学 部 工学部
時 間 水曜日6限 18:45-20:30
場 所 工学部11号館講堂
単 位 数 2単位
責任教員 大方潤一郎 (大学院工学系研究科都市工学専攻 高齢社会総合研究機構・機構長)

月/日	担当名	所属	テーマ
4/18	秋山 弘子	高齢社会総合研究機構	ジェロントロジー：長寿社会を支える学際科学
4/25	飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構	なぜ老いる？ならば上手に老いるには？
5/2	藤 輔郎	高齢社会総合研究機構	老化と生物学
5/9	秋下 雅弘	医学系研究科	疾病・障害とヘルスプロモーション
5/16	高山 緑(ゲスト)	慶応義塾大学	知的機能の変化と適応
5/23	阿部 啓子	農学生命科学研究科	栄養とエイジング
5/30	上野 千鶴子(ゲスト)	NPO 法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)	ケアの当事者学
6/6	伊福部 達	高齢社会総合研究機構	身体機能を補う福祉工学機器
6/13	牧野 篤	教育学研究科	シニアの学ぶ、働く、遊ぶ
6/20	戸枝 陽基(ゲスト)	社会福祉法人むそう	身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス
6/27	前田 信彦(ゲスト)	立命館大学	高齢者のライフスタイルの変化
7/4	会田 薫子	人文社会系研究科	人生の最終段階のケア
7/11	山本 則子	医学系研究科	高齢者と看護学

冬学期 高齢社会総合研究学概論Ⅱ 高齢社会のリ・デザイン

学 部 工学部
時 間 水曜日6限 18:45-20:30
場 所 工学部11号館講堂
単 位 数 2単位
責任教員 大方潤一郎 (大学院工学系研究科都市工学専攻 高齢社会総合研究機構・機構長)

月/日	担当名	所属	テーマ
9/26	大方 潤一郎	工学系研究科 / 高齢社会総合研究機構	活力ある超高齢社会の構想と共創
10/3	辻 哲夫	高齢社会総合研究機構	21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える
10/10	大月 敏雄	工学系研究科	高齢期の住まい方
10/17	濱口 桂一郎(ゲスト)	独立行政法人 労働政策研究・研修機構	年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用
10/24	岩本 康志(ゲスト)	国立国会図書館	人口減少社会における年金と社会保障財政
10/31	藤田 実	新領域創成科学研究科	高齢者の移動を変える
11/7	村山 洋史	高齢社会総合研究機構	高齢期の健康づくり：公衆衛生学の視点から
11/21	後藤 純	高齢社会総合研究機構	地域包括ケアシステムの地域実装(1)
11/28	関 ふ佐子(ゲスト)	横浜国立大学	自己決定と本人保護
12/5	柴田 龍子(ゲスト)	NPO法人 家	小規模多機能型居宅介護
12/12	廣瀬 通孝	情報理工学系研究科	シニア×ICT
12/19	白渡瀬 佳和子	人文社会系研究科	高齢化の人口学
1/9	関野 幸吉(ゲスト)	SOMPOケアメッセージ株式会社	地域包括ケアシステムの地域実装(2)

開講科目 夏学期

特論II 超高齢社会の住まい・まちづくり

内 容 超高齢社会に対応した地域社会の
物的・社会的な生活環境について、
多面的な講義を行う

開 講 日 4/10 - 5/29 毎週火曜 6・7 限 (18:45 - 22:25)

場 所 工学部 14 号館 141 室

キーワード まちづくり 交通・移動 バリアフリー
ユニバーサルデザイン 近居
高齢期の住まい 地域施設配置

特論IV 高齢社会のケア・サポート・システム

内 容 要介護状態でも住み慣れた地域で暮らし続けられる
医療・介護を中心とした高齢社会における
ケア・サポート・システムについて学ぶ

開 講 日 5/31 - 7/19 毎週木曜 5・6 限 (16:50 - 20:30)

場 所 工学部 8 号館 722 号室

キーワード ケア・サポート・システム 地域包括ケア
認知症ケア 多職種連携 地域アセスメント
在宅医療 訪問看護

特論III 人生100年時代のライフコース論

内 容 人生100年時代の到来にあたり、
「生きる」「老いる」「死ぬ」の実態と課題を、
心理学、哲学、教育学、社会学の
幅広い観点から議論する

開 講 日 4/10 - 7/10 毎週火曜 4 限 (14:55 - 16:40)

場 所 工学部 8 号館 722 号室

キーワード 現象学 エンドオブライフ・ケア 社会関係
格差社会 認知症ケア
サクセスフルエイジング 生涯学習

特論VIII 高齢社会の国際比較

内 容 超高齢社会における人口構造・社会構造・
社会政策に関して、国際比較の方法と、
社会的なアプローチを学ぶ

開 講 日 4/18 - 7/18 毎週水曜 3 限 (13:00 - 14:45)

場 所 文学部法文 2 号館 2 番大教室

キーワード 欧米諸国・東アジア・東南アジアの高齢社会
高齢者ケア・高齢者就労・介護者の国際比較

冬学期の
開講予定科目

特論I 福祉社会を支える制度体系 (月曜 6 限)
特論VI 高齢者法 (金曜 2 限)
特論IX 高齢者の食と健康(維持) (火曜 5・6 限)
特論X ジェロンテクノロジー (金曜 5・6 限)



2018年度

ジェロントロジー特論 開講

高齢社会総合研究学

東京大学では、高齢社会総合研究機構 (IOG) をハブ組織とし、9 研究科・30 専攻が連携して、
リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS) を推進しているところです。
本プログラムが開講する高齢社会問題に関する分野横断的な大学院講義 (高齢社会総合研究学 概論 I・II、特論 I~X) は、
リーディングプログラムのコース生に限らず、東京大学の全学の大学院生が受講できる科目となっております。
この問題に関心のある学生諸君は、是非、これらの科目を受講されることをお勧めいたします。

※場所は全て、本郷キャンパス ※各科目の単位数は2単位

IOG 東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

お問 合 せ : edu@iog.u-tokyo.ac.jp TEL/FAX 03-5841-1662
ホームページ : http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp

平成30(2018)年度
東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム
「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」
コース生 第一次募集・募集要項

1. プログラムの概要

(1) 本プログラムの教育研究上の目的

本プログラムは、修士課程から博士後期課程までの一貫した教育を行い、各研究科・専攻における教育を通じて「高度な専門的研究能力」を育成するとともに、本プログラム固有の教育カリキュラムを通じて、高齢社会問題に関する「俯瞰力」と、現実社会を変える「実行力」を育成し、もって、日本や世界各地の取組現場において、「活力ある超高齢社会」を実現する取組の担い手を育てる「世界レベルの博士人材」を育成することを目的としています。

(2) 養成する人材像

活力ある超高齢社会を共創する能力、すなわち、高齢社会問題に関する俯瞰的総合的知識と、特定分野における専門的研究能力に加え、分野横断的専門家チームを率いて課題解決に即する組織能力を備えた、博士レベルの人材。

(3) 本プログラムの履修要件と学位

本プログラムを履修する学生(以下、コース生と呼ぶ)は、所屬専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する高齢社会総合研究科に属する共通科目について20単位(講義10単位・演習10単位)以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位(講義10単位・演習8単位)以上を取得し、所屬専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所屬専攻が授与する博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が記されます。なお、原則として、博士前期課程(修士課程)において(4年制博士課程において12年度年度末まで)12単位(講義8単位・演習4単位)以上を取得する必要はありません。

2. 申請資格

本コース生に応募できる者は、2018年4月に下記の専攻の修士課程1年次・2年次または博士課程1年次に在籍する者で、高齢社会の諸問題の解決に資する研究における博士の学位を取得しようとする者に限られます。

工学系研究科: 社会基盤工学専攻、建築工学専攻、都市工学専攻、機械工学専攻、
精密工学専攻、化学システム工学専攻、先端工学専攻

人文社会科学系研究科: 社会文化研究専攻

教育学研究科: 総合教育学専攻、学校教育高度化専攻

法学政治学研究科: 総合法政専攻

総合文化研究科: 広域科学専攻

農学生命科学研究科: 生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、水圏生物学専攻、
農業・資源経済学専攻、生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻、獣医学専攻

医学系研究科: 社会医学専攻、生体・脳・神経医学専攻、外科学専攻、口腔保健学専攻、健康科学・看護学専攻

新領域創成科学研究科: 先端エネルギー工学専攻、メテオカル情報生命専攻、人間環境学専攻、
社会文化環境学専攻、国際協力学専攻

情報理工学系研究科: 知能情報学専攻

3. 選抜方法

コース生の選抜は、申請書類(申請者情報、研究計画、参加動機と将来構想に関するコメント、指導教員の意見書)、面接(注1)を総合的に評価して行います。

なお、今回の応募より選抜されたコース生のうち修士課程または医学系等の4年生博士課程に入学する者については、平成31(2019)年3月に資格試験(QE-1)を行い、2年次以降、引き続きプログラム履修が許可される学生を選抜します。3年制の博士課程(博士後期課程)に入学する者、すなわち本コースの博士後期課程への編入者については、平成31(2019)年3月に博士論文着手報告審査(QE-2)を行い、本コースの4年次への選抜が許可される学生を選抜します。

(注1) 面接は申請受付後、順次行う予定です。面接の日時は応募者の都合に合わせて設定します。

4. 募集人員

今回の募集人員は、修士課程入学予定者、博士課程入学予定者、合わせて30名です(編入者含む)。
なお、平成30(2018)年4月に第2次募集を行う予定です。

5. 申請手続

(1) 申請方法

ア. 申請方法 申請書類を下記(ウ)宛に郵送または直接持参すること。
イ. 受付期間 平成30(2018)年2月19日(月)から3月7日(水)15:00まで(必着)。
ウ. 受付窓口 東京都文京区本郷7丁目3番1号 工学部8号館階113
東京大学高齢社会総合研究機構
リーディングプログラム CLAYS 担当
問い合わせ先 inf@ghs.u-tokyo.ac.jp

(2) 申請書類等

ア. 履修申請書 所定の用紙に所要事項を記入したものを。
イ. 教員の意見書 所定の用紙に指導教員または専攻のプログラム担当教員が記載し、厳封したものを。

6. 選抜結果発表及び採用手続

(1) 選抜結果の発表は、平成30(2018)年3月14日(水)13:00に高齢社会総合研究機構掲示版に掲示するとともに、申請者全員に対し、選抜の結果をメールで連絡します。
(2) 採用手続開始は、平成30(2018)年3月14日(水)13:00から、高齢社会総合研究機構で配付を開始します。採用予定者は、採用手続要領より、平成30(2018)年3月23日(金)15:00まで必要書類を提出し、採用手続書類の提出を行ったうえで、所定の期間中に採用手続を行わない場合は、採用予定を前送したものとさせていただきます。

7. 奨励金の支給

QE-1に合格し、博士課程進学の意思を表明した博士前期課程(修士課程)2年次のコース生には月額6万円～15万円の学習奨励金、博士後期課程のコース生には月額15万円～20万円の学習奨励金を、**学業成績等**に依り、支給します。なお、学習奨励金の支給を希望するコース生は、原則として、日本学術振興会特別研究員(DC1・DC2)に応募していただきます。

なお、奨励金を受給した場合は、日本学生支援機構奨学金等の受給やアルバイトはできません。ただし、通学時間を限度として、TAに兼任する研究補助者としての業務や、医師資格等を得たコース生が臨床実習に従事することは認められます。また、奨励金を受給した場合は、納税として所得税の確定申告が必要となります。年間所得に応じて、健康保険等の扶養家族から外れることがあるので留意してください。本プログラムを履修する場合でも、奨励金の支給を前送することができます。また、本人の意思により奨励金の減額を申し出ることができます。

学習奨励金の支給額については、本プログラムの予算削減等の、やむをえない事情により、上記の額より減額することがあります。

* 本プログラム終了後、すなわち2020年4月以降の学習奨励金の支給については、現在とは同様の条件で継続する予定です。

8. 注意事項

- ① 受付期間中に必要書類が不足しない申請は、受理しない。
- ② 申請手続終了後は、どのような情報があっても、書類の変更は一切認めない。
- ③ 事情上、申請手続終了後に変更することがある場合は、変更があった場合は、改めて通知する。
- ④ 申請に当たって知得た氏名、住所その他の個人情報については、①履修者選抜(申請処理、選抜実施)、②採用者発表、③採用手続業務を行うために利用する。また、個人情報情報は、採用者のみ①学務関係(学籍、修学等)、②学生支援関係(就職支援、授業料免除申請等)に関する業務を行うために利用する。
- ⑤ 申請書における記載内容について虚偽の記載をした者は、採用後においても退学処分を受ける可能性がある。

9. 説明会

- 募集に関する説明会を下記日程で行う。
第1回説明会 2月5日(月) 18:00～19:00 工学部8号館02号室
第2回説明会 2月19日(月) 18:00～19:00 工学部8号館02号室
第3回説明会 3月1日(木) 18:00～19:00 工学部8号館02号室

問い合わせ先 inf@ghs.u-tokyo.ac.jp

10. その他

2018年度オリエンテーションを下記日程で行う予定です。
※ 参加者は出席すること。

2018年度オリエンテーション 4月14日(土) 午後

平成30(2018)年1月

【添付資料】 2018 年度 学生募集要項

発行者：東京大学 高齢社会総合研究機構

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

発行日：2019 年 4 月 20 日

D T P：理想社

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo



Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

2018 Project report

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

東京大学 高齢社会総合研究機構

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo